油繪・水彩畫・素描の描き方

鶴田吾郎
曾宮一念
氏著及畫

洋畫を學ぶ人々の爲めに、親切丁寧に説かれた唯一の洋畫手ほどきである。先づ素描の意義より石膏寫生素描技巧線描等。水彩畫材料と用法畫法寫生及注意等。油繪材料と用法構圖實習風景人物靜物等其他四拾章。

四六版最美裝
口繪數拾葉
價壹圓七拾錢
送料金拾錢

ペン畫の描き方

樺島勝一
氏著及畫

我國ペン畫界の第一人者にして歐米の大家に比すべき著者が、多年の經驗を披瀝して、ペン畫を學ぶ人々の爲めに親切丁寧に説かれた唯一のペン畫の獨習書である。

四六版最美裝
口繪數拾葉
價壹圓參拾錢
送料金拾錢

大正十五年七月十五日印刷
大正十五年七月二十日發行

【定價金貳圓】

藤村の歩める道

著作者　山崎斌

發行者　米林保吉
東京市日本橋區下槇町十二番地

印刷者　石上文七郎
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

印刷所　遠藤印刷所
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

發行所　弘文社
東京市日本橋區下槇町十二番地
振替東京三七六九番

附　記

A　以上の表にある＊印の分は、あるひは合本とし、あるひは選集とし、あるひは複刻本として出せしもの（藤村讀本のごとく少年青年のために別種の編成によつたものもある）

B　若菜集、夏草、一葉舟、落梅集（以上詩集）、綠葉集、食後、朝飯、水彩畫家（以上短篇集）、新片町より、後の新片町より、平和の巴里、戰爭と巴里（以上感想集）、藤村文集（詩集前後の散文集）――は合本又は後の複刻改題等の理由により絕版となつてゐる。

C　破戒、春、家は最初自費出版として上田屋より發賣したものであるが、後に新潮社より出版して今日に及んでゐる。

童話集　をさなものがたり　同　研究社

或る女の生涯　藤村パンフレット第一輯　同　新潮社

三　人　藤村パンフレット第二輯　同　新潮社

藤村感想集　中村星湖編　＊　同　人文會發刊

處女作集　復興版＝水彩畫家改題　＊　十四年（一九二四）　春陽堂

感想集　淺草だより　新片町より後の新片町より合本　同　春陽堂

感想集　春を待ちつゝ　同　アルス

伸び支度　藤村パンフレット第三輯　同　新潮社

島崎藤村集　現代小說全集第九卷　＊　同　新潮社

ローマ字譯　ふるさと　日本のローマ字社譯　十五年（一九二五）　日本のローマ字社

藤村讀本　全六卷　＊　十五年（一九二五）　研究社

童話集　幼きものに　六　年（一九一七）實業之日本社

航海記　海　へ　七　年（一九一八）實業之日本社

小　說　櫻の實の熟する時　八　年（一九一九）春陽堂

詩　集　愛の詩集（藤村詩集拔萃）＊　同　春陽堂

長篇小說　新　生（上卷）　同　春陽堂

長篇小說　新　生（下卷）　同　春陽堂

ローマ字譯　藤村詩集　鳴海要吉譯　＊　同　研究社

童話集　ふるさと　九　年（一九二〇）實業之日本社

感想集　飯倉たより　同　アルス

旅行記　佛蘭西紀行　別名「エトランゼエ」　同　春陽堂

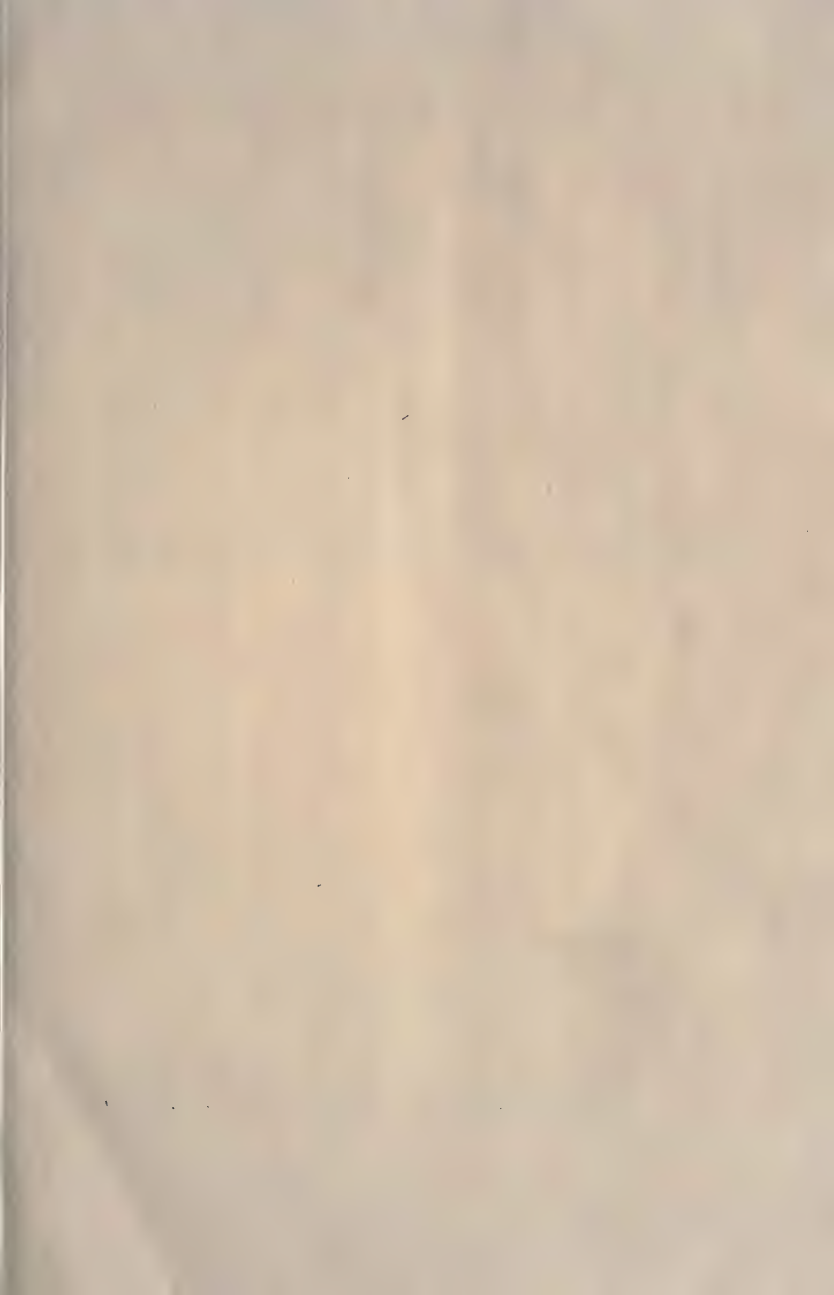
藤村全集（全十二卷）＊　十一年（一九二二）國民圖書株式會社

藤村創作選集　千曲川のスケッチ、藤村集、食後の合本（上下二卷）＊　十三年（一九二三）春陽堂

長篇小説	家	緑蔭叢書第三編	四十三年（一九一〇）	上田屋
短篇小説集	食後		四十五年（一九一二）	博文館
小品集	千曲川のスケッチ		大正元年（一九一二）	佐久良書房
短篇集	朝飯	現代文藝叢書第二十編 緑葉集改題 *	二年（一九一三）	春陽堂
短篇集	微風	緑蔭叢書第四編	同	新潮社
童話集	眼鏡	愛子叢書第一編	同	實業之日本社
感想集	後の新片町より		同	新潮社
長篇小説	春	代表的名作選集第五六巻 *	三年（一九一四）	新潮社
感想集	平和の巴里		同	佐久良書房
感想集	戰爭と巴里		四年（一九一五）	新潮社
短篇小説集	水彩畫家	名家傑作集第四編 朝飯改題	五年（一九一六）	春陽堂
散文集	藤村文集 *		同	春陽堂

藤村著書年代目錄

詩集	若菜集		明治三十年（一八九七）	春陽堂
詩文集	なつくさ		三十一年（一八九八）	春陽堂
詩文集	一葉集		三十一年（一八九八）	春陽堂
詩文集	落梅集		三十四年（一九〇一）	春陽堂
詩集	藤村詩集	以上四集合本＊	三十七年（一九〇四）	春陽堂
長篇小說	破戒	綠蔭叢書第一篇	三十九年（一九〇六）	上田屋
短篇小說集	綠葉集		四十年（一九〇七）	春陽堂
長篇小說	春	綠蔭叢書第二編	四十一年（一九〇八）	上田屋
短篇小說集	藤村集		四十二年（一九〇九）	博文館
感想集	新片町より	文藝入門叢書第一編	四十二年（一九〇九）	佐久良書房

袖津猛氏と秦慶治氏
（綠蔭叢書の刊行はこの二人の援けによつて成る）

「星まで、高くとべ。」*——

* 先生の「幼年いろはかるた」より

を見るに便宜な境地にあらしめたものではあつたけれど。……いま、この明朗な境地に這入られた先生に在つては、次の私の樣なものの言葉にも、微笑を見せて下さるだらうと期待される。「もう、こゝまで來た先生は、機會に祝福されては、敢然と再婚の中にも赴かるべきではないか、しかして、そこに更に自然なる、よき簡素の生活を完成されべきではないか。」

先生の家を中に幼きものは、すべて伸び立つた。母親とその生命を取替へる樣にして出て來た末の女の子さへも、既に早く母の用意に取かゝる程の娘になつてゐた。……先生は、昨年の秋の頃から、その子等と「星」を夜の空に見ることをはじめられたといふ。

黑い夜の空に、また仄白い星夜の空に、その眼をはなつて先生は、何を見、何を思ふ人であらうか。――それは兎も角、子等のためには、簡單な星座の名を語り、或は、その傳説を語りつゝ、……高く、美しい星座を指ざして、よき「生の跳躍」を暗示する先生の姿――若きものの手を引いて立つ先生の姿がそこに思はれるのである。

好い言葉ではないか。私達が今持つてゐるものは銅貨や銀貨ばかりでも、長い一生の間にはそれを金貨に變へることも出來るとある。』A

「春を待ちつゝ」を開くと、綠雨の言葉が掲げてある。

『「若いうちは少しは氣障(きさ)なくらゐであれ。」とは齋藤綠雨の言葉である。さすがにこの世を苦勞した人の言ひさうなことである。』B

さう言へば、先生の長い友人、柳田國男氏は、先生の暗かつた半生に對して、こんな言葉を言つてゐられる。

『私は友人たる島崎君に、今少し氣輕な平たいありふれた人生が見せたかつた。』Cと。また――『百草を嘗めて始めて醫藥ありといふ話をする度に思ひ出すのは島崎君であつた。そして島崎君の味は若かつた。』と。

それはおもしろい言葉だ。――勿論、先生にあつて、その寂寞な生活は、よく他の見得ざる

A 讀本 3―4　B 春を待ちつゝ 167　C 文章往來 1―5

りでもしたやうに思つた。』*

「讀本」もそこに生れた。「いろはかるた」もそこに生れた。「三人」もそこに生れた。「明日」もそこに生れた。「春を待ちつゝ」もそこにうまれた。「嵐」といふ樣なのも、うまれ樣としてゐる。更に更に、よき、その光りの子が先生のこれからのよき晩年の中に產れて來るだらうと思ふのも樂しいことではないか。

「讀本」を開くと、ギョエテの言葉の引かれてある、樂しい小話がある。

『ある人の言葉に、

「わたしもこれで年の若い時分には、ろくなものを持つて居ませんでした。自分の持つて居るものは、まあ銀貨や銅貨ばかりでした。だん〳〵この世の旅をしてまゐりますうちに、いろいろな人に逢つて、自分の持つてゐた銀貨や銅貨をその人達の金貨と交換して貰ひました。年をとつた今になつて見ますと、若い時分の銀貨や銅貨がそつくり金貨に變つたやうに見えますよ。」と。

* 春を待ちつゝ 129

つめてゐたといふことも出で居る。もうまもなく六十に手の屆からとするストリンドベルクに、なほそれほど青春を愛する心があつて、それがまた深い印象を與へたとあるあたりは、いかにもあの詩人の姿を私達の眼前に彷彿せしめる。』＊

若者萬歳――

先生も、また、機會にはそれを言ふ人でなからねばならないと私は思ふ。…茲に、先生が舊い學窓を思ふ感想がある。それは、あの明治學院の校庭に殘し植ゑて來た卒業記念樹の楠の樹に關してゞある。

『風のたよりに聞けば、今の學校の生徒が休みの時間毎に、夏の樹蔭でも樂しみに行く場所は、私の植ゑて置いた記念樹の周圍であるとか。あの樹の古くなつたことは、そんな話を傳へ聞いたばかりでも想像せらるゝ。どうかするとあの樹の枝には生徒が鈴なりに生ることもあるといふ。生れ。生れ。學生諸君から見ればあの樹は舊い卒業生の形見で、私達から見ればあの樹は年とつた自分等も同じことだ。私はその話を聞いた時に、若い人達が來て自分の腕にぶらさが

＊ パンフレット 142

その精神は眩い焔を出して燃へてゐる。私の見たところでは、その前の話が前の時代よりはもつと多く輝しい思想から出て居る。良く研いてあるやうに鋭いと共に優しく、陰影に富んで、その言葉は豐富で、繪のやうで、熱があつて若々しい。それこそその反對者がほんの羨望から(老いたるストリンドベルク)と名付ける人であつた。」

これがあの本の中に書かれてあるストリンドベルクの老年の姿だ。この肖像は、いくらか濃い色に出て居るかも知れないが、しかし彼の死後にその若い愛人によつてこんな風に描き傳へられたといふことも、おもしろい。

劇場の記念日に、雷鳥を一羽買つて來てみんなで祝ふ晩の記事は、あの本の中での樂しい頁の一つだ。曉方の四時になつて漸くその騷ぎも終らうとする頃、いよ〳〵解散といふ時はストリンドベルクは改まつて、帽子を執つて、

「若者萬歳」

と叫んだといふことなぞが出てゐる。その帽子を振り廻した時に、ストリンドベルクの頭の上に懸つて居た電燈の笠にぶつかつたので、彼は顏を擧げ、電燈の方を見つめながら、上から照されたまゝ、うつとりとしたやうにぢつと立つて居たといふことも出てゐる。そこに集まつた人達はみんなその姿を長い間見

て來た白い蛇だ。燐の光の流れるといふ熱帶の船の上にも、並木も暗い異郷の石造の室の中にも、そのたぐろを卷いてじつとその眼を半眼に、……見るべきものを見て通つて來た白い蛇だ。その瞳もそこには朗らかに澄み、その白髮は、いま故郷の山上の夕陽に、その耀きを輝かす白い蛇だ。それは永遠の生命を約束されてゐる樣な白い蛇だ。全くそこに、ズヰデンボルグの所謂「天使は絶へずその青春期に進みつゝある、斯くて最も老いたる天使は最も若く見える」とあるその白い蛇だ。——それにしても、先生の「生の跳躍」その光と耀きとは、私共に常に鮮らしく、その若々しさをおもはせるものである。

私は、こゝに、もう一つ、先生の感想「蠅」* に出て來る、ストリンドベルクの晩年についての言葉を擧げて見たい。

『「つくづくこの詩人の腰掛けてゐるものを見てゐると、電燈の光が太陽のやうにその硬い白い捲髮を照してゐる。ストリンドベルクの顏は最近に前よりも痩せて來た。昔より立派な樣子になつたのである。態度や擧動にある力は前と變らない。すべての樣子の上に一の生命がある。すべて新しくなつたやうである。

* フアンニイ・フアルクネル著「青い塔の中のストリンドベルク」に關する感想。

『お家の土藏には年をとつた白い蛇も住んで居りました。その蛇は土藏の「主」だから、かまはずに置けと言つて、石一つ投げつけるものもありませんでした。不思議にもその年とつた蛇は動物園にでも居るやうに溫順しくして居てついぞ惡戲をしたといふことを聞きません。父さんはめつたにその蛇を見ませんでしたが、どうかすると日の映つた土藏の石垣の間に身體だけ出しまして、頭も尻尾も隱しながら日向ぼつこをして居るのを見かけました。』＊

年をとつた白い蛇。——その叡智の瞳に、何も彼をも、靜かに深く見て來てゐるその眼もいまは優しいのではないか。雨も、霧も、霜も、雪も、そして嵐もの中に長く生きて來て、いまはそれの眞の意味をも知つた樣な、靜かなその生物はまた、老齡、ます〳〵その鱗の銀の耀きを增して、いよいよ美しく、いよ〳〵若いもので有り得てゐるものではないだらうか。

さあ、私はこゝで言ひたい。——

「先生も、若いナア。」と

——これはまた、太陽と同じ樣に、東の島國をも、西の大陸をも、また南極の方の星をも見

＊ 全集 10—465

しが覺えて居るだけでも、太陽の齡はことし五十三Aにもなる。そのわたしの知らない以前の齡を加へたらあの太陽が、何程の高齡な老年であるとも、ちよつとそれを言つて見ることも出來ない。

人が五十三もの年頃になれば、衰へないものは極く稀れだ。髮は年每に白さを增し、齒も缺け、視力も衰へ、曾て紅かつた頰にも古い岩壁の面のやうな皺を刻みつける。そこには附着する苔のやうな皮膚の斑點をさへ留める。多くの親しかつたものも次第に死んで行つて、思ひがけない病と、晚年の孤獨とが、人を待つて居る。このわたしたちの力弱さに比べたら、太陽のことは想像も及ばない。絕え間のないあの飛翔と、あの奮躍。夜每の沒落はやがてまた朝紅の輝ぎにと進んで行くあの生氣。まことの老年の豐富さは、太陽を措いて外にはない。それにしても、この世で最も老いたものが最も若いといふことには、わたしは心から驚かされた。』B

さう言へば、私は、あの幼い日の先生の思ひ出の「木曾谿」の中に、不圖して書き洩して來た「白い蛇」のことを、こゝに書きつけたい——丁度書きつけるにいゝと思ふものである。

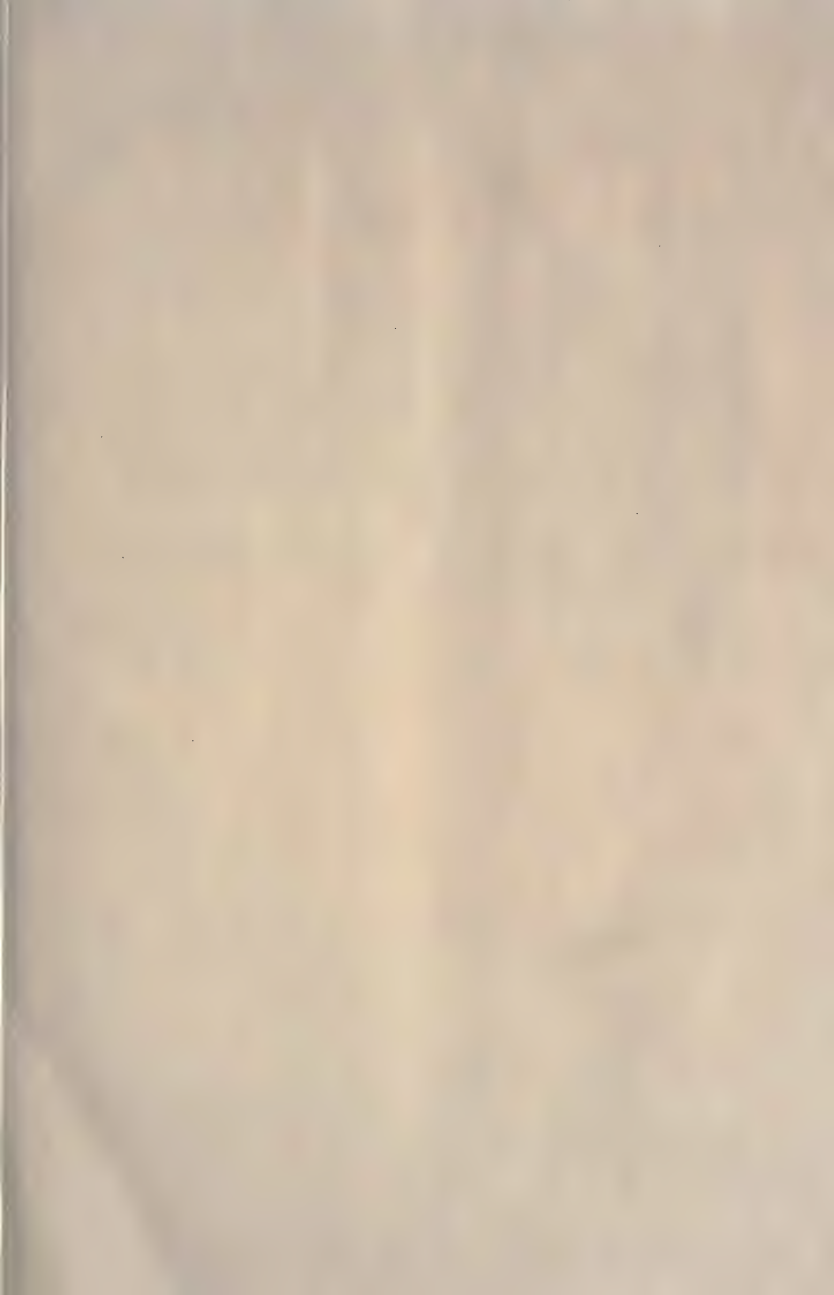
A 大正十三年(先生五十三歲)　B 春を待ちつゝ 225 (太陽の言葉)

て行つて、南から歸つて來た樣な人だ。そして、そこで私共の知らない星を天のかなたに見て來た樣な人だ。そして、それでこそ船の方角を考へ定め、また指して吳れることの出來る樣な人だ。

言葉より言葉へ、思想より思想へ。——或は捉れするぎるのではないかと、或は未練氣が多すぎるのではないかとまで思はれるほどの處を、遂にはその爲に、却つて劇しくも、强くも破り去り、破り進んで、玆にまで來られた先生の行路は多艱にもまた遙かだ。

——しかも「木曾路」を出て、遠く離れ、また環は歸る、今日の故鄕に近くなるまで、暗くもそこに糾ひ巡つてゐる憂鬱の影に、また斷續してゐる太い衝動の陰に、長く細々としてつゞいて來てゐる一筋の道があるのは樂しい。……そして、その一筋の道の上に、先生がいまは、靜かに迎へることを——自らにそれを揭げやうとしてゐる「太陽」をおもふのは樂しい。

「今のわたしが想像する太陽とは、もう餘程の年齡のものだ。物心づいてからこのかた、わた

楠樹（明治學院卒業紀念樹）

星

「太郎よ、お前は北極星のことを知つてゐませう。しかし南の方に同じやうな星のあることは知りますまい。

赤道を南へ越すと、この星が見えて來ます。四つの星が南極の方角を示して居ます。その四つの星が、すこし斜めに十字形を描いて居ます。南十字架の星と言ひました。水夫等はその光を見て、船の方角を考へ定めることが出來るのでせう。遠い南の天のかなたに、父さんもその美しい光を放つ兄弟のやうな星を望んで來ました。」*

――これは「幼きものに」の第六十四話であるが、さう言へば、先生は、故國を北に出發し

* 全集 10—404

ことを信じてゐる父らしい先生の面影を、その山上に想像し得られるのでもないか。

五月には、鶏二さんが、更にこの山上の方へ移つて行つた。この人は川端研究所に畫を學んだ人であるが、畫作のかたはら兄の農業を助けやうといふ志に赴いて行つたのであつた。

故郷は、近くなつた。

「苦勞した創作より、こんなのが、案外長く世の中に殘つたりするとなると、世話アありませんね。――」

私は、そんなへらず口をまでそこに言ひ出したのであつた。

病弱三年。それでも、もう健康はこゝに全く回復に近くなつた樣であつた。五月には、末女の柳子さんを伴れて鄕里の若い新綠にまで旅をされた人であつた。それは樂しい旅であつたらしい。買つて與へた新らしい農家は先生の長子を主人として、なつかしい山上に建つてゐた。その庭には曾て全村大火のために家と共に燒失したと見られてゐた思ひ出の故家の庭の古い椿が、また白い花をつけた牡丹が、再び芽を吹いて、…そこに移し植ゑられてあつた。また、その家の中から、西南に開けた空の下に美濃平野の幼くて見馴れた展望があつた。

憧憬の心。――先生を長い暗い半生の中にも耐えることをさせた生の肯定は、この空の開けた山上に、早く影響され、育てられてゐた憧憬の心を母體としたものではなかつたか。さう言へば、…この父を導いたこの自然が、またこの子を新らしい「明日」の道へも導くであらう

ことは不當であらうか。

實行——さう言へば、、先生は更に、「幼年いろはかるた」の創作にも從つてゐられるのだ。

いぬもみちをしる（犬も道を知る）

ろはふかいみづ　さほはあさいみづ（艫は深い水、棹は淺い水）

はなからてうちん（鼻から提灯）

にはとりのおはようもさんど（鷄のお早うも三度）

ほしまでたかくとべ（星まで高くとべ）

とらのかはじまん（虎の皮自慢）

ちいさいときにあつたものは　おほきくなつてもある（小さい時に有つたものは大きくなつてもある）

先生は、私に、微笑された。

「島崎がまた馬鹿なことをやる。——すこし、もうろくしたかナ、なんて言はれさうですね。」

「あははゝ。——」

二人は、遂に、高い笑ひ聲をまであげて笑つたのであつた。明るい先生の笑ひであつた。

た。

私は、こゝに、あの「飯倉だより」の中にある「ルウヂンとバザロフ」に先生が書きつけてゐる「實行を思ふ藝術家の心、——」の問題を思ひ浮べる。

『ロマンチツクな精神の究まつたところに、實行を思ふ心があると言つた人もある。そのあらはれて來る形式の相違こそあれ、私はすべての藝術家がいつかは生涯の中に逢着する重荷ではないかと思ふ。』*

私は、玆に更に、先生が「處女地」に從はうとせられた頃に、その唇を洩れたものだといふ、次の嗟嘆を思ひ出す。

「どうも今日でも未だ女子供のために何事かを企畫することは、輕視される傾きがある」

——といふのが、それであつた。しかも、先生は早くこれを凌駕して旣にその實行に從ひ、こゝにはまた、子供の世紀に係るこの實行を成されたものだと「讀本」刊行を見ることは不當であらうか。先生は誤解されてゐる、先生の如きこそ眞の意味に於て民衆に係るものだといふ

* 全集 12—443

大正十五年、先生五十五歳の二月、「讀本」六巻は、研究社から發刊された。

『少年期より青年期にうつりかはるころの年若き人々のために』

と、先生は、それを巻頭に書き、また次の言葉をその「はしがき」に書きつけた。

『大人の讀物にはまだ早く、さうかと言つてもうお伽話でもないといふやうな、さういふ年も若く心も感じ易い年頃の兒等が今、私の側にある。

少年の夢から廣い現實の世界へ――もつと適當に言へば、さういふ二つのものの混り合つた世界の方へ年若い人達を案內したい心から、私はこの讀本を用意した。どうかして私は、大人の世界へ行くまでの出來るだけの支度を自分の兒にもさせたい。

こゝには父としての私の書いたものしかない。私の步いた足跡しかない。しかし私はこの讀本を通して、曾て自分の心を新鮮にして呉れた自然の前へも、曾て自分の懇意にしたいろ〱の人達の前へも、年若き讀者を連れて行きたいと思ふ。』*

それは長い間の述作の中から、自選し、整理し、第一より第六までに、心をこめて自らその編み變へをしたもので、ある意味での自傳でもあり、又小說以外の選集とも言はるべきであつ

* 讀本第三巻

好きな千兩もその赤い實をつけてゐた。……そして、私はそこに、しばしば、机の上に置かれるたびに音を立てるらしい、ペン軸の音をきいてゐた。

——それは、あの大きい、握り太の萬年筆の立てる音であつた。そこには、言葉を愛する先生が、するどく、また今は優しいその眼光を、鶯茶色の罫をほどこした自用原稿紙の上に集めて、——まづその口の中にほぐれて來る言葉をその紙の上に展べて行く端然たる姿が思はれるのであつた。……ペンを搦く、そしてその右の手は口邊の髯の伸びかゝつたものに行くこともあらうその姿が思はれた。そして、尙そこには、あの机上の、大型のアテナインキ瓶の靜かさが思はれた。またそのインキが染めて行く、肉太のこくめいな先生のその文字の正しさが思はれた。それにしても、この癖の無さそうな美しい文字に、癖も癖、大變な癖のあるのも樂しいと微笑を思ふ私がそこにはあつたのであつた。

……その眞の「美」を語り、「春」を語る金玉の感想はそこには早く「春を待ちつゝ」の一卷をなしてゐた。尙「藤村讀本」の編纂に從はれたのも、この當時のことであつた。

この飯倉片町に移り住んでから最早足掛八年にもなつた。
「現代小説選集」の第九巻として自分の集も出ることになつた。その印税で、郷里の神坂村の方に賣物に出た一軒の農家を長男楠雄のために買取ることにした。彼も三年の耕作の見習ひを終りかけて、どうやら若い農夫として立つて行けさうに見える。さういふ自分は未だに飯倉の借家住居で、四疊半の書齋でも事はたりると思ひながら自分の子のために永住の家を建てようとすることは、我ながら矛盾した行爲だ。けれども、これから新規に百姓生活に入つて行かうとする子には、小さいながらも寝る場所と、物を食ふ爐邊と、土を耕す農具の類からして求めてあてがはなければならない。今のところ、それより外に自分の執るべき方法もない』*

病後の健康は、未だ全く回復しないので、先生はこの一二年を靜かに〱暮してゐた。……
私はその當時のある日、短かいものの執筆に從つてゐられた時に、先生を見に行つたことがある。すぐに濟む處だから、少し待つ様にといふので、私は、黒い土に山茶花の若木が花をつけてゐる様なその庭の方の、椽の籐椅子に行つて、それの終るのを待つた。その庭には、まだ丈高い棕櫚の樹があつた。またこれは丈の短い棕櫚の幾株があつた。若い薔薇もあつた。先生の

* パンフレット 3—111

中に書かれてあるのを知るも樂しい。また、ともすれば、先生を思ふことに聯想されるセザンヌに、——

『私は毎日進歩してゐる、私の本領は是だ。』＊

——といふ、金口があるのも樂しい。それがまた、すつかり、先生の心の姿らしく思へて來るのも樂しい。

それにしても、この「若い日本」の中に、殊に、國學的の家に生れ、基督教的教養に育ち、しかも純日本的の詩魂をもつて暫く洋詩に傾倒し、遂に異國の窓にその空氣を呼吸し、更に海の洗禮を受け、そして故國の懷に再び歸つて來た樣なこの人——先生が、この明朗にして、よき普遍なる心境に臨まれたのを思ふと、そこにいよいよ、期待するに樂しい先生の、よき晩年が思はれて來るのではないか。

『郵便局へ二町。煙草屋へ二町。湯屋へ三町。行きつけの床屋へも五六町はある。どこへ用達に出掛けるにも坂を上つたり下つたりしなければならない。慣れて見ればそれも不便とは思はずに、芝の櫻川町から

＊ 全集 12—431

「三人」はその文字に、完結してゐる樣に、——所謂、「新時代」と稱ばれる程の惱ましい、近代の處女の悲苦を描いたものであるが、それは同時に、夜明けはいつ來るかと暗く、力かなしく待つてゐるそれら日本の女性の群像を描いたものとも言ひ得る普遍性を持つものであつた。即ち、新らしくことに展けた藝術境からは、その單一に歸つた選ばれたる響きを、よき普遍にまで、擴げて行くものがあつた。

よき普遍——それを、私は、かの芭蕉が遂に、到達した句境に見るものである。そして私は、それを日本文學の精華とするものである。

おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな

よく見れば薺花さくかきねかな

——その芭蕉の句境を思つて見ながら、先生が「三人」の境地に到達されたことを思ふと樂しい。……『これを徳川時代に見ても、芭蕉のやうな眞詩人の天稟と熱情を以てしてすら、「猿蓑」の句境に到達するまでには、多くの年月と努力とを要した』＊と先生が「生長と成熟」の

＊ 春を待ちつゝ 74

と聞きと、得子と桃子は汽車を離れて、窓側の外のところに二人並んだ笑顔を見せた。桃子は白い手套をはめたまゝ、實子が顔を出して居る窓の下へ來て言つた。

「この手套では、わたしも五味先生に笑はれてしまつた。中川さんはそんなに手ばかり可愛がつて、足の方はどうしたんですか、なんて。でも、わたし國に居る時分から、足袋をはくのが嫌いで……嫌いで……」

この桃子の顔も、得子の顔も、やがて動き出した。實子を乘せた汽車は機械的な廻轉の響と共に驛尻の停車場から離れて行つた。

獨りの旅となつてからの實子は、窓側に腰掛けて、二週間ばかり一緒に暮して見た友達のことや、飯田町の停車場の方に自分を待受けて呉れるやうにと手紙で頼んでやつた姉のことなぞを思ひつゞけた。最早梅雨の季節の近い山の上の空氣も重かつた。富士見まで乘つて行くと、そこはもう信州の國境だつた。遠い前途、まだ夢のやうな新らしい生活――それを待受ける寂しい熱い思ひが、眼に映る灰色な高原地の空の感じと一緒になつて、實子の胸を耐えがたくした。やがては思ひ〳〵に手を分つ日のある桃子や得子のことを思ふと、實子は窓側のところで深い溜息をついて、

「互の涙なしに生きられやうか。」

と言つて見た。驛尻で別れて來た桃子の白い手套は、まだ實子の眼について居た。』*

* パンフレット 2—56

た。動かない生物や動かない人物を好んで描いた畫家の色彩までが變り展けて行つてゐた。そこには新らしいシムフオニイの世界があつた。深い舞踏の世界があつた。』*

と、先生が、それに感慨を書いてゐたのを思ひ出す。……

「いかに言つても、藤村は狹いなア、」

——斯樣、その全集を見て、溜息に言ふものが、無いと言はれやうか。さうだ、深いけれど狹い。……しかし、今は、先生自らがセザンヌを評した前揭のその言葉を、玆に持つて來ると、丁度いゝ具合になると私は思つてゐるものである。

…色彩までが變り展けて行つて居た。そこには新しいシムフオニイの世界があつた。——

私は、それを言つて見て、「三人」を顧みたい。

『得子の生れた家のあるといふ村、そこに得子の母の住むといふ村は、汽車の窓から向ふの山の傾斜の方に望まれた。往きに見て來た松本平の耕地、そこにある莓畠、そこにある葡萄畠、それからまだ何程の豐かな產物が生れて來るかも知れないやうな新開の桔梗が原の跡がもう一度實子の眼にあつた。

「鹽尻」

* 全集 12—120

て來てゐたものではなかつたらうか。

『情熱をして靜かに燃えしめよ、濕れる松明のごとく』＊——

先生の藝術境も、——綠深い黑髮より、櫛風沐雨、遂にこゝ銀髮の靜かさに來た樣に、——そこに、靜かにして、衷に耀くものとなつて來たのではなかつたか。

——かくて、傑作「三人」は成つたと私は考へたい。

私は玆に、先生が巴里郊外ペルラン氏の家にセザンヌの遺作を見に行つた日の紀行を思ひ出す。

「いかに言つても、セザンヌは狹いなあ、」

と、同行の一人が、ほつと息を吐くやうにして言つたと書いてあつたのを思ひ出す。

そしてまた、——

『二階へ上ると、そこにはまたあの晩年の大作なる「浴女の群」に達するまでの後期の作品が多くあつめてあつた。身動きの成らないやうに思ひつめたセザンヌの嚴肅さが次第にある變化を求めて行つた心の跡が部屋々々に辿られる。それらの晩年の作品の一つとして畫家の內的生活の變遷を語らないものは無かつ

＊春を待ちつゝ 98

健康の恢復は、こゝに更に、はかばかしくなかつた。それにしても、この四月五月の間を靜かに書き留めて來た、「をさなものがたり」の原稿が、危く校正刷となつてゐて、この災禍を免れたのはこの禍中の大きい悅びの一つであつた。

それは、四人の子供に話しかける父親のをさなものがたりであつた。――そこには、深い象徵があつた。靜かな笑ひで笑ひ出さないでは居られない樣な、いゝユーモアがあつた。また常に指し示す、正しさがあつた。殊に、これには、どんなに深い孤獨のさびしさがあつて、これほどに自然の象徵を見つけ、そのユーモアをきゝつけたかと思はれる樣なものがありながらも、今はひどくそれが朗らかなものであるのに、私は强く心をひかれる。

明朗――こゝにまで來るためには、先生にあつて、この病氣もまた、全く役に立たなかつたものではないらしい。…先生の健康！　それは、自ら重いその艱難に耐えさせ、生きさせたものであつたと同時に、また自ら、そこに深い憂鬱をも持つて來て、その破れの劇しさを寄せ

に聲一つ掛けようともしなかつたくらゐで、庭に居て家屋の搖れる音や物の落ちる音なぞを聞きながら、今に止むだらうと考へて居た。私は奥の部屋にある火鉢を庭に移して、火をいけて居た。そのうちに激しく搖れて來た。私が急いで庭の木戸を開けた頃は、家のものは多く跣足で飛出して居た。

お前の知つてゐる通り、こゝは狹く窪い坂の下で、周圍は石垣と高い家屋とに取りまかれたやうなところだらう。私達は逃げ場にこまつた。家の前から坂の方へ通ふ石段のところは、どつと來た土崩れや倒れた塀で既に道を塞がれてしまつた。私達は東隣の裏庭にある青桐の下に集つて、激しい震動の通り過ぎるのを待つた。……』A

これは、災後一個月、鄉里に在る長男に送る心で書かれ——朝日新聞に掲出された特色ある震災記の一節であるが、後には、遂に氷枕に就くほどに病を惡くした消息も、そこにつたへられてゐる。

『——震災以來の睡眠不足が激しい眩暈を引起した。私の愚圖々々した健康も齒がゆいほどのもので、實は私はこんな際にもつと自分の身體を鍛へるつもりであつたが、それが病氣にさはつたらしい。』B

A 子に送る手紙(パンフレット 2—70) B 同 2—124

珍らしく、新年の雜誌などに眼を通された樣な日の中に、それは突然に現はれたのであつた。

「過去は、やつぱり現在なんですね。」

先生は、その病氣について、さう言つて微笑して見せられたことがある。それは明かに遺傳を、血液を語られた言葉であつた。――それまでもが、決して、免れ得べき事實ではなかつたのである。

しかし、それは、幸にも、強く、ひどく現れたといふほどではなかつた。海の青い小田原海岸にも、山らしい蛙のなく山邊(やまべ)の湯の方にも行つて靜かに、その頭を休めながら、漸く、ぼつ〳〵と「をさなものがたり」を書くほどに恢復して來た。――しかし、まだ、ひどく疲れ易く、油斷のならないその豫後であつた。

大正十二年九月一日。大震災。

『――そこへ地震だ。思はず私は自分の勉强部屋からすぐ障子の外へ出た。私の地震ぎらひはお前もよく知つて居る通りだ。その私ですら、それほど大きな地震が來たことも思はなかつた證據には自分の子供等

駄にあるものはなかつたと思ふ樣な春の來ることを信ぜずにはゐられないで居る』＊心であらねばならない。

さう言へば、先生は、漸く茲に、甚だ、朗かな面を揚げた人の樣であつた。そして、既に、父として、その長兒を故郷の土に歸し、またその行を送りながら、亡き妻子の遺骨を父母が永眠の地なる永昌寺の墓地に、改めて、深くこれを埋め終つた年でもあつたのである。三月であつた。楠雄さんは十八歲、故鄕神阪村の土に歸るために、中學を辭して、この都會を去つて行く人であつた。また、生來弱かつたその人がこの故鄕の土に强くなることを、その父は期待してゐる人であつた。

多事な年に亞ぐ、多難な年が來たのであつた。

それは、先生五十二歲の一月に、早く、長年の勞苦は、病患――「中風」となつて現れたのであつた。

――殆ど、「處女地」に係り通した樣な疲勞の後に、漸く、靜かな創作を思ふ樣な心もあつて、

＊ 春を待ちつゝ 232

『「君が園は花のさかりなり。』

と英吉利の詩人はそのソンネットの一つに歌つた。そのこゝろはもとより愛するものゝ生命に關してゞはあるが、私達はこの花のさかりをあらゆるものゝ生命に見たい。私達が住む狹い世界の何處かに、今花のさかりだと言へるやうもなのを欲しい。』A

『奈何なる點に最も婦人の力を期待するかとの御尋ねですか。

私は涙の力にと答へたいと思ひます。』B

――斯樣した正しくして、朗かな、美しい珠玉の感想を集めた「飯倉だより」一卷を上梓されたのも、この九月であつた。

それにしても、この日の中に、――花のさかりを望み見る心。それは遂に絕望をしらぬ心であらう。青空の心である。それこそは、「眼前の暗さも、幻滅の悲しみも、冬の寒さも、何一つ無

A全集 12―513 B同 515

見た新らしい草の芽も、育ちかね、枯れたのだとも、…もともと、その根に、思つたより深い、——女性自身の内部に、その深い眠りの源があるのではないかとも思はれるかなしみであつた。そして、そこには、更に再び、金だ！ と思はせる樣な淋しさがあつた。

先生は、そこに深い息をつき、また寂しく微笑した人だつたらうと思ふ。

「處女地」も難かつた。

これも、耕人が未熟であつたといふより、更に時代がより艱かつたと見るべきであつたらう。——先生は、これにも、これ以上、共に立つて盡してやる何物もないと思はれるまでの情熱をそこに盡してゐた。第十號！ もう、投出された一切の金は盡きてゐた。雜誌としての運命は行く處まで行つてゐた。…艱難な冬を越して、春を待つ頃に、先生は靜かにこれの解散を同人に告げたのであつた。

更に、いゝ春の日を靜かに待つやうに、——先生はそこにも、深い鞭撻の言葉をもつて、その告別としたのであつたといふ。そして、先生は、そこにまた寂しい微笑に歸へられたといふ。

「處女地」は同人と寄稿家との區別を强いて立てようともしません。この雜誌に筆執るものはすべて「處女地」の姉妹と考へ、互に手を引合つて若い時代に趨きたい考へです。唯、最初からこの雜誌の支度のために集まりまして比較的便宜な位置にある七八名のものが編輯を擔任して行きます。

この雜誌はひろく男子に讀んで頂きたい。姉や妹の書いたものを讀んで見る心持で、この雜誌を開いて頂きたい。そして同じ時代を步む婦人が奈何に感じ、奈何に考ふるかも知つて頂きたい。「處女地」はその名の示すごとく未熟ではありますが、すべてに親しみを持つてやつて行きたい考へです。」*

——先生は、またこゝにはパイロツトとして、このことばをその卷頭に掲げてやつたのであつた。

事實は、事實であつた。

思ひ避くべく、避け得べきものではなかつた。

——その日の中の、先生に、一つの幻滅が來たかの樣であつた。

それは、まだ習俗の曇りが、まだあまりにも深く、暗く、その日の地の上には、伸び立つと

* 雜誌「處女地」のはじめの頁

る。

――これは、當時の編輯同人の一人、鷹野つぎ子氏の「處女地當時の先生」に見る一節である。

連れて行くことはまづ自ら立ちあがることである。――と私は、これを前章の「淨め」の過程の場合にも言つた。「互に手を引きあつて、……」しかも、この人々をこゝにまで結び、こゝにまで歩ませるのにも、先生はたゞ遠く期待する處に耐えたかと見られる樣な暗い日を送られたことであつたらう。

それにしても、この船大工によつて、漸く成つた船は、四月、遂に新らしい旗を上げて航海に向つた。

『來るべき時代の婦人のためにと思ふものが集まりまして、未熟ながらその支度を始めました。「處女地」に集まるものは、文藝に向はうとするものもあり、哲學や宗教に行かうとするものもあり、教育に從事するものもありまして、志すところは必ずしも一樣ではありません。しかし、互に取る道こそ異なれ、同じ婦人の眼ざめを期待します。

とも忘れがたい。

『「處女地」發行の御趣意を承りましてから、最初の會合をいたしましたのは、先生が五十年誕辰のお祝ひをされた一年後の、大正十一年正月たしか十八日のことでした。其の日は前夜から降り出した雪が七八寸も積つて、蕭條とした銀世界でした。陽も明るく射して居ました。私は朝の支度をすまし、雪に足場などつけてから、指定の場所へ出かけました。

ごく内輪だけといふことで集まりましたのは、辻村乙未さん、河井稻子さん、加藤しづ子さん、河野節子さん、それと私の五人ほどだつたと思ひます。これ等の方々は早くから先生の御著作に親しみ、或はその範下を望んでゐた人々の中でも、道順の上でほんの近まはりといふだけの少數な者に過ぎませんでした。先生は、私が參りました時には最早坐についてゐられました。河野道子さんが先着で私がまゐり、前記の方々が追々と集まられたのだつたと思ひます。

その日の先生は和服で端坐せられ、言葉少なに、どこか憂鬱にさへお見受けました。これだけは勝手な視覺ですがあとで私はその時の先生がこの御發意のために、どれほど熟慮深長にお考へになつてゐられたかと思ひましたのです。先生はこの仕事を單に今日の仕事と云ふばかりでなく將來にかけて端緒としてみたいともお云ひでした。』*

* 藤村號（文章往來 1—4）

先生五十一歳の春が來た。

一月二十五日「藤村全集」は、有島生馬氏の、栗の垂穗に飾られた美しい裝釘によつて刊行をはじめた。そして通卷十二、この年十二月二十日これを完了した。

「處女地」創刊。——

『私達の周圍にある空氣は重い、
窓をあけ放て、
自由な空氣をそゝぎ入れよ。』*

——あの當時の、憂鬱にして、また樂しげでもあつた先生の顏は、忘れがたい。私は當時移り住んでゐた逗子の方から、時々先生を見にあの細い阪道を下りて行つて、あの大きい郵便受箱がめつきり多くなつたらしいさま〴〵な書狀を入れて、重くなつてゐるらしいのを感じたこ

* 全集 12—425

——それの完成を見たものだと文は告げて行きたいと思ふ。

先生は、ある日の私の訪問に、折柄完成をつげたばかりの様なその原稿を示されて言つた。

「こんなものを書いて見ました。」

そして、私の讀みすゝんでゐるある個所の上に、その長く太い、白い指をさゝれた、…養生園行の個所であつた。

『熊吉は姉の前に手をついて御辭儀をした。それほどにして勸めた。おげんはもう嘆息して仕舞つて、肉身の弟が入れといふものなら、それではどうも仕方がないと思つた。おげんはそこに御辭儀をした弟の頭を一つぴしやんと擲つて置いて、弟の言ふことに從つた。』* ——と、そこには書いてあつた。

先生は言つた。

「どうですかね、これは。——突飛ぢやないかね。」

先生は、微笑してゐた。——嚴肅な體驗と、熱心な解析がそこにあつた。現實(リアル)に對する先生の鋭い眼光(まなざし)!　そこにこそ、いささかを狂へるが故に「まことの狂人」なる、…そのデリカな、困難な描出に成功したものだとも書添えて行きたい。

* 全集 10—508

らしい。

それが、第一は、この舊き「家」の命運に殉じた「ある女の生涯」のおげんに、第二は、習俗の曇りもまだ深い過渡時代の「新生」の節子に、またこの後に書かれた「明日」のおせんに、第三は所謂新時代の「三人」の實子に、桃子に、得子に、悲苦となつてゐるものであつた。

先生は玆に、――親しくしていまは亡い人達の墓の上にも、萌へる新らしい草の瑞々しいかゞやきを見るとは言ひながらに、――玆に有る彼等の悲苦には更に胸を搏たれるものがあつた。全集によつて得た印税のすべてを投じて、雜誌「處女地」の發行に盡力する決心をなしたのも、そこに旣に深い意味を胎いたものであつた。

それにしても、「ある女の生涯」は、先生にあつて重要なる作品の一であると言ふよりも、更に「日本」の小説として世界的の文獻たるものであらう。私は玆に先生の著作に就て長く立止まる事を許されないから、こんな調子の高い言葉を揭げなければならないけれど、「新生」に早く見られた樂しい藝術の秘密、――單一なるものの、却つてそこに持到つてゐる複雜さ。感情のかぎりを罩めた沈默の、描出して行く精緻さ。

「姉さんも、俺が一度訪ねて來た時は大分落着いて居て、この分ならもうそろ〳〵病院から出してあげてもいゝと思つたよ。惜しいことをした。」

「さう言へば、熊叔父さんはどうしましたらう。」とお玉の旦那が言出した。

「あれのところには通知の行くのが遲かつたからね。」

と言つて見せて、宗太は一つある部屋の窓の方へ立つて行つた。何もかもひつそりと沈まりかへつて、音一つその窓のところへ傳はつて來なかつた。

「もうそろ〳〵夜が明けさうなものですなあ。」

とお玉の旦那も宗太の方へ立つて行つて、一緒に窓の戸を明けて見た。根岸の家はまだ暗かつた。」*

「ある女の生涯」はそこに結末をつけてゐる。

——もうそろ〳〵夜が明けさうなものですなア。

——窓の戸を明けて見た。……空ばまだ暗かつた。

日本の女の、窓は暗い。……暗かつた。まだ暗い。夜は明けさうで、まだなか〳〵明けない

* 全集 10—619（ある女の生涯）

「小山さんがお亡くなりになる前の日に、頭を剃りたいといふお話がありましたつけ、お家の方で開いてからでなくちやと言ひましてね、それだけは私がお止め申しました。病院にいらつしやる間は、よく裁縫なぞもなさいましたつけ。」

と親戚のものに話してきかせた。

長いこと遠いところに行つて居たおげんの一番目の弟の宗太も、その頃は東京で、これもお玉と二人で急いで來たが、先着の親戚と一緒になる頃はやがて十一時過ぎであつた。

「もう遲いから子供はお歸り。姉さんのお通夜は俺達でするからナ。それはこゝは病院でもあるからナ。」

と宗太が年長者らしく言つたので、直次の娘はおげんの枕もとに白いお團子だの水だのをあげて置いて、子供と一緒に終りの別れを告げて行つた。

親戚の人達は飾り一つないやうな病院風の部屋に火鉢を圍んで、おげんの亡き骸の假りに置いてある側で、三月の深夜らしい時を送つた。おげんが遺した物と言つても、旅人のやうに極少なかつた。養子はそれを仕末しながら、

「よくそれでも、こんなところで辛抱したものだ。」

と言つた。宗太も思出したやうに、

それは、既刊の單行本を離れて、著作の年代順と篇別とで全體をまとめたもの十二巻であつた。そして、先生はこの年の制作にかゝるわれ等歎美の「ある女の生涯」をその第十巻に編み込まれた。

『三年ほど經つて、おげんの容體の危篤なことを病院から直次の家へ傳へられた。おげんの臨終には親戚のものは誰も間に合はなかつた。

養生園以來、蔭ながら直次を通してずつと國から仕送りを續けて居た小山の養子もそれを聞いて上京したが、おげんの臨終には間に合はなかつた。おげんは根岸の病院の別室で、唯一人で死んで行つた。まだ親戚は誰も集まつて來なかつた。三年の間おげんを世話した年とつた看護婦は夜の九時過ぎに、亡くなつてまだ間もないおげんを見に行つて、そこに眠つて居る樣な死顔を拭いてやつた。兩手も胸の上に組合せてやつた。その手は、あだかも生前の女のかなしみを掩ふのやうに見えた。

おげんの養子は直次の娘や子供と連立つて十時頃に急いで來た。年とつた看護婦は部屋を片付けながら、

舍の方で私はそのことに想ひ到つた。

過ぐる二十五年を私がこの十二卷の著作に費してゐるうちに、その月日は私自身の生涯を變へたばかりでなく、私の周圍をも變へた。北村透谷君、齋藤緑雨君、國木田獨歩君、中澤臨川君——私の周圍にあつて私を勵まして呉れたそれらの舊友や知己は、既にこの世に居ない人達だ。惜しいと思ふ人達の多くが早逝してしまつて、今日まで私なぞのどうやら生きながらへて來たことすら不思議なやうな氣がする。唯私は持つて生れたまゝの幼い心をたよりに、一筋の細道をとぼ〳〵と歩みつゞけて來たに過ぎない。亡くなつた親しい人達の墓の上には既に新しい草が生えて、古葉にかはらうとして居るやうなみづみづしい生命のかゞやきには、涙を催させるものがある。

私の五十といふ年も二十日ばかりのうちに暮れやうとしてゐる。どうして私は年を取らう。あのファウストのやうな紅顏緑髪の願ひは私には無い。今更若い昔にかへらうとするやうなことは、私の願ひとするところではない。どうかして私はまことの老年に行きたい。おそらく青春に徹することを日頃の願ひとして日常刻々の刺激にも最もよく生きようとするやうな年若な人達には、この私の心を理解して貰へるだらうと思ふ。私はこの十二卷の著作をさうした心の記念ともしたいと思ふものである。(大正十年の暮、麻布飯倉片町にて)

遂に、その日に次ぐ日は來つて、――先生五十歲の大正十年が來るのだつた。白髮の五十歲。二月、生誕五十年の祝賀會を催された先生はそこに靜かに「佛蘭西紀行」の稿をつゞけ、また、長いこと思ひ立つて居た「透谷全集」の編直しを果して、友の遺族に贈り、また「貧しき理學士」を草し、また傑作「ある女の生涯」を成した。

――また、全集刊行を決し、その編輯に入つたのも、この冬のことであつた。

『この十二卷のつたない著作のどの部分を開いて見て貰つても、私が居る。半生を旅の間に送つた樣な私が居る。幾度か挫折したり、落膽したりした私が居る。熱い汗と、冷い汗とを同時に流しつゞけて來たやうな私が居る。僅か一步か二步踏み出したのはまだ昨日のことのやうに思はれながら、最早髮の白い私が居る。これが私だ、と言ふより外に何を私はこの著作のはじめに書き添へよう。

佛蘭西の旅にある間、私はあの異鄕の客舍の方で自分の過去を振り返つて見るやうな多くの靜かな時を持つた。詩から散文へと移つた時の私は、それまでの自分の生活を根から覆して、何か全く別のことでも始めたやうな氣のした時代もあつた。後になつて見ると、矢張同じ自分が步いて來たのだ。あの異鄕の客

の編纂に從ひ、その序を書いた。

行く道は難い。——そして、エトランゼエとして、異鄕には更にその旅の難いその道を書き殘さうとして、また、この年、「佛蘭西紀行」の稿を起し、この制作に從つた。

『向ふでも燈火が點いたナ。』*

夕方には、お互の窓にそれを言つて見る樣なさびしさに、なつかしい故國を顧る人々の群が、その旅の心がそこにあつた。

この年、姉高瀨園子死去す。

——その人は、「姉といふより母にも似た心で九歲の上京の當時よりその愛育を受けた、」とある人で、その後も常に、木曾福島の空を近く思はせてゐた人であつた。二三年の病褥に淋しく死んで行つた樣な人の、この姉の死もまた、そこに「時代の難さ」を思はせる樣なものでもあつたらう。

* 全集 12—143

た。先生は、茲に、大作を脱稿した後の心を、少年時代のおもひ出を集めて、童話集「ふるさと」を書いたのもこの年のことであつた。

『人はいくつに成つても子供の時分に食べた物の味を忘れないやうに、自分の生れた土地のことを忘れないものです。』A

『花袋君、秋聲君、君等が五十年の誕辰を記念するために、三十餘人のものが各自一筆づゝの創作をこゝに持ち寄つた。同じ時代を歩むもの丶君等に贈るこゝろざしとして、この集を長く君等の書架に納めて置いて呉れたまへ。こゝに創作を寄せたもの丶中には、君等の舊い友達もまじつて居るし、君等の弟子もまじつて居る。この集が君等の手にとゞく日も最早近いうちのことであらうと思ふ。君等と共に歩いて來た長い年月の間のことを思へば、私は默してゐたいやうな氣がする。それを自分の感慨にかへたいやうな氣がする。夢は長く、行く路は難い。君等の誕辰を記念するこゝろは、やがて時代の難さを記念するこゝろである。』＊

大正九年。先生四十九歳の飯倉片町で、——先生は、この二人の友に贈る「現代小説選集」

A 全集 10—429（ふるさと） B 全集 12—539

と言はう。

それにしても、先生は——その藝術の上に、默ることをまづ日本より學び、しやべることを次に西洋より學び、漸く、言葉尠く語ることに到つた樣な人ではないだらうか。

『伊太利を旅して歸つて來た一人の畫家が多くの古畫の寫眞を私のところへ持つて來て見せて吳れた。その中に私はジオツトオの筆に成つた聖フランシスの傳說の圖を見つけた。東洋的にあゝいふ古い物語を想像すると、あの聖者の前には一羽の鳥が描いてあつていゝやうな氣がする。實際、一木一草の趣味は古代の東洋の藝術によく見かけるものだ。ところがジオツトオの古い畫の寫眞を見るとあの聖者の前には無數の鳥の群がガヤガヤと集つて居るところが描いてあつた。』*

東西の相違。——基督教藝術と佛敎藝術と。……それにしてもこの「新生」に於て、一種の汎神論的感慨が、幾多の基督教的の背景の上にムードとなつて來たのは意味深いものだ。

あゝ、こゝに來るまで、……故鄕(くに)を出で、旅を行き、遠く行き、漸く近づき、そして故鄕(くに)に歸つて來るまで。——先生のその步める道は長かつた。

——漸く、故國のふところに歸つて來た歸朝者の心は、即ち「ふるさと」に寄する心であつ

* 全集 12—518

リアリステイツクな手法に關する解決が玆にあるのではないだらうか。

『モウパツサンのフロオベルを研究したものゝ中にもフロオベルはあれ程のリアリストであり・ながら一方には非常にロマンチツクな處がある、と云ふことが書いてあつた。人に依つては、フロオベルには未だロマンチツクな夢が殘つて取れ切れずにゐる、と云ふ風に見る人もあるかも知れないが、自分はあゝ云ふリアリストがロマンチツクな處を備へてゐた處が面白いと思ふ。其のロマンチツクな處があつて、フロオベルをして藝術をなさしめたと思ふ。若しあゝ云ふ嚴肅な、熱心な解折をのみ押し進めて行つたならば、終ひにはサイエンスが殘るかも知れないが、藝術は殘らなかつたかも知れない。』＊

――とは「後の新片町より」の言葉であるが、私は、また「斯樣いふロマンチストが、あれまでにリアリステツクな解剖に行き得た處が面白いと思ふ。」と言つても見たい。

そこには、洋の東西の問題がある。一神と汎神との問題がある。空氣と食物の問題がある。更に更に、まだ明治大正の世紀も若い日本人の問題がある。それの稟質と教養との問題がある

＊ 全集 8―525

へやうとしたものであつた。人生の意味ではなしに、人間の「生」そのものを知る處、……そこにこそ、われ等の「救ひ」があるのではないか。『心胸には道理に知れない道理がある』Aそのまことの道理への、生活への――その翹望、そこにこそ、救ひがあるのではないか。……不安ながら、靜かに沈んだ人生への翹望。それを私共は「新生」に見得る樣に思ふのである。

それにしても、先生の創作には、二つの大きい特殊がある。一つは、その異常な若々しさだ。一つは世界に於けるよき少數者の創作が左樣であつた樣に、それが、思想的だと言はれるより、より血液的だといふことだ。

殊に、この作に於て、先生は『三年も外國で暮して見たものゝ空想から、當時の私は詩と散文の一致といふことを考へてゐた。』Bといつてゐる樣に、その手法は、詩から散文へと移つた當時の「破戒」の若々しさを思はせる。あれに生水晶の透明さがあるとすれば、これには紫水晶の明澄さがある。尙、この愚かしい言葉を弄することが許されるなら、「家」には草入水晶の、精緻さがあるとも言はう。――しかも、すべて遂に水晶であるのが、その特殊にして、重大なる問題を提げるものである。卽ち、先生の藝術境地に於けるロマンテイツクな傾向、また

A 全集 11―602(パスカルの言葉) B 寢ごと(同前)

やうに氣味の惡い秋海棠の黒ずんだ根が四つとも土の中から轉がつて出て來た。

「父さん、奈何するの。」と學校から早びけで歸つて來た繁が訊いた。

「あゝ左樣だ、お節ちやんが置いて行つたんだね。」と泉太も庭へ下りて來て言つた。

「やあ、僕も手傳はうや。」

斯ういふ子供を相手に、岸本はその根を深く埋め直して、やがてやつて來る霜にもいたまないやうにした。節子はもう岸本の內部に居るばかりでなく、庭の上の中にも居た。』A

大正八年九月。大作「新生」はこの言葉で其處に終つた。……

『私達の內に巣喰ふ濃いデカダンス。――それをめがけて、ツルハシを打込んで見ようとして出來たものが、あの「新生」だ。』Bと先生の言つてゐるのが、それだ。そして、先生は玆にも例によつて、半分ばかりを物言はれてゐるのであるが、私共は、その半分の語られてない言葉の中に、――卽ち創作「新生」より――人生の「救ひ」に對する暗示を見得る樣に思ふのである。卽ち「新生」は人間の弱さと强さとを傳へようとしたものであつた。卽ち人生の精髓を傳

A 全集 11――763　B 寢ごと（不同調 2―1）

そして遠い旅に上る節子のために、その好い日和を祝してやつた。臺灣の伯父さんに附添ひながら、いそ〳〵として谷中の家を出る旅人としての彼女の姿が岸本の想像に上つて來た。

「婆や、今何時だねえ。」と岸本はその窓の側から階下へ聲を掛けた。

「丁度一時でございます。」と婆やは眼鏡を掛けたまゝ梯子段の下へ來て答へた。

「臺灣のお客さまは今東京驛を發つところだよ。」

と岸本は言つて見せて、復窓の外を眺めた。青い明るい空のかなたには、遠く流れる水蒸氣の群までが澄んで見渡された。彼は香港や上海へ寄港して來た自分の歸國の航海を思ひ出し、黑潮を思ひ出し、あの邊の海の色を思ひ出し初めて臺灣あたりへ踏出して行く節子のためにも彼女の船旅の樂しかれと願つた。

岸本はその足で梯子段を下りた。子の供部屋と食堂の間を通つて緣側から庭へ下りた。そこには草花を植へるぐらゐの僅かな空地があつた。節子の殘して置いて行つた秋海棠の根が塀の側に埋めてあつた。

「遠き門出の記念として君が御手にまゐらす。朝夕培ひしこの草に癒ふ思ひを汲ませたまふや」

この節子の書き殘した言葉が岸本の氣に成つた。引越し早々の混雜の中で、彼は四つの根を庭に埋めて置いたが、その埋め方の不確實なのが氣に成つた。何となくその根のつくと、つかないとが、これから先の二人の生命に關係でもあるかのやうに思はれて成らなかつた。試みに堀出して見ると、毛髮でも生えた

『――愛宕下の下宿から天文臺の附近に見つけた住居までは、谷底から岡の上へ通ふほどの距離しかなかつた。岸本は自分の住居らしい住居に歸國後兎も角定まつた書齋の置き場所を見つけることが出來た。そこから天文臺の建築物は見えないまでも近い。何となく巴里の天文臺の近くに三年も暮して見た旅窓を思ひ出させる。そこには二階がある。神田川の川口に近い町中で七年も臥たり起きたりした以前の小樓を思ひ出させる。子供等はめづらしがつて、家の周圍にある木の多い小路や、谷底の町の方へ續いた阪道などを走り廻つた。』＊

麻布區飯倉片町三十三。――それは、高臺の頂の、そしてまたその小さい窪みの様な、……石段で降りて行く、その行留りにあつた。先生は、その質素な二階家の、二階に坐つて、「新生」を續稿した。

『……午過ぎの日は新しい住居の二階の部屋に滿ちた。東北に開けた窓の外には、細くてしかも勁い樫の樹の枝が隣家の庭の方から延びて來て居て、もうそろ〳〵冬支度をするかのやうな常磐樹らしい若葉が深い色に輝いた。幾度となく岸本はその窓へ行つた。樫の樹の梢の上の方に開けた十一月らしい空を望んだ。

＊ 全集 11—755

書　齋（飯倉片町）

山茶花

麻布區飯倉片町三十三（四十七歳——五十五歳）

『生(ライフ)をして趨くまゝに趨かしめよ。』*

——新片町に於ては、まだ遂に、劇しいおもひの寄つてゐたこの言葉も、こゝには、漸く靜かなる、まことの思想となつて來てゐたのだつた。

靜かに移轉の車は動いた。

* 全集 8—333

世の中の善きも惡しきも知れる身のなど踏み迷ふ人の正みち』A

――これが、罪を罪として負ふべきを知つた人が、その兄――「節子」の父にあてた痛告へに對する返書であつた。彼は、その心を、その心として決して理解される處のない様なこの手紙の前にも深く頭を下げた。

正しき人生の記錄にして、またよき創作なる――「新生」は、かくて、憂暗な四月の日を、新緑の五月の日を、窓暗き六月の日を、朝日新聞の紙上に、次々として發表されて行くのであつた。

『私達の周圍にある空氣は重い、
窓をあけ放て、
自由な空氣をそゝぎ入れよ。』B

A 全集 11—700　B 全集12—425

しかし、この述作の形式をとつた先生の痛苦は、早く世間を狹くした心を持つて來たものであると同時に、節子の家を中心にした親戚との衝突は、全く避けがたいものであつた。そして、それは、しばらく節子にも別れを告げる時だと思つた。しかも、世を狹くしたと思ふ心にも關らず、却つて彼が斯く自由な道へ歩み出したことを感じた樣な心で、今日まで節子を導いて來た彼女の生命は明日も彼女を導くであらうと信じられたのであつた。

『噫、萬事休す。われに斷腸の思ひあり。足下は自己を懺悔すと稱へながら、相手方の生活を保證することによつて不德を遂行せんとする形跡あるは言語同斷なりと言ふべし。吾娘はわれに處分するの覺悟を有す。敢て足下の容喙を許さず。

こゝに涙を揮つて足下を義絶す。

岸　本　義　雄

岸　本　捨　吉　殿

猶、子供は罪なきものなれば、泉太、繁二子が時々の來訪を許す。

大正七年四月。——それは、「節子」の母親が病院に二十二日居て、遂に亡くなつた時であつた。先生は愛宕下の方に居て嫂の遺骸が火葬場の方へ送られたことを聞いた。そして、それを聞いた日から先生は自分の懺悔の稿を起した。

『その時になつて見ると、岸本が辿り着いた愛の世界は罪過の苦しみから出發したところからは可成遠いものであつた。

「二人していとも靜かに燃え居れば世のものみなはなべて眼を過ぐ」

これが節子が最近の心の消息を傳へた歌だ。彼女は岸本の一切を所有し、岸本はまた彼女の一切を所有した。しかし二人とも何物をも所有しては居なかつた。

最早岸本は何處に節子を置いても可いといふ氣がした。節子の精神が獨り立ちの出來るまでに彼女を養ひ育てたといふ氣もした。若い〳〵と思つて居た節子が既に二十六にも成る。もし彼女の將來の望みが宗教生活を送るといふにあるならば、岸本は今迄毎月彼女を補助して來たやうに是から先も衣食に事を缺かさないやうにして、どうかして彼女の望みを遂げさせたいと思つた。』*

* 全集 11—674

とが先の方に起つて來さうにも思はれた。その先の方には今は奈何することも出來ないで居るものゝ本當の意味の解決が求められさうにも思はれた。長いこと附纒はれた暗い秘密を捨てやうとする心は、まだそれを捨てもしない前から、既にもう斯うした翹望を起させた。その翹望は、悲しい暗い過去にばかり兎角拘泥り勝ちであつた岸本の心を驅つて、おのづと先の方に向はせるやうに成つた。もし懺悔を書く日が來たら。それを想ふと彼はもつとよく自分の心に聞いて見なければ成らなかつた。

今まで對したことの無い光が斯樣な風に岸本の精神の內部へ對して來たばかりでなく、歸國の日以來兎角疲勞し易かつた彼の身體までが漸くその頃に成つて回復の時に向つて來た。寒暑、乾濕、風雨、霜雪、日光の度を異にした遠い異鄉の方から歸つて來て、本當に自分の身體に感れたと思ふまでは彼は一年の餘も要つた。

新しい秋の空氣は既に部屋の內まで通つて來てゐた。彼は漸く故國に歸り着くことが出來たかのやうな心でもつて葉と葉との奥に日の映つた庭の見える緣先へ行つた。熱い、寂しい感じのする百日紅などもさかりに咲く時であつた。その花の色までが妙に彼の眼にしみた。そして自分の國の方のものらしい親しみを感じさせた。』*

* 全集 11—621

誰が、弱くないものがあるか、誰が、迷はないものがあるか。——たゞ長い努力、たゞ熱い努力、一切を捨てる努力、一切を享ける努力……私は、そこに、先生が遠く待受けて來た夜明が、何もそう遠いところから白んで來るでもなく、自分の直ぐ足許から開けて行きさうに見えた。血から解き放され、肉から解き放されて行くことを感知する度に、暗かつた彼の心も次第に明るい方へと出て行く思ひをした* のであらうと考察する。

『まだ岸本は一切をそこへ曝け出してしまふ程の決心もつきかねて居たが、自分の苦い出發的に遡つて根本から考へ直して掛らうとするには、どうしてもその心の扉を否むことが出來なかつた。それをするには、いろ〳〵な人が懺悔を書いた例に倣つて、自分も愚かしい著作の形でそれを世間に公にしやうと考へるやうに成つた。あの事實を書いたら。そんなことは以前の彼には考へられもしなかつたのみか、成るべくあの事には觸れまいとして節子から來た手紙は燒捨てるとか引裂いて捨てるとかした以前の彼の眼から見たら、まるで狂氣の沙汰であつた。斯様なところへ岸本を導いたものは節子に對する深い愛情だ。

懺悔へ。岸本はどうして斯様な心に成れたらうと時々自分ながらびつくりすることも有つた。彼の心がその方に向はうとした丈でも、何となく彼の歩いて行く路には新らしい未來が感じられて來た。種々のこ

* 全集 11—716參照

「自分の國を思へばこそ左樣だよ。冷淡なものなら、呪ふ氣にもならない。隱遁もしない。僕に言はせると、左樣いふ人達こそ眞實の愛國者だ。」
「でも、君、愛國心なんてものは寢言だと思つて歸る人が多いぜ。」
「君には國が無いのかね。」
「行く先が僕の國さ——到るところが僕の國さ——だから、僕は君に訊いてるぢやないか。僕は冷いかつて言つてるぢやないか。疑ぐつて言ふ譯ぢやないが、君は僕を煩いとでも思つて來たのかい。」
「君もまた妙なことを言ふねえ。」
「試みに僕から離れて見給へ。それが君に出來たらえらい。君は僕から離れたつもりでも、僕はもう絕えず君に働いて居る。一旦海の洗禮を受けたものが、どうして心に革命を引起さないで濟むものか。」A

汝自らを汝の燈火（ともしび）となし、熱心に努力して、遂に賢者となるがいゝ。かくして、けがれをはらひのけ、過失を離れるならば、再び、誕生より老衰への惱ましい輪廻に入ることはないのだ。＊——これは、私がこゝに提げて來た釋迦の「法句經」の一句であるが、これを所謂東洋風の解釋に委せてはならない。

A 全集 10—209（海へ） B 法句經（佛敎根本聖典）238

た。

――『古い寺院にでも見る樣な青苔の生えて庭の奧まつたところにある離座敷に行つて着いた人達は、早く屆いた荷物と一緒に岸本を待つてゐた。岸本は東と北との開けた古風な平屋造りの建物の中に新らしい場所を見つけた。二間あつて、一方を自分の書齋に、一方を子供等の部屋に宛てることが出來た。』*

先生は、――その書齋の机の上に、高輪の方で既に書き出してゐた、航海記「海へ」の執筆を續けた。

『「僕は冷いかねえ。」

と「海」が言出した。

「別に君が冷いとも思はない。」私は他に言ひ樣がなかつた。

「僕はこれで大分君の國の人達にや逢た。海から歸つて行く君の國の人で、左樣話の合はないやうな人はなかつた。一體、君の國の人はあまり自分を知らなすぎる。海へ出て來て皆眼を開けて歸る。見給へ、その證據には一人として滿足して歸つたものは無い。絕望して自分の國を呪ふか、あきらめて默つてしまふか、さもなければもう何事も爲る氣がなくて隱遁するかだ。」

* 全集 11—600

あたゝかさに癒されはじまらなければならなかつた。そして淨化! それが、たゞ前途も暗い所謂世の中の道の末遠くとぼる一點の燈火であつた。

――最後まで忍ぶものは救はるべし。

『……岸本はあの古いソルボンヌの禮拜堂などに結びつけて見て來た旅の印象を忘れることが出來なかつた。不思議にも死んだ物語が彼の胸に活きて來た。あのペエル・ラセエズの墓地で見て來た古い御堂の內に枕を並べて眠つて居た僧侶と尼僧との寢像が物を言ふやうに成つた。この二人は終生變ることの無い精神的な愛情をかはしたとした文句の彫りつけて揭げてあつた白い大理石なぞはまだ彼の眼にあつた。彼はあの御堂の周圍を廻りに廻つて立去るに忍びない思ひをして來たその旅の心を節子に話した。あの御堂を圍繞く鐵柵の內には秋海棠に似た草花が咲き亂れて居たことなぞをも話した。』*

もう家庭といふものに未練のない先生は、――高輪の家に集つて子供の面倒を見てくれた人達の都合もあつて解散の餘儀ないのを見ると、一層、簡單な自分だけの栖家を下宿の樣な處に求めて、――子を連れた旅人のやうな方針に向つて動かうとした。そして、もう異國の旅から歸つて追々一年といふ樣な、五月の半ば過ぎに、芝の西久保櫻川町二の風柳館といふに引移つ

* 全集 11―554

た人です。

お釋迦さまが一度燈火をつけたら、そこにも、こゝにも、燈火がつくやうになりました。印度や、支那や、朝鮮ばかりでなく、日本國中に燈火がつくやうになりなした。

まあ、お前達はお釋迦さまが奈何な燈火をつけたらうと思ひます。お釋迦さまは印度の方の若い王子でした。その人が燈火をつけて歩くやうになりました。お釋迦さまの燈火は提灯の燈火でもなく、洋燈の燈火でもなく、電燈の燈火でもありません。お釋迦さまは人の心の奥に美しい燈火をつけて歩いたのです。

お釋迦さまの燈火は、高い塔の燈火のやうに、消えさうでなか／＼消えません。父さんが思ふに、お釋迦さまは今でも燈火をつけて歩いておいでなさるだらうと思ひます。お前達もその美しい燈火が欲しければ、お釋迦さまは必とつけに來て下さるだらうと思ひます。

連れて行かうとする心は、自ら立上る心であつた。燈火を揭げやうといふ心は、隣人をも照したい心であつた。――先生は、半ば死んでゐるかの樣に不幸な姪を、まづ連れて行かうと、立上らなくてはゐられなかつた。そして所謂痴情！ そこにも救ひがあるといふ哀しい眞理を、眞理としないではゐられなかつた。傷き衰へた小羊のその傷口は、只に羊飼ふ者の、その唇の

幼きもののことを思ひ出す度に、書いて、送りたいと思つた樣な話——「幼きものに」を書きはじめた。

『太郞も次郞もおとなしくお留守居して居ましたか。父さんはお土產を出しますよ。父さんの鞄を御覽なさい。いろ〳〵な紙が貼付けてありませう。これは遠い〳〵國を旅して來たしるしです。鞄の中から何が出て來るか……』A

——それは、本當に遠く〳〵人生のかなしい旅をも行つた人の心からの、幼きものへの贈物であつた。心をこめた贈物であつた。この七十七篇の小話のためにも、これ丈の話を揭げ出すためにも、先人の長い日の艱難が必要なのだといふことを思はせる樣な作であつた。本當にどれほどの深い孤獨がそこにあつて、こゝに生れて來たかといふ樣な眞のユーモアがそこにあつた。また、どれ程に、後より來るものを誘導しやうか、正しく觀ることを學ばせ樣かといふ熱い情熱がそこにあつた。また、そこに生れてくる美しい詩があつた。

一三　お釋迦さまの燈火B

太郞よ、次郞よ、お前達はお釋迦さまの話を聞いたことがありますか。お釋迦さまは燈火（あかり）をつけて步い

A 全集 11—203　B 全集 10—321

く、その命運を正しく見ることに近い人であつた。

——彼はもう以前の彼ではなかつた。『獨身を一種の復讐と考へるほど、それほど女性を厭ひ惡むものではなかつた。二度と同じやうな結婚生活を繰返すまいとし、妻の殘した家庭を全く別の意味のものに變へやうとし、際涯無く寂寞の續く人生の砂漠の中に自然に逆つてまでも自分勝手の道を行かうとした樣な、さうした以前の岸本では無かつた。彼は神戸に着く晩は眠るまいと思ふほどの心でもつて遠くから故國の燈火を望みながら歸つて來たものだ。陸の上に倒れ伏し、懷しい土に接吻したいとさへ思ふほどの心でもつて長い旅から草臥れて歸つて來たものだ。』*

その心から、彼は彼のすぐ隣りにある不幸の人の上に、深い哀憐を感じた。——そして、それは、彼女を救はうとするばかりでなく、彼自身をも救はうとする樣なものであつた。

先生は、九月のはじめから、家の近くに二間ある二階を借りて、そこを假の書齋として、そこで朝日新聞のために感想「故國に歸りて」を書き、異郷の暗い窓の方で、故國に殘して來た

歸つて來ました。——そこには、避けたくても、どうしても見なければならない人達の顏があつた。眼があつた。

『岸本は誰も家の人の居ないところへ行つて、獨りで自分の右の手を出して見た。そして自分に問ひ、自分に答へた。

「矢張、金の問題が附いて廻る——どうも仕方ない。」

岸本はあだかも手相を觀る占者の前にでも出して見せるやうな手付をして、自分で自分の手を眺めた。その手を他から出された手のやうにして出し直して見た。實際、それは誰の手でも無かつた。自分の罪過そのものが何處から出すともなく出してよこす暗い手だ。

岸本はもう一度その手を出し直して見た。誰にも知れないやうな自分の罪過を葬らうとして居るやうな人間の果敢なさをよく知るものでなければ、どうしてそんな手のあることを感じ得られよう。それは抑頂いても足りないほど感謝すべき手だ。しかし掛引の強い手だ。自分の弱點を握つて居るやうな手だ。岸本はつくゞゝ自分の手を眺めて、非常に暗い氣持がした。』*

暗い手——それは暗い命運の手だ。憂鬱の手だ。そして艱難の手だ。……しかし、彼は、漸

* 全集 11—432

その心の重たい足でその土を踏んで見て、今更の樣に遠く旅して歸つて來たことを、この寂しい入京は、おのづと頭の下るやうな自分の長旅の終りに適はしいとも思つた。……

『喘ぎ〳〵阪を登つて行つた車夫は高輪の岡の上まで出ると急に元氣づいた。成るべく遲くと注文したいほどに思つてゐる客を乘せて、車はぐん〳〵動いて行つた。ある横町に折曲ると、その角に煙草屋がある。ふと岸本はその邊に遊んで居る男の子の後姿を見かけて、それが自分の二番目の子供ではないかと思つた。

「繁ちやんぢやないか。」

思はず彼は車の上から聲を掛けて見た。

見違へるほど大きくなつた繁は左樣言つて聲を掛けられたのを何と思つたのか、日除の掛つた車の方をもよく見ないで、

「父さんはまだ歸らないよ。」

と言ひ捨てながら、何か嬉しさうな聲を揚げて急に家の方へ驅出して行つた。そこはもう留守宅の格子戸の見えるほど近かつた。』*

* 全集 11—412

町々が左様だ。一寺院の建築が左様だ。一家族の食卓からして左様だ。そこにある一切のものは不思議にもある中心に向つて集合し、結晶する性質を帶びて居る。ある幾つかの小さな石塊よりして成る水晶の大きな塊を心に描いて見るならば、一都會としての巴里の設計をも、一寺院としてのノオトル・ダムの建築をも、略想像することが出來ようと思ふ。私の淺い見聞によると、今日まで吾國に有り來つたものは丁度その反對に出て行つて居る。一つの大きな美術館のかはりに、個々の秘藏せらるゝ傑作がある。一つの大きな公園のかはりに、奧床しくすぐれた多くの個人の庭園がある。私はこゝに一々東西の相違を比較して見るやうな煩はしさを避けよう。唯私はこの文物の大きなコントラストを一神的な歐羅巴の宗教と、ペーガンの深さを有する東洋の宗教の相違にまで持つて行つて見たいやうな氣もする。兎もあれ、外人が吾國を知る困難は、吾儕が歐羅巴を知らうとする困難の比では無い。吾儕の國にあつては好いものは必ずしもある中心に向つて集つては居ないのだから。よしんば單なる旅行者としての觀察の便宜を比較した見た丈でも。

この見地から私は歐羅巴が都市に於いて勝り、吾儕の國が田舍に於いて勝ることを思つた。』＊

夜汽車で西京の方を發つた先生は翌日の午後になつて品川の停車場を望んだ。かねて、東京に着く日取もわざと知らせなかつたその停車場には彼を出迎へる人の影もなかつた。先生は、

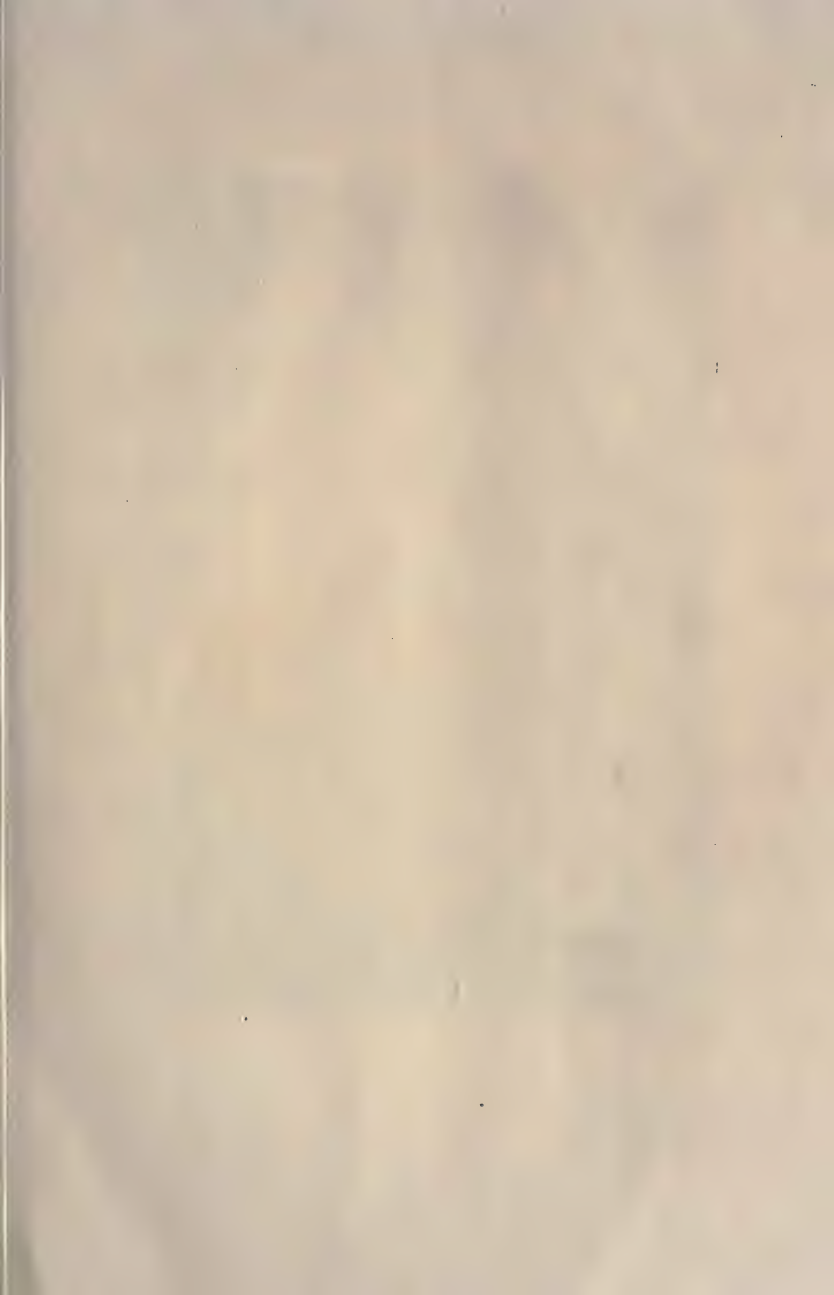
＊ 全集 10—270

に巴里を辭し、五月に入つて倫敦を發つて來た先生は、漸く七月のはじめになつて、故國の、思ひ出も深い神戸の港に辿りついた人であつた。

何よりも、この旅から歸つた人の願ひは樂しい休息であつた。國を出て三年の間、彼は殆んど歩きづめに歩いて休息らしい休息も知らない旅人のやうなもので有つた。それは、贅澤は言はない、せめて日本の疊の上で思ふさまこの身體を横にして見たいと思ふことであつた。――その疊が今は自分の眼前にある。室內の組立のすべてに木で出來た線と質との柔かさがある。敷居を滑る伊豫簾の明るさがある。緣側の外には夾竹桃の花も盛りな時であつた。……あゝ極樂、極樂、この旅人は部屋の內をごろ／＼轉がつて歩いても足りない程の氣樂さを、その旅館の疊の上にまづ、味つてゐるのだつた。

『神戸の港に歸り着くからその夕方まで、自分の目や耳に觸れたことを纏めて來ると、自然と私の心は巴里の旅窓にあつて望んで來た幾多の事物との比較に落ちて行つた。あの羅甸の文明を――歐羅巴にあるクラシックの文明を形造るものは、その性質に於てはすべて集中的である。一國の都市が左樣だ。一都會の

木曾福島にて（左より先生・鷄二・蓊助・楠雄）

窓

芝二本榎及び櫻川町時代（四十五歳——四十六歳）

「還るのを赦されるのだ。」——

一晝夜に三百十五六浬を馳る快い速力で、先生を乘せた船はドバアの海峽を通り越して行つた。航海の五日目には英吉利沿岸の白く光る崖も遠く彼方になつた。早や何方を向いても陸といふものを見ることの無いやうな、靑い深い大海の眞中に出て行つた。＊………

遠く、南亞弗利加の果を廻り、赤道を二度も越した——五十五日の長い船旅の後、四月の末

＊ 全集 11—398

であらう。‥‥

かくて――先生は、遂に歸國の旅の船に上つた。‥‥淚の樣な、五月雨が濁つた波の上へ落ちて來た。

ての思ひを遂げる時が來てゐた。そこで彼は髭を落しに掛つた。部屋には壁に寄せて造りつけた石の洗面臺がある。その上に姿見がある。彼はその前に立つて自分で剃刀を執つた。惜氣もなく剃刀を動かす度にもう幾年となく鼻の下に蓄へて置いたやつが曲めた彼の顔を滑り落ちた。好くも切れない剃刀で、彼は周圍の腫れ上るほど力を入れて剃つた。

曾て國の方で人を敎へたこともある自分の姿のかはりに、ずつと以前の書生時代にでも歸つて行つた樣な自分の姿がそこへ顯れて來た。最後に姿見の方へ行つて剃立ての顏を眺めた時、今まで髭に隱れて居た鼻の下あたりが靑々として見えた。ところ〴〵からは血も滲み出た。』*

——せつない、鬱憂に暗い道。……その避けがたい命運の樣な一筋の道を行き行く旅人の姿は憾み深い。……若くしてその濃い綠髪を剃り丸めるまでの劇しさを持つてゐた憂鬱のこの道は、そこに夜の海の「死」の岸にまで續いてゐた。そして、先にはまた、めぐりにめぐる半生の艱難と憂鬱とに閉ぢられたその道が、遂に異國の戰の塹濠に埋めるその「死」を思はせるまでの恐ろしい道に續いてゐた。——かくて、そこに霜の白さを持つて來た樣なその人の髭毛は、再び更生をおもふその手に、劇しく剃り捨てられる處に、まこと、血の慘むおもひも深かつた

* 全集 11—382

三年の月日の間に、よくそこへ旅の憂さを忘れに來た處であつた。『故郷なしには生きられないほど國の方にある一切のもの〻戀しかつた時。一日二日の絶食を思ふほど旅費も乏しく心もうら悲しかつた時。行ける丈の旅を行き盡して、一番最後に呼んで見たいものは、十二年も連添つた亡き妻の名でもなく、何と言つても濁り氣のなく感じ易い青年時代に知つた最初の情人の名であつたほど、それほど旅の心の閉ち塞がつてしまつた時。左樣いふ時に彼が見に來たのはこの水だ。』* ――さらば、セエヌ！――石橋の下の方へ渦卷き流れて行く淸いセエヌの水を見る眼で、遲くも二月か二月半ばかりの後に、あの隅田川を再び見ることが出來るかと考へた時は嘘のやうな氣がするのであつた。

『かねて岸本にはこの旅の終る頃に爲し遂げたいと考へて置いたことが有つた。巴里を引揚げる頃が來たら自分の髭を剃落してしまはう、そして歸國の途に上らうと考へて居た。不思議と言へば不思議、突飛と言へば突飛な考へではあつたが、心に編笠を冠る思ひをして國を出て來た岸本には別にそれが不思議でもなく突飛でもなかつた。何か彼は現在の自分の心を實際に自分の身に現はしたかつた。

しばらく、岸本は部屋の寢臺に腰掛けて自分が自分の爲ることを制止めやうとして見た。しかし、かね

* 全集 11—386 參照

「二度と斯ういふ旅をしやうとは思ひませんね。」

――また、先生は嘆息をして、それを言つて見せた。そして、この歸國の容易でないことを、そこに尠なからぬ精神の勇氣を要することをも思ひ見るのであつた。

最早先生は巴里にぢつとしてゐる在留者ではなくして歸國の途に上りかけて居る旅行者であつた。ソルボンヌの大學に近い旅館に移つてから、毎日のやうに用達に出歩いた。歸國の手續をするために。また國の方への志ばかりの土産を探すために。また日頃懇意にした家に別離をつげるために。……何の街を歩いて見ても、何の家を叩いて見ても、そこに戰時らしい心持を起させない處はなかつた。戰死、行衛不明、負傷、……その戰には、シヤアル・ペキイをはじめ、名を知られた筆取る人々の戰死の數だけでも數十名に上つてゐた。

先生は、また、そこにセエヌへの最終の訪問に行つて見た。すこし曇つた日で、四月らしい明るい日あたりを見ることは出來なかつた。しかし、河岸の中でも、このオステルリッツの橋の畔から古いノオトル・ダムの寺院の見える中の島のあたりへかけて、先生の好んで、過ぐる

ることならお前の胸の底に隱し有つ苦惱そのものまでも。』A

頑な、人の心にも漸くある轉機が萠した。——もし、もう再び國を見ないことに方針を決めて、義勇兵に加はつても知らない人の中へ行かうとするならば、無理にも行く道が無いではなかつた。けれど、彼も、是以上深入して、國の方に殘して置いて來た子供等を苦しめるには忍びなかつた。そこまで行つて彼には漸く歸國の決心がついた。

『三年近い月日が異鄕の旅の間に過ぎた。遠い島にでも流された人のやうに自分の境涯をよく譬へて見た岸本は、自分で自分の手錠を解き腰繩を解く思ひをして、侘しい自責の生活から離れやうとして居た。歸國の日も近づいて來た。降誕祭の前には既に來る筈であつたその日も、半年ほど延びて、旅で迎へる三度目のあの祭と、翌年の正月とをも岸本は巴里の下宿の方で送つた。あの佛國汽船でマルセエユの港に辿り着き、初めて佛蘭西の土を踏んで見た頃から數へると、最早足掛四年にも成る……』B

「國の方では奈何いふものが僕等を待つてゐて呉れますかサ」——友達の顔を見る度に先生はそれを言はずには居られなかつた。

A 全集 11—346　B 全集 11—371

「生きたいと思はないものは無い。」――

一日は一日より先生の旅の心は濃くなつて來た。……窓側の壁に掛けてある佛蘭西の暦は漸く春の來ることを語つてゐた。家を出てセエヌの岸に立つて見ると、そこのマロニエの並木も芽ぐんで來て居た。

――先生は旅人らしく自分の周圍を見廻すと、來るべき時代のためにせつせと準備して居るやうなものゝあるのに氣がついた。彼の眼には、どう見てもそれは芽だ。間斷なく怠りなく支度して居るやうな芽だ。それは可成もう長いこと萠して來たものであるとも言へる。けれども何人の骨髓にまでも浸み渡る樣な歐羅巴の寒い戰爭が來て、一層その發芽力を刺激されたやうにも見える。左樣したものが彼の周圍にあつた。そしてその芽の一つとして、曾て一度は頽廢したものゝ再生でないものはなかつた。……その芽が先生にさゝやいた。

『お前も支度したら可いではないか。澱み果てた生活の底から身を起して來たといふお前自身をそのまゝ新しいものに更へたら可いではないか。お前の倦怠をも、お前の疲勞をも――出來

つて地べたに額を埋めてなりとも心の苦痛を訴へたいと思ふ人は父であつた。」A

「捨吉、捨吉」

と子供の時に聞いた父の聲がもう一度先生の耳に聞えて來るやうに思はれた。そして、先生はこの父の前に自分の旅の身を持つて行つた。——暗夜に港を離れ行く佛蘭西船の甲板に別れを告げた時は、實はあの神戸も見納めのつもりであつたこの旅も、茲に、これから先の方針を定めねばならないところまで來てゐた。

「——時局は一層彼の旅を不自由にした。折角懇意になつた佛蘭西人で國難のために夢中になつてゐないものは無かつた。學問も、藝術も、殆ど一切休止の姿だ。彼の周圍には戰爭あるのみだ。

岸本は異鄕の土となるつもりで國を出て來た自分の決心が到底行はれ難いことを感じて來た。國では彼を待つ頼り無い子供があつた。彼は、あだかも冷たく嚴かな運命の前に首を垂れる人のやうにして、斯うした一生の岐路に立たせられるよりは與へられた生命を返したいとまで嘆いた。彼は亡き父の前に自分を持つて行つて、「この生命を取つて下さい。」とも祈つた。」B

A 全集 11—323　B 全集 11—341

……このさびしい異鄕の窓に、午後の三時半頃には最早暮けかけて、一晝夜の大部分はあだかも夜であるかのやうな巴里の冬がやつて來た。——先生は、その窓で、再び、故國を思ひ、また故國から來た手紙を讀んだ。濃い霧で町の空も暗い日が續いた。そして、寒い雨の來る晩なぞは、先生は遠く離れてゐる友人等の名前を呼んで見たいと思ふことすら有つた。一人の友人が繪葉書のはしに書いてよこして吳れた「寂寞懷〻君」といふ言葉などを胸に浮べながら、その窓に行つて眺めた。

この侘しい冬籠りの中で、先生の心はよく、自分の父親の方へ歸つて行つた。しきりに、あの少年の頃に別れた父のことが戀しくなつた。……『半生を通して続りに続つた憂鬱——言ふことも爲すことも考へることも皆そこから起つて來てゐるかの樣な、あの名のつけやうの無い、原因の無い憂鬱が早くも青年時代の始まる頃から自分の身にやつて來たことを話して、それを聞いて貰へると思ふ人も、父であつた。何故といふに、岸本の半生の惱ましかつたやうに、父もまた惱ましい生涯を送つた人であつたから。假りに父が斯の世に生きながらへて居て、自分の子の遠い旅に上つて來た動機を知つたなら何と言ふだらう、……けれども、岸本が最後に行

として居た。冷い街路を踏んで行く馬の蹄の音までが耳についた。彼は思つたよりも寂寞とした巴里に歸つて來たことを感じた。』＊

第二の季節が何となく先生にやつて來たのも、リモオジュの田舎へ出掛けた頃からであつた。あの耕作と牧畜との地たるオート・ヸエンヌで刺激された心をもつて、もう一度巴里の生活を試みるつもりで歸つて來た先生は、――置き捨てゝ行つた荷物や書籍の上に積みに積んだ塵埃の暗いのをそこに見るのだつた。黒い巴里！一時はこの都も獨逸軍の包圍を覺悟し避難者のためにはあらゆる汽車を開放したとか、麵麭などは誰にもたゞで呉れたと云ふ、多くの市民は乘るものもなく、皆徒歩で立退いたとも、それらの人達が夜の街路に續いて、明方まで絕へなかつたといふ巴里の當時をそこに聞くのだつた。……街へ行つて見ると、日頃人通りの多かつた並木街にも、數へるほどの人に行き逢ふばかりだつた。それも老人と婦人とだけであつた。戰死、行方不明、負傷、――そんな戰地の方の噂がそこにあつた。……セエヌも寂しさうに流れてゐた。

＊ 條錄 11—307 參照

た。汽車の窓を通して暗い空に無數の燈火を望んだ。そこが佛蘭西政府と共に日本大使館までも移つて來てゐるボルドオであつた。

ボルドオで、先生を待つてゐたものは、二日とも降り續いた雨であつた。しかし、先生には西方佛蘭西を想像して來た樂しみがあり、そこまで動いたといふ樂みがあつた。そして、尙、雨に濁つたガロンヌがあつた。それは、先生に取つてなつかしいもの隅田川を一番よく思はせるものであつた。先生は、この河口を見にも行つて見て、つく〴〵と鄕國を離れて遠く來たことを思ふ人であつた。

十一月十六日であつた。——『再び巴里を見るのは何時の事かと思つて出て來たあの都の方へもう一度歸つて行く樂しみを思ひ、新しい言葉の世界が漸く自分の前に展けて來た樂しみを思ひ、ボルドオから私は夜汽車で發つた。今度歸つて見たら奈何いふ冷い風があの都を吹き廻して居るだらう、幾人の同胞に逢へることだらう、と彼は思ひやつた。窓の外は暗し、車中で眠らうとしても碌々眠られなかつた。同室の乘客がひどく疲れた頃に汽車の中で夜が明けかゝつた。……

朝の八時頃に私は復たドルセエ河岸の停車場に着いた。荷物と一緒に乘つた辻馬車の中から私は右を眺め左を眺めして行つた。ボルドオの公園の方で古池の畔に深い秋を語つて居た黃ばんだ柳の葉を眺め、南國的なユグノリアの生々とした濃綠を眺めて來た眼には、町々は早や全くの冬景色であつた。並木も枯々

は直に私の側へ來たし、あるものはなか〳〵用心深くて私の側へ寄るのを氣味惡さうにしてゐるもあつた。

「みんな好い兒ですね。丁度あなた方と同い年ぐらゐな子供を小父さんも國の方へ殘して置いて來ましたよ。この小父さんはそんなに恐いものではありませんよ。」

と、私が言つて見せたら終にはその小娘達は私に歌を聞かせるほど親しく成つた。「パトア」と稱へるリモオジユの方言で出來た俚謠の一節をそれ等の邪氣(あどけ)ない子供の唇から聞いた時に、思はず私も涙が迫つた。いよ〳〵リモオジユを去る時が來て見ると、別れを告げて行きたい馴染の子供はあそこにもこゝにもと思ふほどあつた。』*

二月半の滯在は短かつたとは言へ、歐羅巴へ來てからのことがしつくりと纏まつて考へられたのもそこであつた。ヸエンヌ河よ、さらば。——旅の次手に、佛國の西部へ、葡萄を産する溫暖な地方へ、……と志して行く、先生の汽車の窓に、その河も見えない頃には、折からの秋雨も歇んでゐた。

……暗くなつて、ガロンヌ河を渡つた。平時であつたら六七時間程の路程に十一時間も要つ

* 全集 12—242

「私達がリモオジュを去らうとした頃には、十一月中旬のはじめを迎へた。もう毎朝霜が來るやうに成つた。煖爐では薪を焚くやうに成つた。私は葡萄の熟するからやがてそれが酒に醸されるまで居て見た。斯の田舍で刺戟された心をもつて、もう一度あの巴里の空氣の中へ行かうと思つた。よく行つて草を藉いた牧場にも、赤い田舍風の屋根や建築物の重なり合つた對岸の町々にも、リモオジュ市全體を支配するやうなサン・テチエンヌの高い寺院の塔にも別れを告げて行かうと思つた。二度とこんな佛蘭西の田舍へ來て見る機會があらうとも思はれなかつた。

この田舍で私が旅の心を慰めたことの一つは種々な性質の子供と懇意に成つたことであつた。その中には、マテランの家の前を通る娘達が栗拾ひに行くと言つて私に聲を掛けるばかりでなく、林の方から拾つて來たのを私に分けて、

「日本人、栗をおあがり。」

と言つて呉れたものもあつた。私はあの可愛らしい娘達にも別れを告げて行かうと思つた。あの娘達とは年齢も違ふが、ボン・ナフの橋畔の家へ行つて私が腰掛ける度に側へ來てよく戯れた二三の女の子供もある。私は小さな菓子の袋を十文がとこ奢つたのが始まりでその小娘達が橋畔の並木の下に落ちてゐるプラタアヌの葉を集めては私のところへ持つて來るほど慣れた。小娘の性質にもいろ〳〵あつて、あるもの

一生の失敗だつたらう。斯の深い感銘は時と共にます〳〵はつきりとして來ることはあつても、薄らいで行くやうなものではなかつた。しかし、一時のやうな激しい精神の動搖は次第に彼から離れて行つた。不幸の姪に對する心地のみが殘るやうに成つて行つた。その時になつて彼は心靜かに自分の行爲を振返つて見た。どうかして生きたいと思ふばかりに犯した罪を葬り隱さうとした彼は、假令いかなる苦難を負はうとも、一度姪に負はせた深傷や自分の生涯に留めた汚點を奈何することも出來ないかのやうに思つて來た。彼は自分を責めれば責めるほど、涙ぐましいやうな氣にさへ成つた。』*

しかも、……オート・ヸエンヌの秋は何となく柔かな新しい心をこの一人の人間に起こさせた。彼は長い年月の間ほと〳〵失ひかけて居た生活の興味をすら回復した。假令罪過は依然として彼の內部に生きて居るやうなものであつても、彼はいくらか柔かな心でもつて、それに對ふことが出來るやうに成つてゐた。

……マルヌの戰も敵軍の總退却で終り、巴里包圍の危險も去つた。——下宿の主婦も姪を連れてまた巴里の方へ去らうとしてゐた。

* 全集 11—285

らしい田舍の光景でないものは無かつた。野菜畠には戰地にある子を思ひ顏な老人が耕してゐた。麥畠には婦女の手だけで收穫の仕事をしやうとする人達が働いて居た。ギエンヌ河の岸に沿ふて高く立つサン・テチエンヌ寺への阪道の角には、十字を彫り刻んだ石の辻堂がある。香華を具へた聖母マリアの像がその辻堂の中に祠つてある體縮み背髓の踻つた老婆が堂の前で細長い蠟燭を賣つて居る。その蠟燭の日中に並び點る火影には、黑い着物のまゝ石段の上にひざまづいて、戰地にある人のために無事を祈らうとするやうな年若な女も居た。*

故國の方へ歸られやうとも思はれぬ樣な心から、劇しい戰場の方への、從軍の志望を持ちながら、…遂にそれを果さなかつた先生はこの町はづれへ來てから、戰時に際會してのたよりを書いて故國に居て心配する人達のために送らうとした。…そして、また、そこに思ふことは、故國のことであつた。——そこには、何物を犧牲にしても生きなければならなかつたやうな一つの魂の半生があつた。

『…夢の樣に急いで來た遠い波の上——知らない人の中へ行かうとのみした名のつけやうの無い悲哀——何といふ恐ろしい眼に遭遇つたらう。何といふ心の狼狽を重ねたらう。何といふ

* 全集 11—282 參照

その願ひが叶ひさうにも見えて來た。』A

巴里にまだ殘つてゐた山本氏からは急いで書いたらしい手紙が來た。それには既に佛蘭西政府は他へ移つたらしい。大使館でも昨夜書類の燒却などをやつてゐた。昨日午後獨逸の飛行機が巴里に六つの爆彈を落した。敵の騎兵は八十キロメートルの處まで來てゐる。……といふ樣なことがあつて、「巴里に歸ることを止めらるべし。必ず」としてあつた。巴里に在留する三人の美術家は英國へ逃れやうとして不可能となつたともしてあつた。

『前途のことは言ふことが出來なかつた。しかし岸本と牧野とは宿の人達の厚意で比較的安全な位置に身を置くことが出來た。主婦は岸本のために何處からか机を借りて來て、それを二階の部屋の窓の側に置いて吳れた。蔓の延びて來て居る葡萄棚を越して窓の外にはバビロン新道が見えた。岡の地勢を成した牧場はその新道まで迫つて來て居て、どうかすると赤い崖の上へ來る牛の顏が窓の硝子に映つた。』B

……大風の吹き去つた後のやうな寂しさは斯の田舍にもあつた。働き盛りの男子は皆畠や牧場を去り、馬は徵發され、小屋も空しくなり、陶器の工場も閉され、商家も多く休み、中學や商業學校の校舍まで戰地の方から送られて來る負傷兵のための收容所となつてゐた。先生の眼に觸れるものは何一つとして戰時

A 全集 11—277　B 全集 11—281

うと思立つた人であつた。一部の旅行が許されたのである。一人につき三十キロ以下と限定された手荷物を兩手に、一切を捨てる心算で、もう秋の空氣の通つて來た巴里を、——ドルセエ河岸の停車場から出る汽車で後にした。……八月二十七日であつた。

佛國オート・キエンヌ州、リモオジユ町、バビロン新道。——

そこが、同行した正宗得三郎氏と一緒にしばらくの宿とした處であつた。先生は巴里から七時間で、この喇叭を吹いて新聞を賣りに來る女のあるやうな在鄕臭い町はづれへ來て居た。『國を出て早や十五ケ月ほどに成つた。五ケ月とは言つても岸本に取つては隨分長い月日であつた。過ぐる十五ケ月は三年にも四年にも當るやうに思はれた。彼はもう可成長い月日の間、故國を見ずに暮したやうに思つた。その間、日頃親しかつた人々の誰の顏を見ることも出來ず、誰の聲を聞くことも出來ずに暮したやうに思つた。彼は歩きづめに歩いて、まだ宿屋に辿り着くことの出來ない旅人のやうに自分の身を考へた。この佛蘭西の田舍へは彼は心から多くの希望をかけて來た。何よりも彼の願ひは、たましひを落着けたいと思ふことであつた。どうやら

の御便りが無事に故國に屆くことを祈ります。』A

「運命は何處まで自分を連れ行くつもりだらう」

——それは旅の身に、いよいよ艱難な道であつた。

『宵の明星の姿が窓の空にあつた。時々その一點の星の光を見やうとして窓側に立つと、凄まじい群集の佛蘭西國歌を歌つて通る聲が街路の方に起つた。夜の九時といへば町々は早寢して、燈火の數も減り、饑へた犬の鳴聲が何となく彼の耳についた。この都會に殘つて居る人達は奈何なるだらう、婦女は奈樣な目に逢ふだらう、それを思ふと普佛戰爭の當時巴里の籠城をした人達は暗い穴藏のやうな地下室に隱れて鼠まで殺して食つたと言はれてゐるが、それと同じやうな日が復た來るだらうかとは、考へたばかりでも恐ろしいことであつた。』B

到頭、先生も、一年餘の巴里を離れたいと思ひ立つやうに成つた。——この巴里では、もう何事も手につかなかつた。英國の方へ戰亂を避けやうとする友人を停車場の方へ送りながら、先生は、下宿の人達に誘はれて主婦の鄕里の方へ…… これを機會に佛蘭西の田舍をも見て來よ

A 全集 9—153 B 全集 11—273

くことも出來なかつたのみならず、郵便物が發送されるや否やさへ氣遣はれました。

斯の六日ばかりの間、私共は事實に於て巴里の籠城に等しい思を致しました。何故といふに佛蘭西以外の國から來た爲替の支拂は一切禁止され、市民はいづれも爭つて食料品の貯蓄を用意するほど急激な渦の中に立つたからです。一切の乘合自動車は動員のために徴發せられ、時には電車の絶える日さへありました。普佛戰爭で苦い經驗を嘗めた巴里市民はまさに來らうとする大きな戰爭を豫想して悲壯な感じに打たれました。兎も角も私共は臨時の日本人會を組織し萬一の場合に備へることゝ致しました。……』*

八月八日、それが、この「佛蘭西だより」の日附であつた。……それには、また、こんな言葉が書きつけられて、慌しく結ばれてあるのであつた。

『斯の出來事につけても、私は戰地の方へ行つて見たいと思ふ心が動かないでもありませんが、自分の身を苦しめることのみ多くて、思はしい通信を書くことも出來なからうと存じます。それよりも周圍の事情の許すかぎりは斯の藝術の都に踏み留まらうと存じます。

測り知り難いのは今後の形勢です。あるひは故國との交通の途が一時全く絶えるやうな日が來ないとも限りません。種々申上げたいことも御座いますが、只今は取急ぎ認めます。私は斯

* 全集 9—151

大正三年七月末。先生がアウストリア對セルビヤの宣戰の布告を讀んだのは、ともすれば前途の思ひに胸を塞がれる樣な初夏の日を送つた下宿の机の上で、「櫻の實の熟する時」の勞作に取掛つて居る時であつた。一日は一日より何となく街々の樣子がおだやかでなくなつてきた。來るべき大きな出來事の破裂を暗示するやうな不安な空氣の中に先生は、故國の方に待たれてゐるその仕事を急がなければならなかつた。

『倫敦電報その他にて容易ならぬ當地の形勢は既に〳〵御承知のことゝ存じます。北の停車場へ人を送りに行つて獨逸國境との交通が絕へたことを知つたのは本月一日の午後でした。アウストリヤ對セルビア宣戰の日から數へて僅に一週間の後です。西伯利亞經由とした郵便物が全く私共の許へ來なくなつたのも其頃です。翌日（二日）は既に動員令下り、巴里には戒嚴令布かれ、壯丁といふ壯丁は續々國境に向ひつゝあります。

斯く形勢が迫つた日から一度當地の樣子を御知らせしたいとは思ひながら、取りあへず在留の日本人一同が大使館に集るとか、各自警察署へ出頭するとか、その他名狀しがたき混亂の中にあつて斯の通信を書

のをせめてもの樂しみとした。

『……湯沸の湯が煮立つた。國から持つて來た薄手の煎茶茶碗も、一つ破れ、二つ破れして、白地に藍の蘭の模樣のついたのが唯一つだけ殘つて居た。一年近く旅するうちに、國から餞別に貰つて來た盆の漆も巴里の空氣に乾いて、ところ〴〵剝て取れて來た。風土の相違はこんなお茶道具一つの上にもあらはれてゐた。』*

「今日まで自分を導いて來た力は、明日も自分を導いて吳れるだらうと思ふ——そんなに心配してくれ給ふな。」……東京の方のある友人に宛てゝ書いたこの言葉が、そこには想ひ出られた。出來ることなら彼はこの旅先で適當な職業を見つけたいと願つて居た。出來ることなら國の方に殘して置いて來た子供等までも引取つて異鄕に長く暮したいと願つて居た。それには、もつとこの國の言葉を學ばなければ、とも思つてゐた。しかし、やゝもすると、彼は、そこに眼前の旅さへ困難としなければならなかつた。

「運命は何處まで自分を連れて行くつもりだらう」——こうした疑問は、流石に先生の胸をも騷がせないでは居なかつた。しかも、あの歐洲戰亂は來た！

* 全集 12—160

プラタアヌも芽から葉へと急いで、一日は一日よりその葉が開き形も大きく色も濃くなつて行くうちに、早や町には若葉の世界であつた。人の家の石垣越しなどに紫や白に密集つて咲く丁香花もさかりの時に成つて來た。この好い季節は先生の心を活きかへるやうにした。しかも、そこには何故か、妙に落着きを失つた樣な心持の日が續いてゐた。どうかもすると居ても起つても居られないやうな日が來たり、また、時の送りやうの無い樣な日も來てゐた。先生は、そこに、兎もすれば、あてもなく若葉の間を歩き廻つては、疲れたからだを悄然と下宿の窓側に寄せて見るのであつた。

『——曾て信濃の山の上で望んだと同じ白い綿のやうな雲を遠い空に見つけた。その春先の雲が微風に吹かれて絕へず形を變へるのを望んだ。親しい友達の一人も今は彼の側に居なかつた。國から持つて來た仕事も兎角手に着かなかつた。その中でも彼は東京の留居宅への仕送りをして遠く子供を養ふことを忘れることは出來なかつた。そろそろ自分も懷鄉病に罹つたのか、それを考へた時は實に忌々しかつた。どうかすると彼の部屋の板敷の床の上へ自分の額を押宛てゝ泣いても足りないほどの旅の苦痛を感じた。』*

——その苦しさの後に、先生はよく、獨りでその室の中に國の方から到來した茶を煮て呑む

* 全集 11—218

旅の空にも、クリスマスが來た。――羅馬舊敎國の靜かなこの質素な祭日を送ると、屠蘇も雜煮もない正月が來た。そして、先生は激寒を豫想してゐたには少し意外な、割合に溫暖な日の多い二月を迎へた。

『何かにつけて私は國の方のことを思ひ出すやうに成つた。私の下宿から近い天文臺前の廣場のところで四方から續いた並木の街路が落合ふ辻の一角には、丁度「リラ」の珈琲店の前あたりに、花を賣る婆さんの屋臺があつた。語學の敎師の家から歸りがけに、私はその婆さんの店から室咲のオイエーを買つて、それを提げながら戻つて來た。溫暖い雨の中を步いて旅の外套が濡れたのも嬉しかつた。私は獨りで徒然な時の慰みにするつもりで、買つて來た花を部屋の暖爐の上に置いて見た。――オイエーの花瓣は變り咲の朝顏でその牡丹種に似て居る。白いうちに淡紅を帶びたのは殊に可憐な風情がある。椿のやうな甘い香をも持つて居る。』*

やがて、また、――巴里の最も樂しい時が來るのだつた。同じ街路樹でも、眞先にこの古めかしい都へ青々とした新しい生氣を注ぎ入れるものはマロニエであつたが、後れて萠え出した

* 全集 12—121

ところには、「セザンヌ夫人の肖像」が掛つて居た。藍がかつた灰色の畫で僅に夫人の頰のあたりに林檎のやうな紅味を見せて居た。セザンヌの作品の中でも、私はその夫人の肖像の畫を最も好ましいものの一つに思つた。

二階へ上ると、そこにはあの畫家の晩年の大作なる「浴女の群」に達するまでの後期の作品が多くあつめてあつた。身動きの成らないやうに思ひつめたセザンヌの嚴肅さが次第にある變化を求めに行つた心の跡が部屋々々に辿られる。それらの晩年の作品には一つとして畫家が内的生活の變遷を語らないものは無かつた。動かない生物や動かない人物を好んで描いた畫家の色彩までが變り展けて行つて居た。そこには新しいシムフォニイの世界があつた。深い舞踏の世界があつた。畫中の草も木も躍つて居た。そして、それらの作者がペルラン氏の居間らしい部屋にも、寢室の壁の上にも掛つて居た。おそらくその家の主人は寢臺の上に横になりながらでもセザンヌを見ることが出來たであらう。

「いかに言つても、セザンヌは狹いなあ。」

と山本君は其二階を降りてから、ほつと息を吐くやうにして言つた。」＊

＊ 全集 12—120

やうな機會も多くなつてゐた。

先生はもう、宿に近いルュキサンブウルの公園にも馴れてゐた。ジョオジ・サンの石像のあるところに近い靜かな小ルユキサンブウルの草地をも知つてゐた。「セエヌは女だ、底は知れないけれども美しい」とモオパツサンの謂つた靜かな河の蒸氣までモレル氏の「よき佛蘭西の家庭」をも見て來てゐた。そこには淡い黃ばんだ月に對つて立つて居る思ひ深い晚年の尼さんの畫もあつた。また、ゾラの墓のあるパンテオンにシヤヴアンヌの壁畫を見に行つてゐた。また小山內氏に誘はれてシヤンゼリゼヱの劇場をも、またセーヌに近いシヤトレヱの劇場をも見てゐた。モンマルトルのお茶ものんで居た。異鄉に初めて迎へる共和祭の騷がしさにも遭つてゐた。また、ボオドレヱルやモウパツサンが永眠の地なるモンパルナツスの墓地の方へも、また山本氏等を見るために場末の樣なシテイ、フアルギエールの方へも出かけて行つたゐた。そして、この旅仲間に新らしく加はつた小杉未醒氏の歸國の日も近づいた頃には、小杉氏の外に山本、滿谷氏等を加へて郊外の方にペルラン氏の住宅にセザンヌの遺畫を見にも出かけた。

『……私達は更にいろ〳〵な額の掛つた壁に添うて二階に通ふ階段を昇つた。その壁の橫手の

窓にはプラタアヌの並木の青葉が、近く茂つて居た。その並木の青葉が巴里に着いたばかりの頃から見ると早や緑も濃く、花とも實ともつかない小さな栗のイガのやうなものが青い毬を見るやうに葉蔭から垂下つた。――先生はその窓へ行つて、‥‥故國の方から來たなつかしい、また心の騒ぐ様な手紙を讀返した。そして、深い溜息をついた。

まづ異郷に言葉の勉强をはじめた先生も、その頃になつて、漸く、この國の日夜に馴れて來てゐた。――日がな一日立ちつゞけてゞも暮して居るやうな氣ばかりして、時には子供のやうに泣きたくなることすらあつたほどの慣れない椅子にもすこし慣れて、どうやら腰掛けて暮せるまでに成つてゐた。

そこには漸く故國の方へ約束して來た通信*をも送りはじめてゐた。そして、その仕事に勵まされる心をした。――また巴里でめぐりあつた同胞も、同宿の大寺氏、芝居を見に來た小山内氏、またシモネヱの下宿に來た澤木梢氏、また同氏の紹介で知つた畫家の山本鼎氏、そして山本氏を通して巴里に在留する同胞、殊に美家術仲間といふ様にその旅人らしい面を合せあふ

* 佛蘭西だより

た。そして、それから四日目の朝には、巴里の一つの停車場ガール・ド・リヨンに降り立つてゐた。朝の辻馬車はそこから先生を旅の荷物と一緒に乘せて、初めてセエヌ河を渡つた。まだ町々の響も喧しくない五月下旬の朝の街路にプラタアヌの並木はやはらかい若葉をつけてゐた。

巴里の天文臺に近い並木街の一角――ポオル・ロワイアル町の下宿が、先生を待つてゐた。……先生は七層ばかりある建築物の内の第一階の戸口のところで、年とつた壯健さうな婦の赤黑い朝の寢衣のまゝで出て迎へるのに逢つた。その人が下宿の主婦であつた。彼女は、言葉の通じないこの旅人の方に、早朝の寢衣を着てゐることを謝しながら、歡迎の意味をも通はせて、兩手を彼の方へひろげて見せた。

『私はポオル・ロワイアルの通りを隔てゝ古い建築物の塀と對ひ合つたやうな位置にその部屋を見つけた。大寺君の話で、その古い建築物が巴里の產科醫院だといふことを知つた。一つある窓の側へも行つて見た。圓い行燈のやうな塔がその窓から見えた。それが巴里の天文臺の塔だといふことも知つた。國の方で見慣れたものと、今この旅窓で望むものと、その間には何の關係があり何の連絡があると思はれるほど一切が隔絕れて居た。』*

* 全集 12—43

々とした燈火のみが望まれた。』*
——遠い前途の思ひが、今更に先生の胸に塞まつた。……かなしい、さびしい日本の燈火も遂に、遠く消へて行つた。ともすれば馴れないフランス船の船床に腕組をする樣な日夜が通つた。海は黑ずんだ藍色から、次第に黃に濁つた色に變つて來た。船は搖れた。しかも、その船の中に、彼は波に搖られて居ることも忘れてしまふほどの、……切ない一つの手紙を書かなければならなかつた。それは、兄にあてゝ、彼女——姪のからだをたのむ手紙であつた。彼は、圓い船窓に映る波の反射の靜かな中に、それを書いた。……自分は遠い異鄕に去つて、激しい自分の運命を哭したいと思ふ、とも書いた。
船は更に海深く動いて行つた。——初めて見る熱帶らしい日光が、もう先生の眼にあつた。先生は甲板の片隅に置いた長い籐椅子から身を起して、何となく暗い紫色に變つて來た、畏ろしい感じのする海を眺めて、思はずホツト息をした。
三十七日の船旅の後で、先生のからだは、眼ざして來たフランスの、マルセエユの港に着い

* 全集 10—13

PARIS (XIV – Boulevard de Port-Royal
rue du Faubourg Saint Jacques – La Maternité
PARIS

ポオル・ロワイアル街

燈　火

巴里ポオル・ロワイアル町（四十二歳—四十五歳）

海は暗かつた。——

『エルネスト・シモンが錨を拔いたのは、夜の十一時頃であつた。もう一度私が甲板の上へ出てみた頃は、船は動きはじめて居た。その時は全く獨りになつた。故國を辭し去る心が激しく胸に浮んで來た。暗い夜は海をつゝんで、何もかも隱れ潛んで居た。別れて來た海岸の棧橋も港の町にも、碇泊する船舶のかたちさへも見ることが出來なかつた。唯海上の空氣を通して點

不朽の書、「千曲川スケッチ」を上梓して、吉村樹氏に贈り、また、緑蔭叢書第三編として、日本のクラシックたる「家」を公刊し、尙、その第四編として短篇集「微風」その他を出版し、また父正樹の爲に遺稿歌集松が枝を編んだのも、この苦しい年月の間のことであつた。

……そこまで、この人は行詰つて行つて、遂に、そこに一道の活路を見出した。心を起さうと思はゞまづ身を起せ。——『一切を捨てゝ海の外へ出て行から。全く知らない國へ、全く知らない人の中へ行から。そこへ行つて恥かしい自分を隱さう。斯うした心持は、自ら進んで苦難を受くることによつて節子をも救ひたいといふ心持と一緒に成つて起つて來た。』A

男の厄年と言はれる四十二歳の春であつた。……急に白髮が多くなつたといふ風に言はれる言葉に苦しく笑ひながら、遠い別離を思ひながら、柳の蔭に「河」を見に行く先生であつた。『ある人々に取つては、河は一定の形と色を有する水の流である。ある人に取つては、一定した形もなく、一定した色もなく、流動して際涯の無いやうなものである。斯ういふ人の眼には赤い焔のやうな色の河といふものもある。……』B

火焔の河、火焔の家——それは、その罪のために身をもつて、そこから僅に逃れて行かうとする人を追ひ立てた。……まづ、その留守宅を芝二本榎に移した先生は、四月、言葉も通じない佛國船のエネルスト・シモン號に淋しい身心を載せて貰つて、遠いフランスの旅の空へ向つたのであつた。

A 全集 11—104 B 全集 8—40）（新片町より）

淡黄色の壁に向つて横になりながら、先生は、その腰骨に、針醫の針を深く打込んで貰つたりしながら溜息をした。

「どうかして生きたい！」

——さう言へば、先生ほどにこの悲壯な生の肯定にすがつて、並ならぬ艱難の上に生きて來た人は多くはないだらう。そして、また先生程に、幼い頃から他人の中に暮して來て、頭を低く、お辭儀をして來ながら、内心には、これほどに人に頭を下げることの嫌いであつた人も尠いらしい。……しかも、先生が、茲に出つ喰した樣な事實は、この現世のおきてに於て、どんなに羞ぢて、どんなに深く頭を下げても、到頭許され相なものではなかつた。

『「どうも仕方ない。最早是迄だ。」

岸本は獨りでそれを言つて見た。人から責められるまでもなく、彼は自分から責めやうとした。……日は、空しく暮れて行つた。夕日は二階の部屋に滿ちて來た。壁も、障子も、硝子戸も、何もかも深い色に輝いて來た。岸本の心は實に暗かつた。日頃彼の氣質として、心を決することは行ふことに等しかつた。泉太繁の兄弟の子供の聲も最早彼の耳には入らなかつた。唯、心を決することのみが彼を待つてゐた。』＊

＊ 全集 11—95

た。』＊

「過誤」といふよりは、「狂」。「狂」といふよりは「疳」の勢ひだとも言つて見たい。

三年の不自由な「獨身」の叔父の家を見るために、若い盛りの一人の姪は、その家の中に這入つて來てゐた。……「家」といふものゝ生活で結び付けられた人々の、微妙な陰影の多い、言ふに言はれぬ深い關係、義理ある兄と妹、義理ある姉と弟、叔父と姪と……殊に、この場合には傳統的の、また郷土的の「木曾谿のものゝ濃情」があつた。叔父と姪とは、狂して、お互の疳の勢ひに追立てられて、……怖しい悲劇の結果を受けなければならなかつたのであらう。

白げしに羽もぐ蝶の形見かな。

芭蕉は哀しい詩人だ。

「あんまり坐り過ぎて居る故かもしれませんが、私の腰は腐つてしまひさうです。」

＊ 全集 6—382

再婚！——そのことはやがて先生の身體の內外に聲となつてゐた。しかも、『兩性を相剋するやうな家庭は彼を懲りさせた。』*そして謂ふならば、眞の意味から女運のなかつた人は、いまは愛することをすら恐れてゐた。愛の經驗はそれほどにも彼を傷けて、この人に「獨身」の新らしい生活を思想させてゐた。しかも、彼は、結婚してからの自分で、決して結婚しない前の自分ではないといふ事實についても——妻が北海道へ歸省してゐた當時の、西大久保のある夜の記憶を忘れ得るものではなかつた。

『深い靜かな晩だ。射し入る月の光は、緣側のところへ腰掛けた三吉の膝を照らした。お俊は、從姉妹の側へ寢に行つたが、眼が冴えて了つて眠られないと言つて、白い寢衣のまゝで復た叔父の側へ來た。

急に犬の群が竹の垣を潜つて、庭の中へ突進して來た。互に嚙合つたり、尻尾を振つたりして、植木の周圍を馳けずり廻つて戲れた。ふと、往來の方で仲間の吠える聲が起つた。それを聞いて、一匹の犬が馳出して行つた。他の犬も後を追つて、復た一緒に馳出して行つた。互に鳴き合ふ聲が夜更けた空に聞えた。

「眞實に——寢て仕舞ふのは可惜いやうな晩ねえ。」

と言つて、考へ沈んだ姪の側には、叔父が腰掛けて、犬の鳴聲を聞いて居た。叔父は犬のやうに震へ

* 全集 11—45

かも、そこに、眼覺めたばかりの様な……歷へれば歷へるほどに、遂には疼き出すといふ風な一種の濃い鬱憂を殆して置いて。

「あゝ、あゝ、……」

この妻の死！　先生はそこに、本當に溜息をした。複雜な複雜な溜息であつたらうことは察するに難くない。それは、何でもやはり、兩國の川開のその日とか、その明る日だつたとかで、街の賑やかさに對して、殊に靜かな家の中であつたといふ。そして、或は餘りにも情を矯めて居る者のやうにさへ誤解され相な、冷靜な先生がそこに坐つてゐたのだといふ。

しかし、幼い子供を殘して妻に逝かれて仕舞つた先生は、いまは、『雛鳥のために餌を探す雄鶏であるばかりでなく、同時にまたあらゆる危害から幼いものを獲らうとして一寸した物音にも羽翅をひろげやうとする母鷄の役目をも一身に引受けねばならなかつた。』＊

先生は、そこに……石灰と粘土とで淡黃色に塗つた壁を見つめはじめた。心を腐らす様な退屈と、不思議な身內の疲勞とが、そこにあつた。

＊ 全集 11—48

歩き廻つたのも岸本の現に眼前に見るその同じ部屋の内だ。長いこと妻を導から導かうとのみ焦心した彼は、その頃に成つて、初めて何が園子の心を悦ばせるかを知つた。彼は自分の妻も亦、下手に禮儀深く尊敬されるよりは、荒く抱愛されることを願ふ女の一人であることを知つた。

それから岸本の身體は眼を覺ますやうに成つて行つた。髪も眼が覺めた。耳も眼が覺めた。皮膚も眼が覺めた。眼も眼が覺めた。其他身體のあらゆる部分が眼を覺ました。彼は今迄知らなかつた自分の妻の傍に居ることを知るやうになつた。彼が妻の懷に啜泣しても足りないほどの遣瀨ない心を持ち、ある時は蕩子戲女の痴情にも近い多くの憐れさを考へたのもそれは皆、何事も知らずによく眠つて居るやうな自分の妻の傍に見つけた悲しい孤獨から起つて來たことであつた。岸本の心の毒は實にその孤獨に胚胎した。』＊

「父さん、私を信じて下さい。……ネ、……私を信じて下さるでせう……」

さう言つて、奥さんが先生の腕に顔を埋めて泣いたのも、その當時のことであつた。かたくなゝ先生はその妻の言葉を聞くまでに十二年も掛つた。そして、嬉しくかなしく、その啜泣をきくことが出來たと思つた頃には、奥さんはもう、この地上から亡くなつてしまつた。——し

＊全集 11—50

て來てゐる。甥の細君が居る。女學生時代の輝子が居る。郷里の方から東京へ出て來たばかりの節子も姉に連れられて來てゐる。白い扇子をパチパチ言はせながら「世が世なら傳馬の一艘も借りて押出すのになあ」と嘆息する甥の太一が居る。まだ幼少な泉太は着物を着更へさせられて、それらの人達の間を嬉しさうに歩き廻つて居る。皆を歡待さうとする母親に抱かれて、乳房を吸つて居る繁もそこに居る。兩國の方ではそろ〳〵晩の花火のあがる音がする――

これは園子がまだ達者で居た頃の下座敷の光景だ。岸本はその頃のさかりの園子を、女らしく好く發達した彼女を、堅肥りに肥つても柔軟な姿を失はない彼女の體格を、記憶でまだありありと見ることが出來た。岸本はまたその頃の記憶を階下から自分の書齋へ持つて來ることも出來た。獨りで二階に閉籠つて机に向つてゐる彼　身がある。どうかするとその彼の背後へ來て、彼を羽翅で抱締めるやうにして、親しげに額を寄せるものがある。それが彼の妻だ。

園子はその頃から夫の書齋を恐れなかつた、畫家のアトリエといふよりは寧ろ科學者の實驗室のやうに冷く嚴肅なものとして置いた書齋の中に、左様して馴々しく居られることを彼女は夢のやうにすら樂しく思ふらしかつた。岸本が彼女に忸々しく仕向けたことは、必とその同じ仕向けでもつて、彼女はそれを夫に酬いた。時には彼女は夫の身體を自分の背中に乘せて、そこにある書架の前あたりをヨロ〳〵しながら

は深い打撃であつた。妻が亡くなつたのもそれから間もなくで、私がこの作の後篇を着手する頃には最早二人ともこの世に居ない人達であつた。甥は三十七歳。妻は三十三歳で歿した。』＊

打撃に次ぐ打撃であつた。

「今年は私も三十三の厄年です。……ひよつとすると今度のお產では、正太さんの後を追ふかも知れない、……」

心細さうに言つて、奥さんは、その家を興すといふ樣なことを空想して東京から名古屋の方にまで動いて行つて遂にそこで倒れた先生の愛甥に燈明を上げ、また亡くなつた三人の娘の位牌にも掌を合せたのだといふ。――それが、悲しみをなして、奥さんは四女柳子さんとその生命を取代へた樣にして、三枚も四枚も單衣を雫のやうにしたほどの劇しい產後の出血で死んで逝つて仕舞つたのであつた。

『簾がある。團扇がある。馳走ぶりの冷麥なぞが取寄せて出してある。親戚のものは花火を見ながら集つ

＊ 全集 6―665

『「家」を書いた時に、私は文章で建築でもするやうにあの長い小説を作ることを心掛けた。それには屋外で起つた事を一切ヌキにして、すべてを屋内の光景にのみ限らうとした。臺所から書き、玄關から書き、夜から書きして見た。川の音の聞える部屋まで行つて、はじめてその川のことを書いて見た。そんな風にして「家」をうち建てやうとした。なにしろ上下二巻に亘つて二十年からの長い「家」の歴史をさういふ筆法で押し通すといふことは容易でなかつた。出來上つたものを見ると、自分ながら憂鬱な作だと思ふ。』＊

「家」は前編を讀賣新聞へ書き、後編を「中央公論」に掲出したものであつた。非常な勞作を思はせるものだが、この憂鬱は、作そのものよりと言ふよりも、先生の「家」に受けとるものの鬱憂でもあつたらう。——しかし、それにしても、よくそのムードを、その陰影を、その血脈の色をまでにじまして立體となした傑作であつた。

『「家」は私に取つて、いろ〳〵な意味で思ひ出の深い作である。私が三十代を終りかける頃に書いたのもこの作であるし、亡き甥や亡き妻を記念するものとして殘つたのもこの作である。この稿の半ばで、私は甥の訃に接した。甥といふよりは弟のやうな親しい人の死は私に取つて

＊ 寝ごと（不同調 2—1）

を掛けたり、障子を二重張にしたりして見たが、この二重張は思はしくない。煤けて、暗くなる。で、今度は矢張普通の一重に改めることにした。今日は半日、障子張りで暮した。

×月×日

けふは日曜だ。親戚のものが集つて來た。甥の留守宅を見舞ふ爲めに、家の者は子供を連れて、親戚の娘達と一緒に出掛けるといふ。皆行け。自分獨りで留守居する。そして、ノンキにやる。斯う言つて、電車に乘りたがる子供等を送り出して置いて、表の戸を閉めた。急に家の中がシンカンとして來た。

階下には誰も居なかつた。訪ねて來る人もなかつた。隣家のかみさんが味噌を置いて行つたのと、郵便配達夫が呼んだのと、自分の書寢（休息？）を妨げるものはそれより外になかつた。寢轉んで、七月の雜誌を讀む。

「早稻田文學」には田山君が「妻に就いて」の談話なども出て居る。午後から曇つた空はやはらかな灰色がかつた光線を部屋の内へ導く。それがまた妙に蕭散な感想を起させる……』＊

それは、當時の先生の日記の一節だ。その生活だ。——そして、先生はまた、その日の中に傑作「家」に着手してゐた。

＊全集 5—559

をしたで人あつた。そして若い頭を剃つて青坊主にまでなつた事のある人であつた。

『幸か、不幸か、ストリンドベルクにはそれほど女運のなかつたばかりに、女の價値といふものが低くならないで、晩年に到るまでそれを重く視つゞけて行つた人のやうにも思はれる。これは作家として、また人としての彼を知る上に、かなりデリカなことであらうと思ふ。何故かなら、女を知れば知るほど女の價値が低くなるといふのは多くの人の場合であらうから。』*

これは、ファンニイ・フアルクネルの「青い塔の中のストリンドベルグ」に關する感想の中にある先生の言葉だが、先生も當時、從つて或は、重苦しく視すぎられたからの苦惱の倍加ではなかつたらうか。——それは、兎に角、先生の、女に對する厭生が、……或は、異性に對する情熱の激しさを持つが故に、いよいよ呪はれた樣な狀態なのではなかつたかとは憶測されるのであつた。

『×月×日

二階は南向で、光を遮るべき樹木もない町中のことだから、日が射し過ぎる、餘儀なく廂のところへ簾

* パンフレット 45—134

先生は、戸外から歸つて來ると、家の內部を見廻した。……『入口の庭の隅には、かばかりの木が植へてある。中でも、八手だけは勢が好い。明るい新綠は雨に濡れて透き徹るやうに光る。青々とした葉が障子の玻璃に映つて、何となく部屋の內を靜かにして見せた。その靜かさは、あだかも蛇が住む穴の內のやうな靜かさであつた。』*――この家根の下にこの男女は最早離れることも奈何することも出來ないものになつてゐた。先生は、丁度、杯の酒を餘つた瀝まで飮盡せるやうな心地で奥さんを――奥さんの身體をも見る樣になつた。女は男の奴隷で、男は女の奴隷であつた。

――それはまた、あの山の上の新らしい生活の中にまでも這入つてゐて、また、この街の中の生活にまでも持運んで來た樣な先生の妻に對する惱みであつた。……奥さんは、不用意にもこの若くして頑な先生の前に、人の世ににがいものの「嫉妬」を思はせる樣なものを持つて婚嫁して來たのであつた。悲劇はむしろ先生の性格にあつた。禀質にあつた。また或は當時の思想にあつた。とにかく、深い苦惱であつた。言ふならば、先生も、やはり女運が無かつたのである。深く考へすぎては、愛された人に背を見せ、かたくなりすぎては、愛人と切ない別離

* 全集 6—596

先生が、後になつて、「昔話」だと書かれてゐる樣な、その當時が其處にあつた。……そして、先生達は、その水邊の家に、更に三男蓊助さんを生んでゐた。そして、先生の文壇的位置といふ樣なものもそこには自ら定つてゐた。友人の柳田氏等の言つた「すこしは得意になつてもよいのにと、思ふ樣な幽鬱の日」がそこにあつた。

先生は、その日までに書いて來た短篇、芽生、弟子、並木、黃昏、河岸の家等十六編を集めた「藤村集」を博文館より、感想集「新片町より」を佐久良書房より上梓した。先生はまた、そこには、相場をやつてゐる甥に誘はれたり、誘つたりして、上方唄などを唄つてきかせる女を見に水邊の料亭の方に行つたり、またうまい喰物を食はしてくれる橋詰の家に行つたりするのであつた。そして、「相場師の神經質と嫉妬心と來たら、恐らく藝術家以上でせう」といふ甥の言葉に微笑したり、「河の香からして變つて來た。むかしの隅田川では無いネ」といふ樣に言つて見せ、また「何だか、僕は……女を見ると苦しく成つて來る」と言つて見せて、川に深く眺め入つたりしたのであつた。

中で寢た。

復たザアと降つて來た。』A

――この「春」の結末を終りつゝ、先生もまた、深い溜息を吐く人であつたらう。どうかして生きたい！……仙臺行とたゞ時處を異にしたばかりの樣な艱苦や不安がやはりこの水邊の家にも來てゐたのでもあつたらう。――

十月、綠蔭叢書第二篇として、この「春」は春陽堂から上梓された。

『私の「春」が東京朝日紙上に連載された後で、一冊の單行本として世に出た頃のことであつた。あの作が家のものゝ女學校時代の友達の噂さにも上つたかして、さういふ舊い馴染の家庭を見に行つて歸つて來る度に、いろ〳〵友達から冷かされたことだの「お冬さんも隨分人が好い、あの本の中にあるやうなことを書かれて、默つてゐる細君があるものか」と言はれたことだの、それを家のものが私に話して見せた。でも、さういふ人は私の書いたものが舊い友達の噂さに上るといふだけにも滿足して、にはかに自分の夫を見直すやうな顏付であつたには、私も心苦しかつた。しかし、それももう昔話だ。』B

A 全集 4―541　　B 消息（文章往來1―4）

陽は、部屋の黄ばんだ壁にもあたつた。それを眺めて居ると、仕事、仕事と言つて、先生がアクセクして居ることは、唯身内の者の爲に苦勞して居るに過ぎないかとも思はれて來るのであつた。

しかも「春」はこの事情の下にも、漸く、朝日新聞の紙上に回を重ねてゐた。苦勞だつた。本當の意味で詩から散文に移らうとして、——あの「破戒」にまだ殘つてゐた調子の高さを壓へやうとして、また、リアリズムとロマンテイシズムとのよき合致を思ふ處に疲れるのであつた。それも、新聞紙上への日々の執筆であつた。時には額からねと〳〵とした冷汗がにじんで來た。二男鷄二さんがその中に生れた。……そして、遂に先生三十七歲の夏に近く、傑作「春」は成つたのであつた。

『「あゝ、自分のやうなものでも、どうかして生きたい。」

斯う思つて、深い〳〵溜息を吐いた。玻璃窓の外には、灰色の空、濡れて光る草木、水煙、それからシヨンボリと農家の軒下に立つ鷄の群なぞが映つたり消えたりした。人々は雨中の旅に倦んで、多く汽車の

んてことも、極端まで行くんでせう……何處か斯う正太さんは彼の宗七に似たやうな人です。正太さんを見る度に、私はよく左樣思ひ〳〵します。——」

「彼の阿爺が宗七だ——彼は宗七第二世だ。」兄弟は笑ひ出した。』＊

正太とか太一とか書かれて先生の創作の中に出て來る甥、——木曾の姉の子の事でも先生はよく兄姉等とその心配を頒たなければならなかつた。しかし、意見！　そんなことを頼まれながらも、先生はそこにやつぱり後めでたい心をした。そして「溺死するな。」たゞそんな心を通はせた水天宮の護符を、その愛する甥のもとに郵便にしてやる樣な先生の一日もあつたのであつた。

また、性病からの廢疾で、漸く肉身の情に生きてゐる樣な血族もそこにはあつた。先生はある日にはこの人のためにも金を求めて歩き、またある日には、所謂事業といふ樣な事に、空しくなつて行く金を、他の兄の爲に工面して歩くのであつた。

仕事は、ともすれば手につかなかつた。先生はその中で溜息をした。午後をさし込んで來る

＊ 全集 6—454

當に先生の半生の苦勞が、その憂鬱が、或はその過失までが、この「家」の血につながる宿命なのではなかつたらうか。……そして先生の父もさうであつた。兄姉も、その甥姪も、或は、實にさうであつたのではなかつたらうか。

「女の方の病氣さへなければ、橋本父子に言ふことは無い。——それが彼の人達の根本の考へ方です。だから、彼様して女とのことばかり苦にしてゐる。まだ他に心配して可いことが有りやしませんか。達雄さんが女に弱くて、それで家を捨てるやうになつた。——左様一圖に彼の人達は思ひ込んで了ふから困る。」

兄は、弟が來て、一體誰に意見を始めたのか、といふ眼付をした。

「しかし、」と三吉はすこし萎れて、「正太さんも仕事をするといふ質の人では無いかも知れませんナ。」

「彼が相場で儲けたら、俺は御目に懸りたいよ。」

「ホラ、去年の夏、近松の研究が有りましたあネ。丁度盆の芝居でしたサ。あの時は、正太さんも行き、俊も延も行きました。博多小女郎浪枕。私はあの芝居を見物して歸つて來て、復た淨瑠璃本を開けて見ました。宗七といふ男が出て來ます。優美慇懃な彼の時代の浪華趣味を解するやうな人なんです。それでゐて、猛烈な感情家です。長崎までも行つて商賣をしやうといふ冒險な氣風を帶びた男でサ。物に溺れるな

あの悲痛な郊外の生活にも、ともすれば這入つて行つたものであつたが、さあ、斯様近くなつて見ると、それは更にそこに憂鬱な日を持つて來るものであつた。

それはかなしい集團――「家」といふものゝ憂鬱であつた。維新といふ様な改革や、開化といふ様な改造は、舊家といふ様なものゝ心を破つた。そして遂に、その立つてゐる處の地盤をゆるぎ崩した。

「これではならぬ。」

「こうしてはゐられぬ」

しかも、かなしいものは、その「家」に血續く血液であつた。禀質であつた。新都へ、新都へと、その新らしい活動の中に熱情は寄せながらも、この氣質は、たゞに彼等を疲らし惱ます丈のものであつた。彼等は、夢想と激情と更に厄介な、祖先の幽靈を背負つては遂にあえぎ倒れるばかりであつた。そこには從つて暗い「家」があつた。――しかも、先生の「家」の場合に於ては所謂、木曾谷の男女の濃情の重荷をそれに追加しないわけにはいかなかつた。

先生は、いつか「親讓りの憂鬱」といふ言葉をつかつて見せられたことがある。さうだ、本

にあつた。田舍から來た下婢が「この邊では、荒物屋の内儀さんまで三味線を引いて居ます」と言つて眼を圓くする樣な風俗がそこにあつた。

——先生は、そこの二階に、……山の上から運んで來て、西大久保の方でも、その上であの苦勞な制作を終つたその机を置いて、また、新らしい長い仕事のために坐りはじめた。

『私が今居る淺草の町は、丁度小諸で言へば馬場裏に似て居る。一方には絃歌の聲を聽くやうな場所で、一方には古い江戶風の町に續いて居る。英一蝶の子孫、是眞の遺族、それから音曲の家元だとか師匠だとかいふやうな人達が近所に住んで居る。斯ういふ町中で、私は小諸に居た時と同じやうな田舍生活を送りつゝある。都は今、莢豌豆を賣りに來る時節だ。信濃にある友の家からはウマい味噌を貰つた。私の家では、今夜も莢豌豆の味噌汁だ。』*

簡素を愛する——そこには、先生の家らしい生活が、この水邊の街の中にも始まつたのであつた。しかし、殆どこの先生の家を中心とした樣にして川の周圍に集つた親類緣者は、一つにはたのしくも面白くも眺められる樣なものゝ、また、問題の多い生活の波を打よせて來るものであつた。二十といふ樣な頃から先生を暗くした樣なさうした艱苦は、乏しい生活の小諸にも

* 全集 5—368（新片町より）

ら大川端へかけては、私が少年時代より青年時代への種々な記憶のあるところで、日本橋濱町の不動新道には恩人吉村氏の故家もあつた。

こんな緣故も深かつた上に、手狹ではあつたが住心地の好い二階が私の心を新たにさせた。私はあの水邊に近い町中の空の見える新居に移つて來たばかりの時のめづらしい心でもつて、新片町の往來に面した二階の障子も何となく氣分を改めさせるところで、この「春」を書いた――もと〳〵私が西大久保の郊外を去らうと思ひ立つたのも、一年の間に三人まで女の兒を失つたその屋根の下には長く暮しかねたので。』（全集第四卷の後に） *

九月であつた。

「斯樣いふところで、田舍風の生活をして見るのも面白いぢやないか。」

先生は、その新らしく越して來た街の中の家で、奥さんに言つて見せた。

靜かな郊外に住慣れた耳には、俄に、種々な物音がひゞいて來た。家の前を通る女の人の髮の形も變つた。紅――靑――黃と一口に言つて仕舞へない樣なさま〴〵な都會の火の色がそこ

* 全集 4—543

妻冬子（後例最右端）

河

淺草區新片町時代（三十五歳——四十二歳）

「明治二十九年の秋、私は西大久保から淺草新片町の方に住居を移した。「破戒」を書き終る頃から、私の心には「春」の作意が芽ぐんで來てゐた。そこで新居に移つてから第二の長篇に取りかゝつた。「春」は最初、單行本として公にするつもりであつたが、後には東京朝日新聞のために毎日筆を執つてこの小說を書き終つた。

淺草新片町の住居は隅田川に近く、家の前を右に取れば淺草橋の畔へ出られ、左に取れば柳橋の畔に出られて、横町一つ隔てゝ神田川の水に添ふやうな位置にあつた。あの舊兩國附近か

西大久保には私は一年になるほどしか住まなかつた。しかし短い月日の割合に、そこには種々な樂しい記憶をも殘した。戸川秋骨君が山口の方から家を擧げて移つて來たのも、昔馴染の二人のものが互に近く住むやうになつたのも、あの頃であつた。戰地から歸つて來た田山君、隼町の方に住んでゐた蒲原君、毎月一回はきまつて加賀町の家に友達を會した話好きな柳田君、私はあの西大久保の方でもう一度舊い交遊を溫める樂しい時を持つことも出來た。若い有島生馬君が私の家に記念のスケッチを留めて置いて、遠く以太利の空へと旅立たれたのも、あの西大久保の時代であつた。』*

最初の長篇、先生の散文に於ける處女作と言つてもいゝ、「破戒」の上梓を成したのもこの西大久保に於ける大きい記憶でなからねばならない。先生は、これを函館にある秦慶治氏と、信濃にある神津猛君にさゝげた。それにしても、上田屋からこれが出版されて、配本の運びになつた日には、先生はその箱車の後を押すまでの悅びをし、その若い店員をねぎらう爲に、天井か親子丼かをおごつたといふ樣な涙ぐましい純情をもそこに見せたのであつた。

＊ 全集 3—406

「山から持つて來た私の仕事が意外な反響を世間に傳へる頃、私の家では最も慘憺たる日を送つた。ある朝、私は新聞を懷にして、界隈へ散歩に出掛けた。丁度日曜附錄のつく日で、ぶら〳〵それを讀みながら歩いて行くと、中に麹町の方にゐる、友達の寄稿したものがあつた。メレヂコウスキイのトルストイ論の中から、あの露西亞人の面白い話が引いてあつた。それは芽生を摘んだら、親木が餘計成長するだらうと思つて、芽生を摘み〳〵するうちに、親木が枯れて來たといふ話で、ひどく私は身につまされた。どし〳〵新らしい家屋の建つて行く郊外の光景は私の眼前に展けて居た。私は何のために、山から妻子を連れて、この新開地へ引移つて來たか、と思つて見た。つく〴〵私は努力の爲すなく、事業の空しきを感じた。眺め入りながら、((芽生は枯れた、親木も一緒に枯れかゝつて來た‥‥))斯樣私は思ふやうに成つた。」*

明治三十九年の春から初夏へかけての間に、私は西大久保の郊外の家で二つの短篇を作つた。「家畜」は私が初めて「中央公論」のために書いた短篇であつたが、あの時私と一緒にある友人の手紙を寄稿した國木田獨步君も、「二百十日」といふものを出した夏目漱石氏も、今はもう故人となつてしまつた。丁度、上田敏君や、馬場孤蝶君なぞが新雜誌「藝苑」を計畫した頃で私も以前の「文學界」時代からの親しみから「朝飯」一篇を君等の新しい雜誌に寄せた。

* 芽生より（全集 5—243）

私も行く氣が無いではなかつた。幾度か長光寺の傍まで行きかけては見るが、何時でも止して戻つて來た。何となく眩暈がして、そこへ倒れさうな氣がしてならなかつた。』＊

先生は、その中に、氣でも狂ふのではないかと思ふ樣な物惱ましさに襲はれるのだつた。なつかしい、山の方へ逃げ歸る心で、碓氷川の水聲をきくことの出來る磯部溫泉の方へ小さな旅を思ひ立つたのもその當時であつた。

尙、先生は、その當時の心持を、全集第三卷の卷末にしるしてゐる。——

『私が七年の小諸を辭し、半ば書きかけた「破戒」の稿を抱いて東京へ出た頃は、まだ戰爭は續いて居た。つく〴〵私は戰爭の悲酸を思ひ知つた。私はまた當時の著作者が奈何に戰爭のために困難したかを目擊した。

「破戒」「家畜」「朝飯」（全集第三卷）

——これらの著作に從事した間は實に私に取つて多事な月日であつた。私の小さな生命は、全く經驗のない新生涯に移らうとする不安のために動搖しつゞけた。私が信州の山の上から引連れて行つた三人の女の兒を失つたのも、あの西大久保の郊外に移つてからであつた。

＊ 全集 5—242

の今日まで、彼女は彼女の生き得るかぎりを生きたものであるといふことであつた。

少女はもう、氣の狂つた少女の樣に惱亂してゐた。先生は、そのベットの傍に、夜の上野の鐘をきいた。

『「我もまた、何時までかあるべき……」

斯う私は繰返して見た。

分ち與へた髮、瞳、口唇——さういふものは最早二度と見ることが出來ないかと思はれた。無際無限の斯の宇宙の間に、私は唯茫然自失する人であつた。』＊

そして、入院して二週間、終にこの子の頰は、永遠に蒼ざめてしまつた。やがて、人々はこの悲痛の家に集つて來た。しかも、そこには、やはり絶大な意力を以てこの悲歎をも抑へようとしてゐる先生がゐた。しかし、先生の樣な人の悲しみは、それだから、一層に切ない。柳田國男氏などは、それを、「殆ど畏ろしい程の修養であつた。」——と、氣の毒なことに言つてゐる。

『「父さんは薄情だ——子供の墓へお參りもしないで。」

よく家のものはそれを言つた。

＊ 全集 5—233

と私は言つて見た。』＊

初夏が來た。木犀の若葉もがゞやいた。……しかも、いまは、あの淺間の麓から連れて來た女の子の最後の一人――長女、綠の身體にも何となく異狀が起つて來た。不思議な熱のさし引があつた。

先生は、怖れて、大學病院の小兒科に入院させた。その三日目の夜深であつた。

「父さん、私はもうダメよ。」

――熱の譫言とも聞えなかつた。また七歲の子の言葉とも思はれなかつた。先生は、その晚は碌に眠らなかつた。

病狀は、重るばかりの樣であつた。日夜を分たぬ看病と心勞と、病兒のあげる烈しい苦痛の聲とは先生を責め嘖んだ。そこには、子の親として搔きくどきたい程の悲歎をも感ずる人であつた。そしてその悲慘に悶き苦しんで、そこに夫婦がひそかに接吻を交すほどの悲しみをする人であつた。

遂に、この最後の娘にも死が來るのであつた。醫師はそれを言つた。腦膜炎――それは七歲

＊ 全集 5―218

つたと言つて自分のことの様に悦んでくれる信州の友人の手紙も來てゐた。

しかも、この木犀の家には、第三の打擊が打よせて來てゐた。

——次女孝子の死であつた。

病名は消化不良といふことであつた。この急激な身體の變化は多分夏密柑の中毒であらうと言はれた。大學病院へ行つて、二時間しかこの子供は生きて居なかつた。

『お菊が生前の遊び友達は、小さな下駄の音をさせて、朝に晩に家の前を通つた。家内は窓の格子にとりついて、さういふ子供の姿を眺める度に、お菊のことを思ひ出してゐた。

「菊ちやんが死んぢやつたんでは、眞實にツマラない。」

斯様家内は口癖のやうに嘆息した。

私も、散々仕事で疲れた揚句で、急にお菊が居なくなつた家の内に坐つて見た時は、暴風にでも浚はれて持つて行かれたやうな氣がした。山を下りてから、私には安い思をしたといふ日は少なかつた。私の生命は根からゆすぶられ通しだ。

「ナニ、まだお房が居る。」

その日の中に、第二の打撃が來た。

それは、奥さんの眼に、俗にいふ「鳥目(とりめ)」がやつて來たのであつた。滋養物を取らなければいけない。働きすぎてはいけない、眼科醫はそれを彼女に言つた。

「一つは粗食した結果だ。」

斯の考へが私の胸に浮んだ。私は信州にある友達の厚意を思つて成るべく斯の仕事をする間は、質素に、質素に、と心掛けたが、それを通り越して苛酷であつた、とは其時まで自分でも氣が着かなかつた。』＊

――その先生の一家の艱苦を見せた様な眼病も、二月あまりを惱んで癒へて行つた。そして翌年の三月には、四番目の子供も産れてゐた。はじめての男で、楠雄と名づけられた。そして、またそこには、長い間――殆ど二年もその艱難の中を續けて來た仕事を完成したのであつた。長篇小説「破戒」――綠蔭叢書第一編として出版されたものがそれであつた。

ほんとに、漸く、この稿をそこに終つては、その歡ばしさと、激しい疲勞とに、先生は自分の室の内をごろ〳〵轉げ廻りたいやうな心をしたといふ。そこには、一緒に心配した甲斐があ

＊ 全集 5―206

然し、口說いてなぞ居る場合でなかつた。診斷書、屆出、墓地——先生はその殆どすべてを自分で始末した。棺も、小諸から本を入れて來た茶箱を削つて貰つた。そして、兒の巾着や、帽子や、五月の花を入れたその棺を、日が暮れてから、植木屋の主人と二人で、鐵道の線路に近い、長光寺といふ寺の墓地へ提げて行つた。

「お繼が死んで吳れて、大に有難かつた。」

——その後には、串戲半分に、斯樣なことを言つて見る先生があつた。何を犧牲にしても！行けるところまで行つて見ようとする先生の心がそこにあつた。

庭の隅には枝の細長い木犀の樹があつた。まばらな影が、僅にそこに落ちてゐた。……奥さんは、その樹の蔭に來て、熱い土のいきれの中で張物をしたり、洗濯をした。そして苦しさうな息づかひをした。高く前掛を〆めては居たが、最早醜く成りかけた身體の形はそこには隱されずにあつた。＊

先生は、また、さびしい花の百日紅に眼をやつたりしながら、机に坐りつゞけてゐた。

＊ 全集 5—203 參照

靴の音が起つた。カアキイ色の軍隊は窓の側を通つた。金目垣一つ隔てた外は直ぐ往來で、暗い土塵が家の內までも入つて來た。

二十五圓。

親子五人の、月々のくらしに、たゞこれ丈の心當がある丈であつた。それも、仕事の出來上るまで、……その爲に、友人の一人が用意して與れるその金であつた。いまは、早くその落つかない家の中にも、机に坐りはじめた先生であつた。

しかも、上京して一週間、その八日には、末の女の子縫子の死を迎へなくてはならなかつた。まだ「うま、うま」位しか言へない彼女は、その混雜の中にその苦痛をそれと訴へる術をしらなかつたのであつた。どうかすると、その小さな胸を突出すやうにして見せたのも、この心身の苦しい親等に、その意味を傳へることが出來なかつた。――異常な狀態に驚いた先生が、いゝ小兒科醫を賴んで來た頃には、その子は最早床の上に冷たくなつて居た。

「あゝ、……」

ら持つて來た苦勞な仕事、また不安な仕事を完成することにのみ心をあつめてゐた。

――蒲原有明氏の思出によると、その家の有樣は斯樣である。

「……家は極く普通の四室ぐらゐのさゝやかさであつたが、書齋と言はるべき一室が主人公の意匠の加つたもので、まづ類のないものであつた。素より月並な文化的裝飾のあらうはずもなく、たゞオリーブ色に染めさせた木綿の壁かけやうのものが自慢であつたものゝ、大體部屋を地床におとしてあつたのがめづらしいのである。それで他室からは一尺以上も下つてゐたのでそこに座つてゐると穴倉めいて、書齋といふよりも仕事場といふかたちであつた。」

これは、四月、この家の豫約と同時に注文をつけられたものだつたらう。……さま〴〵な思ひをして、やつと上京して來たこの東京の家は、それにしてもあまりに狹かつた。天候も惡く壁もまだ乾かないといふ樣な、建具もばら〳〵な家の中に立つて見て、先生は奥さんに笑つて見せた。

「家賃を考へて御覧な。」

ザツク、ザツク、ザツク、サツク、……

木犀

東京市外西大久保四〇五（三十四歲――三十五歲）

五月一日、先生の一家は上京した。

東京が、郊外の方へ開けはじめる頃であつた。

市外西大久保四〇五――それは鬼王神社に近い、植木屋の地內、往來に沿うて新築された小さい平屋建の家であつた。

仕事場――先生の心は、この家に對してもそれ丈であつた。先生は此處にもたゞ、山の上か

長女綠大學病院にて死す

の様な心で、子供を相手にして遊んだ。

明治三十八年五月一日。——さうして、先生の一家は上京した。仕事の出來上るまでは、質素にして暮さなければならないと言ふので、子供に馴れた下女にも暇を出して、五つ、三つ、二つといふ三人の女の子をつれて。……

到頭、三吉は言はず仕舞ひに牧野の家の門を出た。そして、制へがたい落膽と戰ひつゝ、元來た雪道を歸つて行つた。一時間あまり乘合馬車の立場で待つたが、そこには車夫が多勢集つて話したり笑つたりして居た。思はず三吉も喪心した人のやうに笑つた。やがて馬車が出た。沈んだ日光は寒い車の上から彼の眼に映つた。林の間は黃に輝いた。彼は眺め、且つ震へた。』*

先生は、その晚、——遂に長い手紙をその友達にあてゝ書いた。……希望は、遂げられた。

四月の始になつて、先生は家を探しに上京した。澁谷、新宿——その邊を探しあるいて、遂に大久保の方にゐる三宅克巳氏の畫室を見に行つたことから、一軒、西大久保の植木屋の地內に新築中の平屋があるのを見當てた。まだ壁の下塗もしてない位で、少し狹いとは思はれたが、いかにも周圍がよかつたので、出來上るのを待つといふ約束で借りることにした。

漸く春が來た。家根の雪が雨垂れとなるといふ樣な日で、家のものは先生の歸りを待ちかねてゐた。——東京の話は家のものゝ心を勵ました。先生は、その家の中でほんとうに久しぶり

＊ 全集 6—299

心を苦しめた結果、志賀村に居る友達——神津猛氏に相談して見るより外に道の無くなつたのを知つた。……その眼前には行く人も稀れな暗い雪の道があつた。先生は、それを先生自身の心の内部の光景とも思つて見た。

『雪はまだ深く地にあつた。馬車が淺間の麓を廻るにつれて、乘客は互に膝を突合せて震へた。一里ばかり乘つた。馬車を下りて、それから猶山深く入る前に、三吉はある休茶屋の爐邊で凍えた身體を温めずには居られなかつた。一里半ばかりの間、往來する人も稀だつた。谷々の汎濫した跡は眞白に覆はれて居た訪ねて行つた友達は牧野と言つて、邊鄙な山村に住んで居た。ふとしたことから三吉は斯の若い大地主と深く知るやうに成つたのである。そこへ訪ねて行く度に斯の友達の靜かな書齋や、樹木の多い庭園や、好く整理された耕地など——それを見るのを三吉は樂しみにして居たが、其日に限つて心も落着かなかつた。主人を始め細君や子供まで集つて、廣い古風な奥座敷で話した。斯の温い家庭の空氣の中で、唯三吉は前途のことを思ひ煩つた。事情を打明けて、話して見やうと思ひながら、翌日に成つてもついそれを言出す場合が見當らなかつた。

ある。私はあの戰爭の續いた年の冬に、馬場裏の草屋根の下で「破戒」の稿を續けた當時のことを忘れかねる。

戸の外へも早や深い雪が來た。桑畠も、水車小屋の屋根も白く埋れた。そこいらは一面に覆ひかぶさつたやうになつた。斯の降り積つた雪の中で、今夜は戰勝の祝ひがある。酸漿提灯をつけて小學校の廣庭に集まらうとする町の人達が家の横を通る。私は南向きの雨戸を開けて見た。暗い雪につゝまれた相生町の通りの方には紅い灯がいくつも〳〵動いて見えた。雪に籠つた「萬歲――萬歲」の叫び聲を私は自分の部屋の方に坐りながら聞いた。(突貫)A

私が最初の長篇の試みともいふべき作の前半はこんな空氣の中で生れた。B

漸く長い冬を漕き拔けることが出來た。……先生はしばらく床場へも行かないと思つてゐるうちに、頭の髮は鷲のやうに成つてゐたといふ。しかも、まだこの長い仕事は漸くその前半を終つたばかりであつた。一方に學校を持つてゐることは、やはりそこに精一杯を出しきれなかつた。しかし、この仕事を持つて東京へ出たとした處が、これから先の妻子との生活をどうしよう。……貧しい藝術家の机の傍には、早くそんな心配と焦慮とが迫つて來てゐた。

A 全集 8—76 參照　B 全集 3—493

最初の長篇の稿を起した。田山花袋君が從軍記者として出掛けたのも、その頃であつた。私はある友人が戰地の方へ出發する前によこして呉れた別れの手紙を讀んで、自分もまた從軍したいといふ心を動かさないではなかつた。そこでもこゝでも絶えない戰爭の噂、毎日のやうに馳けて通る號外賣の呼聲、そんなものが、小諸馬場裏の草屋根の下に居ても私の心を靜かにして置かないばかりではなかつた。昨日は自分の教へた舊い生徒の一人が入營前の別れを家の門口へ告げて來る、今日は同僚のよしみのある體操教師まで召集に應じて出發するといふ度に、私は小諸の停車場まで見送りに出掛けて、悲しい壯んな生命掛けの叫び聲を聞いて歸つて來た。私はあの戰爭を外に見て、全く自分の創作に耽るほどの靜かな氣分には成れなかつた。こんなに自分の心が戰爭の空氣のために刺激され易くて困るくらゐなら、いつそ自分もまた友人のあとを追つて戰地の方に身を置きたいとも願つたのである。しかしそれは果さなかつた。「人生は大きな戰場だ。自分もまたその從軍記者だ」そんなことを言つて自分を慰め勵ましながら、復た机にむかつて見た頃の私は、當時の田山君と同じやうに未だ血氣のさかんな年頃であつた。

戰爭が長びけば長びくほど、私の周圍にあつた町の空氣はシーンとしたものと成つて行つた。私は開戰當時の熱狂と混雜とを見たり聞いたりするにも勝つて、一層胸を打たれることが多かつた。大きい戰爭の影響は私達の日常生活にまで深刻に浸つて來て、それを自分の身にひし〳〵と感ずるやうに成つたからで

「――人種の偏執といふことが無いものなら、キシネフで殺される猶太人もなからうし、西洋で言ひはやす黄禍の說もなからう……』＊

先生は、机に對つて、復た鉛筆の尖端を削つた。（先生はこの長篇を書くのには、本町の紙店で幅廣な方の罫の入つた洋紙を買つて來て、堅い鉛筆でそれに記しつけることにしてゐたいふ）――やがて、雪が來た。先生はまた、油のやうに流れて行く千曲川の下流の水に降り罩めて行く白い雪を眼前に思つては、その眼にあることを紙に寫して行く。……それは丑松を置いてゐる飯山の方の自然だ。

『今だに私の忘れられないで居ることは、二年と續いた長い日露戰爭の中で「破戒」の稿を續けたことであつた。私には、あの大きな戰爭の記憶と、最初の長篇に筆を執つて居た頃のことゝ、それを引離しては考へられないくらゐだ。おそらくあの日露戰爭から受けた印象は一生私から離れまいかと思ふ。

私が信州小諸から東京西大久保の方へ小さな家族と共に引移つたのは、明治三十八年のことであつた。丁度それより一年ばかり前に、私は小諸の馬場裏の住居の方に居て、日露戰爭の始まりかける空氣の中で

＊ 破戒（全集 3－15）

『時々、凄まじい叫び聲が起つた。私はそれを停車場の方で聞くのか、自分の頭腦の內部で聞くのか、解らない樣な氣がした。』＊——とは先生が著作の中に語つてゐられる當時のことでもあらう。……夏休が來た。先生は、その時の不安な海を渡つて函館の方に、自費出版の料を得るために旅を行つた。

『——長らく山の上に引籠つてばかり居た私は、こゝへ來て、廣濶とした海國の人の氣象に觸れた。そればかりでなく、わざ〳〵こゝまでやつて來た旅の目的をも果すことが出來た。「自分で書いたものを出版するといふのも一種の實業だ。要るといふ時に電報一つ打つてよこせ、金は直ぐ送らう」函館の阿爺はいかにも堅い商人らしい調子で私の望みを容れて吳れた。

末廣町には阿爺の懇意な陶器屋がある。そこの旦那に誘はれて養育院を見に行つた。私は貧しい子供を前に置いて、小さなお伽話を一つした。丁度その話を聞かせてゐる最中に、尋常ならぬ屋外の樣子で、敵の艦隊が津輕海峽を通り過ぎたことを知つた。私は三日ばかり早く函館へ著いて好かつた。』＊

先生が、……、この山を下るといふ決心を持つてゐるといふことは、漸く塾の同僚の中に知れて來た。——そこにはもう、黃ばんだ秋の末の日が先生の眼にあつた。

＊ 全集 8—74

『龍華寺では下宿を兼ねてゐた。瀬川丑松が急に轉宿を思ひ立つて、借りることにした部屋といふのは、其庫裏つゞきにある二階の角のところだ。……』＊

——そこには千曲川下流の寂しい街の姿があつた。その背景をもとめて行つた小さい旅の日の思ひ出があつた。ほんとに、先生は、あの蜜蜂が、蜜を、花粉を、蠟を、水をと運び貯へるかの様にして、用意して來た半生の體驗を、記憶を、觀察を、一切の色彩をして、これを塗らうとしたのであつた。

「文學者の生涯に處女作を出す時ほど美しく、樂しく又心配なものはない。」とは、先生の常の言葉であるが、その羞恥と熱意とは、あの激しい雪の中にも、どんなに先生を勵まし起たしめたものであつたらう。それにしても、この仕事はひどく骨が折れたものであるらしい。

殊にその日の中に、ロシアとの大きい戰爭が起つて來た。……戰爭以來、郡から塾への補助は絕へた。町からの支出される金も餘程削られた。先生達は乏しい俸給の中を、尙それぐに受ける分を少なくされなければならないのだつた。生活上の艱難も迫つて來た。

——戰爭は、この寂しい街にもさまぐな騷がしさを持つて來てゐた。

＊ 全集 3—1(破戒)

先生は、また、その日の中に、斯様な思想を抱く様になつてゐた。——

『今日まで私は酷だ都合の好いことを考へて居た。自分の目的は目的として置いて、衣食の道は別にするやうな方針を取つて來た。それが自分の目的に一番適つたことだと信じて來た。

しかし私は斯の考への間違つてゐることを悟つた。私の教員生活も久しいものだ。斯様な風にしてずる〳〵に暮して行く月日には全く果しが無い。私は今日までの中途半端な生活を根から覆して、遠からず新規なものを始めたいと思ふ。私は他人に依つて衣食する腰掛の人間でなくて、自ら額に汗する勞働者でなければ成らない。』*

——その、新らしい仕事、それは長篇小說「破戒」であつたのである。先生は、今はその完成を待つて、この山を下らうとしてゐた。

三十三歲。——その年には次女孝子も生れてゐた。そして、また、奥さんのおなかはその次の芽生のために大きくなつてゐた。……先生は、その屋根の下で、苦勞な長い仕事の「破戒」の稿を起したのであつた。

* 全集 8—62

た。

『小諸の町から岩村田町の方向へ向つて舊い街道を行きますと、蛇堀川といふ川を隔てた處に部落の一つがありました。其處へもよく歩き廻りに行つて、そこで行き逢ふ男や年寄りや子供なぞの間に時を送つてみたばかりでなく、通稱彌衛門といふ部落のお頭の家を訪ねて見る機會がありました。この彌衛門といふ人に逢つたといふことが、自分の「破戒」を書かうといふ氣持を固めさせ、安心してあゝいふものを書かせる氣持を私に與へたのでした。それほど私は深い、好い印象をその人から受けたのです。私は作中の人物にその人を寫さうとはしなかつたが、然し部落民生活に關したことで多少なりとも自分が「破戒」の中に書入れたことは、その彌衛門といふお頭から教へられたことが多いのです。あの山國に住んでゐる部落民が他と異つた家族の組立て方や、信州上田在秋葉村には最も古い歷史のある部落民の家族が住んでゐる事や、そのほか部落民の間に殘つてゐる親鸞に就ての傳說、そんな事を色々と私に話してくれたのもその人でした。

それから私のゐた小諸から見ると烏帽子山麓の方へ寄つた方に住む部落民の方へも尋ねて行つて麻裏を作ることを戸毎に副業としてゐる人達の間へも入つて見たことがありました。』＊

＊春を待ちつゝ―198

風俗壞亂といふので發賣を禁止された。そしてこれは倘、木村氏をモデルにしたものだといふのでデリケートな人の心の瞳を見なければならなかつた。次いで「藁草履」を書いた。これは野邊山が原の自然を背景に、毎日通ふ道にある踏切番の話に暗示を得た樣なものであつたが、先生はこれにも創造と寫實との問題に惱まなければならなかつた。心は暗かつた。

しかし、先生は、その中に在つて、ある暗示に導かれて一つの長い勞作に從はうとして更に用意を始めたのであつた。――先生は、その當時、ダルキンを讀んでゐた。また、その眼前に置かれてゐる田園の生活は、やはり先生に鮮らしい刺戟を與へないでは濟まなかつた。そしてツルゲニエフの「獵人の日記」と共にこれは田園及び都市に於ける社會問題の種々相に對する先生の觸言を尖らせた。

それは、その制作の素因の上にも影響して行つた。――それは、一人の部落民出の教育者の話、……その人の悲慘な運命を傳へ聞いたことが、動機であつた　そして先生はこの小諸生活の間に部落民の生活といふものを出來る丈多く知らうと心がけ、そして、その無智から生れて來る悲劇と、そこに眼醒めたものゝ悲しみとを描くことを制作としたい思想を抱いたのであつ

――數多くのスケッチは成つた。……しかし、新らしく、散文の創作に行かうとしては再び心は疲れた。

『……詩から散文に移らうとして三年ばかり全く默つて暮したあの小諸の馬場裏時代は、隨分わびしいものであつたことを覺えてゐる。私も既に結婚してから三年目の頃で、最初の女の兒も生れてゐたが、家のものなぞはそろそろ單調な田舍生活に飽いて來て、こんなことでいつ芽が出るかといふやうな顏付であつたし、それに私の家では質素な小諸だからあれでやつて行けたと思ふほどの切り詰めた暮しをしてゐたから、さういふ不自由さとも戰はねばならなかつたし、毎年十一月から翌年の三月へかけて五ヶ月もの長さに亘る山の上の寒さとも戰はねばならなかつた。一度降つたら春まで溶けずにある雪の積りに積つた庭に向つた部屋で、寒さのために凍み裂ける恐しげな家の柱の音なぞを聞きながら、夜遲くまで獨りで机にむかつてゐた時の心持は忘れられない。』＊

三十四年、先生三十一歲――先生は小說としての試作「舊主人」を雜誌新小說に寄せたが、

＊ 消息（文章往來 1―4）

不思議な生物の世界は、活氣づいた感覺を通して、時々私達の心へ傳はつて來る。

近頃Sの家では牛乳屋を始めた。可成大きな百姓で父も兄も土地では人望がある。斯ういふ田舍へ來ると七人や八人の家族を見ることはめづらしくない。十人、十五人の大きな家族さへある。Sの家では年寄から子供まで、田舍風に慇懃な家族の人達が私の心を惹いた。君は農家を訪れたことがあるか。入口の庭が廣く取つてあつて、臺所の側から直ぐ裏口へ通り拔けられる。家の建物の前に、幾何かの土間のあることも、農家の特色だ。斯の家の土間は葡萄棚などに續いて、その横に牛小屋が作つてある。三頭ばかりの乳牛が飼はれて居る。Sの兄は大きなバケツを提げて、牛小屋の方から出て來た。戸口のところには、Sが母と二人で腰を曲めて、新鮮な牛乳を罐詰にする支度をした。暫時、私は立つて眺めて居た。

やがて私は牛小屋の前で、Sの兄から種々な話を聞いた。牛の性質によつて溫順しく乳を搾らせるのもあれば、それを惜しむのもある。アバレルやつ、沈着いたやう、いろ〳〵ある。牛は又、非常に鋭敏な耳を持つもので、足音で主人を判別する。斯樣な話が出た後で私は斯ういふ乳牛を休養させる爲に西の入牧場なぞが設けてあることを聞いた。

晩の乳を配達する用意が出來た。Sの兄は小諸を指して出掛けた。

——「千曲川スケッチ」より *——

* 全集 2—185

青年だ。學校の日課が濟むと、彼等は各自の家路を指して、松林の間を通り鐵道の線路に添ひ、あるひは千曲川の岸に隨いて、蛙の聲などを聞きながら歸つて行く。山浦、大久保は對岸にある村々だ。牛蒡、人蔘などの好い野菜を出す土地だ。滋野は北佐久の領分でなく、小諸の傾斜にある農村で、その附近の村々から通つて來る學生も多い。

こゝでは男女が烈しく勞働する。君のやうに都會で學んで居る人は、養蠶休みなどといふことを知るまい。外國の田舍にも、小麥の產地などでは、學校の收穫休みといふものがあるとか、何かの本でそんなことを讀んだことがあつた。私達の養蠶休みは、それに似たやうなものだらう。多忙しい時季が來ると、學生でも家の手傳ひをしなければ成らない。彼等は又、少年の時から左樣いふ勞働の手助けによく慣らされてゐる。Sといふ學生は小原村から通つて來る。ある日、私はSの家を訪ねることを約束した。私は小原のやうな村が好きだ。そこには生々とした樹影が多いから、それに、小諸からその村へ通ふ畠の間の平かな道も好きだ。

私は盛んな青麥の香を嗅ぎながら出掛けて行つた。右にも左にも麥畠がある。風が來ると、綠の波のやうに動搖する。その間には、麥の穗の白く光るのが見える。斯ういふ田舍道を步いて行きながら、深い谷底の方で起る蛙の聲を聞くと、妙に私は壓しつけられるやうな心地に成る。可怖しい繁殖の聲。知らない

學生の家

吉村樹君

私は今、小諸に近いところの學校で、君と同年位な學生を教へてゐる。君は斯ふいふ山の上への春が奈何に待たれて、そして奈何に短かいものであると思ふ。四月の二十日頃に成らなければ、花が咲かない。梅も櫻も李も殆ど同時に開く。城址の懷古園には二十五日に祭があるが、その頃が花の盛りだ。すると、毎年きまりのやうに風雨がやつて來て、一時にすべての花を浚つて行つて了ふ。私達の教室は八重櫻の樹で圍繞されて居て、三週間ばかり前には、丁度花束のやうに密集したやつが教室の窓に近く咲き亂れた。休みの時間に出て見ると、濃い花の影が私達の顏にまで映つた。學生等はその下を遊び廻つて戲れた。殊に小學校から來たとの若い生徒と來たら、あつちの樹に隱れたり、こつちの枝につかまつたり、まるで小鳥のやうに。どうだらう、それが最早すつかり初夏の光景に變つて了つた。一週間前、私は晝の辨當を食つた後、四五人の學生と一緒に懷古園*へ行つて見た。荒廢した、高い石垣の間は、新綠で埋れて居た。

私の教へて居る生徒は小諸町の青年ばかりでは無い。平原、小原、山浦、大久保、西原、滋野、其他小諸附近に散在する村落から、一里も二里もあるところを歩いて通つて來る。斯ういふ小學生は多く農家の

* 小諸城趾今は公園茲に藤村詩碑あり

岸の波なにをか答ふ
過し世を靜かに思へ
百年もきのふのごとし

千曲川柳霞みて
春淺く水流れたり
たゞひとり岩をめぐりて
この岸に愁を繫ぐ

――この前者は、大正十五年、この小諸なる古い城趾の石垣の間に高村豐周、有島生馬二氏の意匠によつて置かれた「詩碑」に先生の書きつけた詩である。……先生の詩はこゝまで來た。そして、先生は、こゝに更に、デリカな物の動き、心の動きを適確に展べたい要求によつて、漸く散文に移らうと用意した。即ち、先生は暇さへあれば、野に行き、山に行つた。――千曲川沿岸の地方がそこにあつた。

濁酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

□

昨日またかくてありけり
今日もまたかくてありなむ
この命なにをあくせく
明日をのみ思ひわづらふ

いくたびか榮枯の夢の
消え殘る谷に下りて
河波のいざよふ見れば
砂まじり水卷き歸る
嗚呼古城なとをか語り

綠なす蘩蔞は萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に滿つる香も知らず
淺くのみ春は霞みて
麥の色はづかに靑し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ
暮れ行けば淺間も見えず
歌哀し佐久の草笛
岸近き家にのぼりつ

『九月十一日の朝、東の空に浮べる細雲を望めば、赤きはさながら長き帶を引くがごとく、さし登る秋の日の光に照されて雲緣は紅隈かと見えたれど、やはらかにして美しきこと言はん方なかりき。この朝、雲色の變化するさまを上のごとく認めた。』*

先生の――この自然に向ふ心は、餓へたるものゝ食に着く思ひにも勝るものがあつたらう。仙臺にきゝつけた耳はこゝに澄み、そこに見初めた瞳は、今は漸く徹する迄を見んとしてまたそこには先づ、日本に於ける、二十世紀初頭の新らしいロマンチック時代を代表したる詩集「落梅集」の詩篇を創作し、漸く、習作「千曲川のスケッチ」によつてリアリスティックの道に進もうと成つて來たのであつた。それは現實の問題であつた。體驗の問題であつた。……

しかし、私共は、その前に、渾然として澄み織つた、先生のその「詩」を見なければならない。

千曲川旅情の歌

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ

先生の小諸義塾に於ける授業の受持は、一週二十八時間に亘ることも多かつたが、その以外は馬場裏の方にゐて、詩作に從ひ、また畑を耕し、またラスキンの苦心に勵まされて「雲」の研究を思ひ立たれたのもこの當時であつた。

『小諸は千曲川に添へる北佐久郡にありて、雲を見るに五つの利あり。春より秋へかけて雨すくなきこと一つ、海面を拔く三十尺、殆ど筑波の嶺と同じ高さなること一つなり、東北の間は淺間一帶の山腹に倚ること一つ、空氣は清澄なること一つ、高原の上にて天の廣濶なること一つなり』* とは「雲」に關する先生の手記にしるされてあるもので、次にあるものもまたその一節である。

	曉	日出前	日出	日出後	同	同
細雲	灰	赤に黄まじりたる	紅	黄	黄に白まじりたる	白

これは眞東に見たる朝雲なれど、南と北とには灰色に紫色のまじりたるもありき

* 全集 2—166

受けた。』*

——これは先生の重要なる著作「千曲川のスケッチ」に於ける自序の言葉である。まことに感化もまた愛なくてはかなはぬことだ。

小諸時代——結婚前は無髯であつた先生も、その頃には濃い口髯を貯へられてゐたといふ。先生に親しく塾の方で教を受けたといふ山浦瑞州氏が何かで、そのことを書いてゐられたのを見た。「顋髯はいつも青々と剃つて、頭髪は油をつかつて漆黒なその太い毛を分け、着物は澁い無地もので、態とらしい短い裾を穿いて、着物の裾を五寸も出してゐるといふのだから丁度坊さんの袈裟のやうだつた」といふこと、「先生の忘つぽい事は有名なもので、例へば鈴が鳴つて教室に出て來るのに教科書を忘れて來て、また悠々と取りに行くといふ樣なことは珍らしくなかつた。さう言へばあの鐵線の近眼鏡を掛けて、書物を裸のまゝ小脇にかゝえてノソノソと學校に通つて來られた姿は、まだ今も、眼の先にある」といふ風なことであつた。

* 全集 2—

い。ふるさと信州西部の山上の影響は、いま、こゝに信州北部の山上の生活に著しい反響を呼ばないでは擱かないのであつた。――こゝもまた石垣を築いて山の傾斜に棲む村落であつた。そしてまた、北國街道の驛路に當る小驛であつた。

『もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか』

これは私が都會の空氣の中から脱け出して、あの山國へ行つた時の心であつた。私は信州の百姓の中へ行つて種々なことを學んだ。田舎教師としての私は、小諸義塾で町の商人や舊士族や、それから百姓の子弟を敎へるのが勤めであつたけれど、一方から言へば私は、學校の小使からも、生徒からも、生徒の父兄からも學んだ。到頭七年の長い年月をあの山の上で送つた。私の心は詩から小説の形式を擇ぶ様になつた。斯の書の主なる土臺となつたものは三四年間ばかり地方に默して居た時の印象である。

しかし、七年間の小諸生活は私に取つて一生忘れることの出來ないものだ。今でも私は千曲川の川上から川下までを生々と眼の前に見ることが出來る。あの淺間の麓の岩石の多い傾斜のところに身を置く様な氣がする。あの土のにほひをかぐ様な氣がする。あそこから深い感化を

「奥さん、御精が出ますネ。」と音吉は笑ひながら聲を掛けて、高瀬の堀起した畠を見た。サクの切り方が淺かつた。音吉は高瀬から鍬を受取つて、もつと深く切つて見せた。
『この邊は、まるで燒石と砂ばかりのやうなものでごわす。上州邊と違つて碌な野菜も出來やせん。』
と音吉が言つた。
彼は持つて來た馬鈴薯の種を植ゑて見せ、猶、葱苗の植ゑ方まで敎へた。
斯の高瀬が僅かばかりの野菜を植ゑ試みようとした畠からは、耕地つゞきに商家の白壁などを望み、一方の淺い谷の方には水車小屋の屋根も見えた。細い流で近所の鳴らす鍋の音が町裹らしく聞えて來るところだ。激しく男女の勞働する火山の裾の地方に、高瀬は自分と妻とを見出した。』*

——先生のこの描出は樂しさうだ。そこには、居るべき處に安んじたやうな、人の姿が想像される。岩石の間! それも樂しい。激しい勞働! それも樂しい。……私共は、その心を、先生に於ける深い鄕土性と、愛鄕の熱情との中にきゝつけるのである。先生は遂に鄕土信州的の風韻に起つ人だと謂はれてゐる。然らばそれは早く、簡素を愛し、素朴にしてよく働いた母親に、また母なる木曾谿にその影響を見つけなくてはなるまい。愛なくては影響される處はな

* 全集 8—177

に、塾を愛するが故に薄給に堪へて働くといふ様な人々であつた。

『斯の半ば家庭のやうな學校から、高瀬は自分の家の方へ歸つて行くと、賴んで置いた鍬が屆いて居た。塾で體操の教師をしてゐる小山が屆けて吳れた。小山の家は町の鍛冶屋だ。チョン髷を結つた阿爺さんが鍛つて吳れたのだ。高瀬はその鐵の目方の可成あるガツシリとした柄のついた鍬を提げて、家の裏に借りて置いた畠の方へ行つた。

不思議な風體の百姓が出來上つた。高瀬は頰冠り、尻端折りで、股引も穿いて居ない。それに素足だ。柵の外を行く人はクス〳〵笑つて通つた。とは言へ高瀬は關はず働き始めた。堀起した土の中からはどうかすると可憐な貝割葉が李の種について出て來る。彼は地から直接に身體へ傳はる言ひ難い快感を覺えた。時には畠の土を取つて、それを自分の脚の弱い皮膚に擦り著けた。

塾の小使も高瀬には先生だつた。音吉は見廻りに來て、鍬の持ち方から敎へた。

每日のやうに高瀬は塾の受持の時間を濟まして置いて、家へ歸ればこの畠へ出た。ある日、音吉が馬鈴薯の一種を籠に入れて持つて來て見ると、漸く高瀬は畠の地ならしを濟ましたところだつた。彼の妻——お島はまだ新婚して間もない髮を手拭で包み、紅い色の腰卷などを見せ、土堀りの手傳ひには似合はない都會風な風俗で、土のついた雜草の根だの石塊などを運んで居た。

はその流れに毎朝の顏を洗ふことを考へた。そこにも生のまゝの刺戟を見つけた。そして、先生は自ら土を堀る爲に、その廣い庭の外に、すこしばかりの畠の地所を附けてこゝを借りることゝしたのであつた。

塾の小使が來て三尺四方ばかりの爐を新規に築き上げて吳れた。――そして、粗末ながら、先生のために一つの新らしい住居が出來た。

……そこで、先生はその月末に、北海道函館の人、秦冬子と結婚した。

塾の空氣は塾長が、米國に二十年も遊學してゐたマスターオブ、アーツで、宗教家で、また渡米前には故田口鼎軒といふ樣な漢學の人に親しかつたといふ下地の人であつたから謂はゞ洋風の寺小屋と云つた樣な處があつたとは、當時を知つてゐる人の話であるが、職員も從つて特異な人を集めてゐたらしく、これも學院に學んだことのある畫家の三宅克己氏とか、酒のために新潟中學を失敗して來たといふ帝大第一回卒業生の理學士とか、小諸藩の漢學者とか、町出身の休職憲兵大尉とかいふ樣な人々であつた。――そして、それはこの經營の困難な塾のため

「島崎さんは三年といふ御教練で、私共の塾へ來て下さいました。」

木村塾長は、こんな風に先生を塾の方へも紹介した。――そこには塾の教師としての先生の生活も同時に始まつたのであつた。

『長く東京で年月を送つて來た高瀬には、塾の周圍だけでも眼に映るものが多かつた。庭にある櫻の花は開いて見ると八重で花束のやうに密集つたやつが教室の窓に近く咲き亂れた。濃い花の影は休みの時間に散歩する教師等の顏にも映り、建物の白い壁にも映つた。學生等は幹に隱れ、枝につかまり、まるで小鳥かなんどのやうに其下に遊び廻つて戲れた。』*

先生はまた、案内されて、これからを住むべき家の方を見に行つた。――そこは塾から五六町距つた本町の裏手に續いた一區域で、馬場裏といふ花柳街の外れにあつた。……落葉松の垣に圍はれた草葺屋根の士族屋敷らしい建物であつた。何でも近くまで汁粉屋が借りて居たとかで、古い穴のあいた襖、煤けた壁、炬燵を切つたあたりは疊も燒け焦げて紙を貼りつけてあるといふ住ふ荒した跡であつた。でも、庭は廣く、またそこには山の方から下りて來る細い流れがあつて、その家の裏の石の間を落ちてゐた。また南の崖下には水車小屋があつた。……先生

＊ 全集 8—176

瀬を誘つた。

先生の周圍は半ば農家のさまだつた。裏庭には田舍風な物置がある。下水の溜がある。野菜畑も造つてある。緣側に近く、大きな鳥籠が伏せてあつて、その邊には鷄が遊んで居る。今度の奥さんには子供衆もあるが、都會育ちの色の白い子供などと違つて、「坊ちやん」と言つても强壯さうに日に燒けてゐた』A

先生は、その部屋で――一間ほど隔てゝ寄宿する生徒等の何かゴト〳〵言はせる室で、それが靜まると今度は鼠がガタ〳〵とさわぎ出す室で、自分のために心配してゐてくれる人達の方へ手紙を書いた。思ふことも多くて、寢についても、よく眠られなかつた。

『朝早く高瀬は屋外に出て山を望んだ。遠い山々にはまだ白雪の殘つたところも有つたが、淺間あたりは最早すつかり溶けて、牙歯のやうな山續きから、陰影の多い谷々、高い崩壞の跡などまど顯れて居た。朝の光を帶びた、淡い煙のやうな雲も山巓のところに浮んで居た。都會から疲れて來た高瀬には、山そのものが先づ活氣と刺激とを與へて呉れた。彼は淸い鋭い山の空氣を饑えた肺の底までも呼吸した。』B

――かくて、先生の「小諸時代」ははじまつたのであつた。先生二十八歳の春である。

A 全集 8－165　B 全集 8－166

そこは火山の傾斜(スロープ)の上に建ち並んだ様な街であつた。四圍には紫色に寒い山々があつた。波音を立てゝ流れ下つてゐる大きい川があつた。……そして、塾は、その傾斜があだかも人工で堀割られたやうに深い谷となつてその川の方に及んでゐる處にある穴城――小諸城趾の脇にあつた。……それを、先生は、少年時代から見馴れた父とも師ともいふべき木村熊二氏の傍に見つけたのであつた。――まづ共立學校の方で語學を受け、更に高輪臺町教會では牧師としてのこの人の手に基督教の洗禮を受け、また明治學院時代にはしばらくの間を寄寓までして來たその人が塾長として働いてゐる學校の窓に……それを見つけたのであつた。

『淺間が燒けてますよ。』

と先生は上州の空の方へ靡いた煙を高瀬に指して見せた。見覺えのある淺間一帶の山脈は、旅で通り過ぎた時とは違つて、一層ハツキリと高瀬の眼に映つて來た。

先生の住居に近づくと、一軒手前にある古い屋敷風の門のところは塾の生徒が出たり入つたりしてゐた。寄宿する青年達だ。いづれも農家の子弟だ。その家の一間を借りて高瀬はさしあたり腰掛に荷物を解き、食事だけは先生の家族と一緒にすることにした。横手の木戸を押して、先生は自分の屋敷の裏庭の方へ高

自分らしい生活。それを思ふ處には、まだ生活の諸問題の上からは、或は早いとも思はれる「結婚」に就いて、頸をタテに振つたのも、自分には自分だけの新らしい粗末な家を作らうと思つたからであつた。

『三吉は兄に金を費はせることを心苦しく思つた。結婚の準備も成るべく簡單にしたい、借金してまで體裁をつくられる必要は無い、と思つた。小泉實はそれでは濟 されなかつた。お俊も小學校の卒業に間近く成つて、是から何處の高等女學校へ入れたら可からうなどゝ相談の初まる頃には、三吉の前にも二つの途が展けて居た。一つは西京の方に教師の口が有つた。一つは往時英語を學んだ先生から自分の學校へ出て吳れないかとの手紙で、是方は寂しい田舍ではあり、月給も少かつた。しかし三吉は後の方を擇んだ。』＊

信州の北部、小諸町といふ小さい町の町立「小諸義塾」といふのが、その後者であつた。——先生は春の新學期から、國語の教師として、こゝに赴任されたのであつた。

土

長野縣北佐久郡小諸町馬場裏（二十八歳—三十四歳）

土に歸れ。——

先生は、あの母親を東京に喪つた後に於て、却つて「土」を憶ふ心を起された人の樣であつた。「土」——そこには一切が成つた。山上そこには一切が自らの手に作られてゐた。……

「もつと、自分を新鮮に、そして簡素にすることは無いか。」……先生は棲み悪い身邊にある虛僞の生活——都會の空氣——甲斐も無い反抗と心勞とから、その他あらゆるものから遁れ出さうとして思ふ處は、その事であつた。

小諸に在りし日

しかし、……先生は、その街の中の住みにくい家の中でも、まづ「詩」となつて開けて來たその道を踏みつゞけやうとしてゐた。「春やいづこに」「白硫瓶の賦」その他詩文集「一葉集」の諸篇が生れて來た。

蒸暑い夏が來る。——その頃には、姉高瀬氏の木曾福島の家の方へ一夏を送りに行つた。谷の深聲が、そこにあつた。「新潮」「晩春の別離」その他詩集「夏草」の全部が成つた。……先生の心は、漸く暗い悲惨な過去の追想から離れかけてゐた。

そして、二十八歳の先生には、「結婚」といふ樣な、新らしい前途が、……周圍の考慮の中に開かれて來やうとしてゐるのであつた。

母の病氣はコレラであつた。そして、そこには一晝夜の激しい苦しみで早く冷たい死が來てゐた。……先生は、本所の避病院の方で、漸くその死顏——左の眼の上の黑い墨子が無かつたら、これが母かと迷ふ程に面瘦せのした母の死顏を見つけたのだつた。

母は『十八の年に吾家へ緣附いて、一生處女のやうな快活な心であつたといつでも人に言はれる。情の深い淚もろいたちではあつたが、泣いたあとは直ぐに心の空が晴れて、沈み勝な嫂を慰めて、立働くのを樂しみにしてゐた。』* ——といふ樣な人で、先生もこの母の傍に、幾度、勵められ、勵されて藝術をしたふ心に立歸つたかもしれないのであつた。

——その死は、勿論積極的な意味で、先生に物を思はせた樣であつた。明治三十年、……その頃には長兄も、長い苦難から免れて湯島の方に家を持つてゐた。先生は、そこに一年の東北學院を辭して歸京した。そして、仙臺で書いた詩稿を整理して、詩集「若菜集」を春陽堂から出版したのであつた。

——「文學界」廢刊。

* 全集 1—334

巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げんとはするなり。』A

——これは、明治三十六年に、仙臺時代の「若菜集」澁谷にての「一葉舟」木曾福島で成りし「夏草」小諸にての「落梅集」を合本した「藤村詩集」の自序の言葉である。まことに、「新しき言葉はすなはち新らし生涯なり」——である。しかも、この新しきに入らむことを願ふ處に、多くの寂しく暗き月日を堪へてまた處に、遂に新聲は叫び出されたのではあつたけれど、ここには、これまで辛酸を共にして來た、愛する母縫子を失はなければならなかつたのである。

明治二十九年十月二十四日。——秋風が赤くなつた柿の樹の葉を吹いて、庭に栗の落ちるといふ様な日に、先生は、母危篤の電報を受取らなければならなかつた。先生の心は、この不幸に震へた。それは不幸につぐに不幸といふ様な過去におびへつゞけた様な震へであつた。『自分の心は玻璃の小窓に譬へて見よう、少しの氣息を吹きかけると、山も川も曇つてしまつて殘らず見えなくなる』——先生は、それを、その夜汽車の白毛布にくるまりながら思つてゐた。

A 全集 1— B 集 1—

新らしきうたびとの群の多くは、たゞ朴質なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた僞りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の淚はかれらの頰をつたひしなり。こゝろみに思へ、淸新橫溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。

われも拙き身を忘れて、この新らしきうたびとの聲に和しぬ。

詩歌は靜かなるところにて思ひ越したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦鬪の告白なる。なげきと、わづらひとは、わが歌に殘りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に勵まされてわれも身と心とを救ひしなり。

誰か舊き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじじ新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。

生命は力なり、力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなはち新らしき生涯なり。

われもこの新しきに入らむことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。

藝術はわが願ひなり。されどわれは藝術を輕く見たりき。むしろわれは藝術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。

あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの

行く筈なのだ。その旅こそは、その流轉こそはその革命こそは悲壯だ。創造の惱みも、惱みと言はれるほどのものなら、この位に苦しまるべきが本當なのだ。

先生が、こゝに來るまでの、長い間の作品のすべてを破り去つたといふことは、いかに、先生が此處に初めて、尠くとも自分らしい言葉——道を見出られたことを語つてゐるものである。そして、同時に、その單なる摸倣とまでも言はれたものにこそ、……そこに歪められ、壓しすくめられてはいよいよ強く、しつツこい先生、やにつこい先生がひそんでゐるだらうことが、思はれて來るのではないか。

『遂に、新らしき詩歌の時は來りぬ。
そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとく呼ばはり、いづれも明光と新聲と空想とに醉へるがごとくなりき。
うらわかき想像は長き眠りより覺めて、民俗の言葉を飾れり。
傳說はふたたびよみがへりぬ。自然はふたたび新しき色を帶びぬ。
明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壯大と衰頽とを照せり。

よろづのなみを
よびあつめ
ときみちくれば
うらゝかに
とほくきこゆる
はるのしほのね

ときみちくれば――そこには、先生の靜かな微笑を見ることが出來る樣である。本當にそれは、待たれ待たれた時であつた。長い間、……自分らしいものが書かれなかつた先生、摸倣だと嘲られなければならなかつた先生、――しかし、それは器用なからではない、かぶれ易いからではない。勿論、自分を持たないからなのではない。それどころか、それはあまりに自分を知つてゐるからだ、重んじてゐるからだ。そして、どうしたら、どんな形にしたなら、自分が出せるかと迷つて歩くからだ。本當の自分の言葉を探して廻るからだ。それでこそ、先人の跡に立寄つて見なければならないのだ。しかも、そこには當然失望する筈なのだ。また、動いて

らしい生の肯定を同時に思ひ見ないでは居られない。かくてこそ、固い殼も破れた。厚い壁も破れた。そして、あの透谷が、漸くに文字にまでして見せた處の「情熱」を言葉にし、詩とし、生氣としたのであつた。それは、同時に、——先生の「曙」を父とした、日本詩壇の「曙」でもあつたのである。

それにしても、先生が、常に、水——水邊に到つては、強く甦へられるのは樂しい。……かくて、先生は、この「新生」の鮮らしい心を、名影町の客舍に、また廣瀨川の小亭の二階に置いて、今はしきりに、自分等の雜誌「文學界」へ、その詩稿を送り續けたのであつた。

潮　音＊

わきてながるゝ
やほじほの
そこにいざよふ
うみの琴
しらべもふかし、
もゝかはの

＊ 全集 1—116

また白雪の積れども
若菜の萠えて色青き
こゝちこそすれ砂の上に
磯邊に高き大巖の
うへにのぼりておがむれば
春やまぬらん東雲の
潮の音遠き朝ほらけ。「生のあけぼの」A

『その頃の詩の領分は非常に不自由なもので、自分等の思ふやうな詩はまだ〳〵遠い先の方に待つてゐるやうな氣がしたが、兎に角先縱を離れやう、詩といふものをもつと〳〵自分等の心に近づけやうと試みた。』B——とは先生が全集「第一卷の終に」の中に、當時を語つてゐられる處であるが、本當に、當時に於ける「言葉」の惱みはどんなに重いものであつたらう。——しかも、先蹤を離れて、……この創造の惱みに、先生が遂に耐えたといふことには、先生のすば

A全集 I—96 B 全集 1—602

亂れて熱き吾身には
日蔭も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさびしき吾耳は
吹く北風を琴と聽き
悲み深き吾目には
色彩(いろ)なき石も花と見き

『……げにわが歌ぞ、おぞき苦闘の告白なる。——なげきと、わづらひとは、わが歌に殘りぬ思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いささかなる活動に勵まされてわれも身と心とを救ひしなり。』A——思へば言ふぞよき、ためらはずして言ふぞよき。……遂に先生はそこまで、自ら言ふ言葉勵まされて來たのであつた。心の春は、そこに近よつて來たのであつた。

春きにけらし春よ春

あしたの雨の風となる
されば落葉と身をなして
風に吹かれて飄り
朝の黄雲にともなはれ
夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ亂れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

——一生の曙はこんな風にして開けて來た。沈默しきつてゐた先生の口唇はほどけて來た。

………

心の宿の宮城野よ

われもそれかやられひか●
野末に山に谷蔭に
見るよしもなき朝夕の
光もなくて秋暮れぬ

想も薄く身も暗く
殘れる秋の花を見て
行くへもしらず流れ行く
水に涙の落つるかな

身を朝雲にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨にたとふれば

若き心の一筋に
なぐさめもなくなげきわび
胸の氷のむすぼれて
とけて涙となりにけり

蘆葉を洗ふ白波の
流れて巖を出づるごと
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の
なきなぐさめを尋ね侘び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらん

ものは、君、死んで居たやうなものだつたからね。考へて見ると、僕のやうな人間がよく、こゝまで生きて來たやうなものさ。』A

——といふやうな仙臺がそこにあつた。そこの自然も、東北學院の圖書室も、この疲れ傷いて來た先生を慰め勵まさないで置かなかつた。

水！………そして、そこには水があつた。市街のはづれを流れ下る美しい廣瀨川があつた。またそのながれの末には、碧いみちのくの海があつた。先生はその川畔に立ち、またその海岸の巖に倚つて溜息をした。——長い、深い溜息を。

夕波くらく啼く千鳥、………B

——先生の溜息は、そこに、兎に角に言葉となつて來た。さうだ、こゝから、出て行かう！と思はれて來た。……先生の深く鬱屈したパッションは漸くそこに流れ出した。

われは千鳥にあらねども、
心の羽をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

A 全集 1—85　B 全集 6—38

すな」と車夫に言はれる様な着物と書籍とも詰めた行李と一緒に上野驛に向つた。そして、東北の空の下へと汽車に乗込んだ。――煙（スモーク）は、その日の雨のために低く臥て、暗く車窓の前を通り過ぎた。

『汽車が白河を通り越した頃には、岸本は最早遠く都を離れたやうな氣がした。寂しい降雨の音を聞きながら、何時來るとも知れないやうな空想の世界を夢みつゝ、彼は頭を窓のところに押付けて考へた。

「あゝ、自分のやうなものでも、どうかして生きたい。」

斯う思つて、深い〳〵溜息を吐いた。玻璃窓の外には、灰色の空、濡れて光る草木、水煙、それからションボリと農家の軒下に立つ鷄の群なぞが映つたり消えたりした。人々は雨中の旅に倦んで、多く汽車の中で寢た。

復たザアと降つて來た。』*

『仙臺は好かつたよ。葡萄畠はある、梨畑はある……讀みたいと思ふ書籍は、學校の方から何程でも借りて來られる……彼處へ行つて僕も夜が明けたやうな氣がしたサ……あれまでといふ

* 全集 4—541

――彼をそこに待つてゐるといふ話をきいた。

出稼――それは彼の望む處であつた。旅も出來る。心持をも轉換することが出來る。そして多少家への仕送りも出來る。先生の心はそこに思ふまでもなく決してゐた。

薄明は、遂に來るかの樣であつた。さうなると、思ひがけない手紙が旅に在る二番目の兄からも屆いた。留守宅の生活費はそちらからも助けてくれるといふのである。また、不幸な兄の上告も聞かれた。そして、すべてはここに、前途を開かれて行くかの樣であつた。――先生は、そこに漸く、仙臺の方へ落ちて行くことが出來るのを思ふのであつた。

先生は、その留守宅を本郷森川町の小さい家の方へ移した。二間ばかりの平屋で、勝手のいゝ家であつた。旅の荷物も、その家の中に、纒まつて行つた。……先生は、その騷ぎの中で、たゞ長くなつて眠つてばかりゐた。せめて一日ゆつくり寢て行きたい、これより外にはこの疲れきつた人に願ひは無かつた。それほど、先生は疲れてゐたのであつた。

それは、八月の末で、毎年の洪水を思はせに樣な季節の雨の日であつた。「恐しく重い行李で

つた。『彼は兎に角、空想を實行しようとして、事を始めて見る男で……』Aあつた。さうだ、遲ればせながらも友達の後を追つて大學の專科に入らうかと思想したのもその當時のことであつた。その願は聞かれなかつた。そして、遂に、こゝまでやつて來た――こゝにも、先生は、激しい幻滅を味はなければならなかつた。一日でやめた。……さて、それからが、如何ならう……。

『到頭岸本は階下の座敷へ寢床を敷いて貰つて、其上へ倒れるやうに成つた。傲岸な彼は、未だそれでも自分の敗北を認めようとはしなかつた。「我は敗北者なり」などとは小欠にも出したくなかつた。斯ういふ負惜みの強い、自分を知ることの少い、盲と啞と聾とを兼ねたやうな青年が、人生とは何ぞやといふ疑問に逢着しながら、その解決に苦んで寢床の上に震へて居る光景は――丁度深傷を負へて戰場の草の中に倒れながら、まだそれでも抵抗する氣でゐる兵士のやうである。』B

……絕望は、先生を不思議な決心に導いた。先生は三度、一切を捨てゝ「旅」に行くことを思想た。そして、そこに自らを救ふことによつて孝道を起てやうとした。愛着の藏書を賣つてその旅費としやうとした。……その時に、先生は、仙臺の學校の方に敎へに來て欲しいといふ

A 全集 4—477　B 全集 4—512

の眼前には未だ開拓されて居ない領分がある――廣い濶い領分がある――青木はその一部分を開拓しようとして、未完成な事業を殘して死んだ。斯の思想に勵まれて、岸本は彼の播種者が骨を埋めた處に立つて、コツ〳〵その事業を繼續して見たいと思つた。』*
それは情熱――といふことば一つを言ひ出すために慘苦の一生をかけた樣な透谷のさびしい道でもあつた。……………
先生は遂に麴町の學校をやめた。――專心製作に從ふ決心で。
二月ばかりは夢の樣に過ぎた。――漠然とした恐怖は絕えず彼の胸を往來した。そして急に身體が震へたり、涙が流れたりして、矢張仕事は出來なかつた。……梅雨のあがらうとする頃には、先生はもう全く別の職業の中に埋れて了ふ積りで、築地の方のある陶器畫を專門とする仕事場へ步いてゐた。
繪畫を愛するのは先生の天性に近かつた。――そこに空想があつた。迷ひに迷つてゐる若い藝術家が、陶器の畫工にならうといふ思想に落ちて行くまでには種々なことを空想したのであ

* 全集 4—458

河の中へ落ち、一つは河まで行かずに手前で止つた。結局奈何して可いか解らなかつた。』*

その暗い年も暮れた。先生はこゝに二十五歳であつた。……池の端の下宿方にゐる友達も二十七になり、また二十四に成つてゐた。若い芽は、そこには早く思ひおもひの方へ向けて伸びかけてゐた。しかも、先生はまだそこに默つて頭を垂れてばかりゐた。その蒼白い額には、一度剃られたといふ髮が復た長く延びて垂下つてゐた。先生はもう、友達に逢つても樂しまれなかつた。

「もうすこしからツとした事は有りませんかねえ。」

——こんな言葉を言ひ出す樣な一葉女史の家に行つても、先生は默つてゐたといふ。……そして、やはり、梅は梅、柳は柳と言ふ樣に、やがては友達とも別れ〳〵にならなければならないのだと考へる樣になつてゐた。

「製作、製作。」——

先生は、大根畠の二階に籠つて、自分は自分だけの道路を進みたいと思つた。——『自分等

* 全集 4—434

一つとして自由に表白せるものは無かつた。』

創造の悩み。――その悩ましさは、この若い日の先生を、そこにいよ〱暗くしたらうことが想像せられる。……それはどんな人に在つても、時代に在つても、乾く時のない悩みだ。しかも、明治も若い、その當時の情熱を言葉とすべく、文字とするべく、その時代の我國の言葉が、文字が、……直前に、われ等の言葉として、その情熱を語り出し得ないといふ様な時代だつたのである。――その悩みは迷ひともなつた。

どうしやう、……その迷ひを、ころげ落ちて行く、石塊に訊ねて見やう――と思ふ程の迷ひが、この若い、先生の胸に來た。

『その年の十二月、脚氣で弱つてゐる姉を連れて、岸本は上總の方へ旅行した。横濱から便船で富津へ着いて、小久保といふ漁村に姉を殘して置いて、房州小湊にある日蓮の生地を見る爲に鹿野山を越えた。石塊の多い山道で、崖の下には谷川の流れがあつた。其時、彼は路傍の石塊を拾つて、崖の上から落してやつた。其様なことで自分の一生の方向を卜はうとしたこともあつた。もし石塊が河の中へ落ちるやうであつたら、文藝の道路を進まう。途中で止まるやうであつたら、全く方向を變へて、他の職業の中に埋沒れて了はう。斯う思ひ迷つた。石塊はごろ〱轉つて落ちて行つたが、一つは河を越して向へ落ち、一つは

くなつたか、奈何して亡くなつたかとは、確めかねたのである。その歸途(かへり)には地(ちべた)が隆(たか)く持上つたり、空が黄色く成つたり、そこいらに在る物の象がグラ〳〵搖いて見えたりした。』*

しかも、この驚きと歎きは、まだ秋の學報を手に取るまでは、夢とも思はれて信じられなかつた。――學報は、その夢を破つて仕舞つた。

「八月十三日、午前七時半、…………」

學報は彼女が、夫の傍に、……永眠した、この事實を確實に載せてゐた。ことに病氣も、産前の劇しい惡阻の爲に心臟病を引起したのだとしるされてあつた。

可畏しい打撃！――青年はもうそこには、働く氣も何にもなくなつて了ふばかりだつた。ただ、その身邊と母、姉、幼い姪――彼が働かなければ、食ふにすら困るこの不幸な人々を見る事によつて、心を取直した。兩手で自分の顔を赤くするほど摩つて、そして漸くに立上つた。

『ます〳〵岸本は無口な人になるばかりで有つた。口で言へないことはせめて文章に書いて表白さうとした。彼は種々な文體を試みた。小說、戯曲、論文、それから新體詩までも試みた。

＊ 全集 4―424

途中である。』A

湯島新花町、—先生達の移り住んだ新居は俗に大根畠と呼ばれてゐるそこに有つた。『大根畑は麴の香のする町で、上麴、白米と記した表障子、日あたりの好い往來の側に乾並べた桶、軒下に積重ねた枯薪などの見られる場處である。そこは湯島四丁目の淺い谷をへだてゝ、神田明神の杜を望むやうな位置に』Bあつて、靜かな二階が一間ある家であつた。先生はそこを自分の部屋にして、そこに机を置いた。二十八年の十一月であつた。

苦い一年、可恐しい一年、……それを、先生はその二階の上で、溜息とした。

勝子の死！

——それも、その夏の八月のはじめのことであつた。……しかも、先生はそれを九月に近くなつて漸くに知つたのだつた。學校の舍監が種々の人の噂をする序といふ風で、「安井勝子さんといふ生徒が御座いましたらう——あの人も亡くなりましたよ」……と言ひ出したのであつた。

『——思はず岸本も紅くなつた。他の生徒とは違つて、妙に勝子のことは尋ねにくい。何日亡

A 全集 4—417　B 全集 4—420

三輪の家の方にも艱難がつゞいた。——その日の中に先生の母親は乳癌を煩つて、病院へ入つた。手術をして間もなく癒つたが、先生を養つた乳房はそのために袋ごと抜き取られて、母親の胸の處にはもうその片方しか垂れて居なかつた。姉は脚氣になつた。そしてそこへ男の子を生んだが、姉の病氣の乳をのんだとやらで生れる間もなくその兒は亡くなつた。……そんなさわぎばかりではない差押へられた財産はいつまでも張紙のまゝではゐなかつた。

——斯様して兄の家は到頭破産した。

『……土の上には影が動いてゐる。日は阪の上の空氣と塵埃とを照して居る。勝手の道具や、柳行李や、それから大きな風呂敷包などを積み載せた荷車の後に隨いて、丁度上野の方から阪へかゝつた人力車がある。荷車は右へとり左へとりし乍ら、本郷臺へ向つて上つて行つた。人力車も徐々隨いて上つた。車の上の人は萬感こもごも胸にせまるといふ風で、人目も憚らず男泣きに泣いて、傍へ來て何か手附をして見せた立ン坊のあるにも氣が着かずに居た。

この男が岸本である。彼は今、三輪を引拂つて、湯島に見つけて置いた新しい住居の方へ移らうとする

れながらも亡友のために、その暗い家に晩くまで起きてゐて「透谷集」を編むことに從つた。

明治二十七年九月。——それは東洋の大機といふやうな時であつた。その月の十三日には最早大本營は廣島にあつた。平壤の戰は既に戰はれてゐた。文筆に從事する人々、畫家なども多く從軍したのであつた。……勝子の出發はその月の下旬で、彼女は一旦鄕里の方へ歸り、それから許婚の人の方へ津輕海峽を渡ることになつてゐた。

先生は、ふと圖書室の戸口のところで、思ひもかけぬ彼女に出逢つた。それは暇乞ひのために學校まで彼女が出て來てゐた日であつた。

『勝子は岸本が自分の前へ來るまで遠慮して立つて居た。圖書室の机のところには四五人の生徒があつた。

「先生、いろ〳〵御世話樣に成りました…………」

斯う言つて、勝子は紅く泣腫れた顏を上げた。彼女はまだ何か言はうとしたが、それを言ふことは出來なかつた。

岸本は默つて御辭儀をして、別れた。』*

* 全集 4—410

「……彼が久しぶりで母や姉と一緒に住まうとした頃は、やがて可怖しい激しい波濤が家庭の內部へ押寄せて來た。兄の民助は最早家に居なかつた。これは民助が日頃信用してゐた男に欺かれて、過つて僞造の公債證書を使用した爲に、鍛治橋の未決監へ送られることに成つたからで」＊——と「春」に書かれてある樣な先生の艱難が起つたらしいのであつた。さあ、斯樣なると、家の內の混雜は浪打つやうである。忽ち先生もその浪の中に捲込まれないでは居られなかつた。

失望に次ぐにこの艱難は先生の心をゆすぶりたてないでは置かなかつた。暗かつた。そしてその日の中に日淸戰爭は戰はれるやうとしてゐたのでもあつた。

母親はその子の無罪放免を願ふために白い足を腫らしてお百度を踏み、鹽だちをして祈つた。先生は未決監の方に面會、差入れのために通つた。しかも、不幸は單獨では來ない。商人としての債務といふ樣なものまでが差押へ、差押へといふ樣な暗い波となつてうちよせて來た。——先生は、再び麴町の學校へ通ふことにして、この破れた家の家計を助けやうと思ひ立つた。三輪から麴町まで。歩いて通ふその道はかなりに遠かつた。——先生は、その長い路に疲

＊ 全集 4—388

られなかつたらしい。――庭の青葉のかげで、彼は縊れて死んだのであつた。

透谷の死の後にも、友達は集つては亡くなつた友達のことをはなした。「――見給へ、ペンキ塗の家もあれば、煉瓦造りもある、昔風の日本造りもある、今の時代は物質的の革命で其精神を奪はれつゝある。外部の刺戟に動かされた文明である、革命ではなくて移動である。」……さうしたその友達の言葉もそこには語り出されるのであつた。それにしても、連中に取つて透谷の死は大きな打撃であつた。友達は皆考へた。しかし、仲間の中から一人の戰死者を出したといふことが、反つて深い刺戟に成つて、各自志す方へ突進まうとしたのであつた。平田禿木、戸川秋骨、馬場孤蝶、星野天知の諸氏、それにこの頃には連中になつてゐた柳村、上田敏氏などの書いたものは、漸く「文學界」を賑はしたのであつた。

六月の四日に透谷の追悼會があつた。丁度その日は彼の三七日の忌日に當つてゐた。――その頃から先生は、大川端の家を出て、兄や母のゐる三輪の家に移つて行つてゐた。

いかに深くわが心の奥に響きしよ。ねがはくば、これを一生のしるべとなさむ。」これが、その手紙の主な文句で、また最後の別離の言葉であつた。猶、勝子はせめてもう一度文通を許せといふ意味を書添へて寄したが、今となつて其をする必要は無い、斯ら岸本は考へて、断然その返事は出さないことにした。』A

青年は、日に幾度となく、井戸端へ出て行つた。そし冷たい眼の覺めるやうな水の中へ燃えるやうな頭を突浸すのであつた。

その、五月の十六日の晩は好い月夜であつた。――先生のよき友、北村透谷は芝公園の方の家で自殺したのであつた。

「門太郎こと昨夜死去つかまつり候。とりいそぎおしらせまで申入候。何卒皆様へも御傳へ下され度候。十七日、朝」B

――先生は、その通信を折柄、訪ねて行つた戸川氏の下宿で受取つた。嚴粛な悲痛な、名のつけ様のない身ぶるいを感じながら二人は、その家の方へ出かけて行つた。

……白晝の樣に明るかつた月の光の靜かさは、彼の魂を誘つたらしい。彼は生の荒廢に堪へ

A 全集 4—347　B 同 4—348 參照

た。そして、彼女は「——しかし、私は貴方の言ふ通りに成ります。」と許嫁の人に言つたといふことであつた。……そして、彼女は急遽、國の方へ連れ歸られることになるだらうといふのであつた。

五月であつた。菖蒲湯があつた。先生は、その湯の中に身體を洗つて、サツパリとした心地になつて机に向つた。健氣な勝子の決心は、深く、青年の心を動かしてゐた。……

『——其晩ほど、彼は自分の一生のことを考へたことがなかつた。彼は勝子に對つてブツキラボウな手紙ばかり書いたもので、また其を以て男性らしいとして居たものである。其夜、彼は始めて自分の心に近い手紙を書いた。しかも、その心は捨てたと書いた。彼は最早勝子を慕つてゐるものではないといふ事を書いた。今迄の自分は唯彼女を欺いてゐたのであると書いた。そして、決心の籠つた調子で、許嫁の人の許へ行くやうに、親の心を安ずるやうに、斯う一氣に書下した。』*

勝子からの返事が來た。——

『「君はわが心を知りたまはずとのみ思ひしに、今にしてそのあやまれるをおもひしりぬ、たまはりしふみ

* 全集 4—344

は見違へるほど成人して居て、これが吾兒かと半信半疑で居る位であつた。碌々挨拶をせずに、母親は岸本と一緒に車に乘せられた。何處かの若い人と一緒に乘つた、斯う母親はまだ疑つて居た。岸本が東京の夜の市街を指して見せて、「母親さん」と言つた言葉に驚かされて、はじめて「捨吉だつたか」と思つたといふ。この事を母親が後で話して大笑ひした。長いこと別れて居た親子は斯樣な風にして一緒になつた。』*

母親や兄達は、もう三輪の方で暮してゐたが、先生はまだ吉村の家に止まつて朝晩の手傳ひをしてゐた。そして、その日の中に友人の同情から、——その友達の下宿の方で勝子に逢ふことが出來、また手紙を受けることが出來た。……しかし、またそこには花の時節にも近づいて勝子の卒業も迫つて來てゐた。そして、それはやがて、許嫁の人との結婚に近づくことであつた。青年と處女とは、隔てられてゐて各々の深い溜息を日記や、手紙に書いた。

遂に、卒業式が來た。そして、先生は友を通じて、彼女が、最後の決心に落ちて行つたらしいのをきいた。それは、彼女が許嫁の人の前に一切を告白して了つたらしいといふことであつ

*全集 4—294

「人間の力には限りが有るネ、——僕は世を破る積りで居て、反つて自分の心を破つて了つた。非常にそれが殘念だ。」彼はそんなことを話して歸つて行つた。先生は、そこに、彼によつて書かれてゐた文章を思ひ浮べた。……「文士の前にある戰場は、一局部の原野にあらず、廣大なる原野なり。彼は事業を齎し歸らんとして戰場に赴かず。必死を期し、原頭の露となるを覺悟して家を出づるなり——」*

その頃、透谷は、京橋彌左衞門町の、母の煙草店の二階に居た。そして、彼は、もうそこで自殺を計つて、短刀で咽喉を傷けたほどに心の傷に患んでゐる人であつた。

十二月、鄕里の母は、いよ〳〵國を出て、大川端の兄の棲む樣になつた下谷三輪町の方へ移つて來たのであつた。

『——母親、姉、姉の娘、それから供の人、斯う四人、日が暮れてから新橋の停車場に着いた。母親は男の着るやうな黑羅紗の鳶合羽、姉は厚ぼつたい肩掛に身を包んで、いかにも寒い山國から來た旅人といふ風に見えた。停車場の雜沓の中では、人々はあまり言葉も交す事が出來なかつた。母親の眼に映つた岸本

* 全集 4—254參照

「一體、如何いふ量見でそんなに長く遠方へ行つて居たんだね。」

この老祖母（おばあさん）の問は、誰も聞いて見たいと思ふことであつた。

『岸本は無言である。彼が無言なのは、言へて言はないのではない、言へなくて言はないのである。漂泊のそも〳〵は民助に告げた通り、彼が勝手に逢つてから、激しい精神の動搖を感じて來たのは事實だ。自分の家が自分の家でなくなつて來たのも事實だ。物の奧底に隱れた意味を考へるやうに成つたのも事實だ。洪水が溢れて來たやうに押出されて行つたのも事實だ。彼が其日まで經て來たことはすべて、遂に起つた「新生」の光景である。何の目的があつて、其樣な長旅をしたかと問を詰められても、それは口にも言へず、目にも見えない。』*

その日から、先生はまた吉村の家の書生に歸つた。そして、むかしからの習慣で跣足になり尻端折をして、庭を掃いた。また、病人のために藥湯を立てるといふので井戸端へ出て水汲もした。十一月の末であつた。そんな處に、最早世の戰ひに疲れて、力屈したといふ樣な北村透谷が訪ねて來た。

――彼はもう、幾晩か不眠の狀態に在つた。學校の方も病氣居を出して休んで居ると言つた。

* 全集 4—215

が、それから中年に成つて再發した。この事實を民助は思ひ浮べた。そして、この年齢といふから、あるひは弟と同じやうな動機で、・・・斯様な風に想像して見た。』＊

手――その親譲りの憂欝はどんなに深く暗かつたか。有り餘る程の懐ひ、ありあまる程の思想、……それが、溢れ、流れ、ひらかれて行かれないとしたならば、氣も狂はう。それにしても、曙の前には、常に、いよ／＼濃い色の闇を待ち耐えねばならないのであつた。

やがて、その恩人の許へ歸る日が來た。――青年は、兄について行くといふより、引ずられて行くといふ風で、一歩も躊躇することが出來なかつた。大川端の交番のあるところまで行くと、柳の樹の下に肥滿つた人がしやがんで、釣をして居た。その人が吉村の叔父であつた。

「オヽ、よく歸つて來た。」

青年は、その坊主頭を深く下げた。――それから、この小父に連れられてなつかしい家の下にも頭を下げて行つた。大病だつた叔母も、床の上に起きられる程になつてゐた。

＊ 全集 4―205

た程の骨格であつたから、大きさは比較に成らないが、弟の手は父のを若くしたといふ迄で、形ばかりでなく、蒼白い表情までも實によく似て居た。それを見ると、十七の歳から身代を任されて、親孝行と言はれた丈に苦勞をしつゞけた、その自分の過去が彼の胸に浮んだ。民助の眼で見ると、維新の際には勤王の說を唱へたり、諸國を遍歷するやら、志士に交を結ぶやらして、殆ど家のことなどを顧みなかつた人の手がそれだ。どうかすると默つて家を出て了つて、二月も三月も歸らないから、其度に峠の爺なぞを賴んで連れて來て貰つた人の手がそれだ。平素はまことに好い阿爺で、家の者にも親切、故鄕の人々にも親切で、一村の父のやうに慕はれて居たが、すこし疳癪が起つて氣に入らないことが有ると、弓の折れで民助を打擲した人の手がそれだ。國學や神道に凝り過ぎたともいふが、深い山里に埋れて、一生を煩悶し、到頭氣が變に成つた人の手がそれだ。「阿爺さん、子が親を縛るといふことは無い筈ですが、御病氣ですから勘忍して下さい。」斯う民助が言つて、御辭儀をして、それから後手に括し上げた人の手がそれだ。ありあまる程の懷ひを抱き乍ら、是といふ事業も殘さず、終には座敷牢の格子に掴まつて、悲壯な辭世の歌を讀んだ人の手がそれだ。

「捨吉も年頃だ。そろ〳〵阿爺が出て來たんぢやないか。」

斯う民助は心を傷めた。何でも、父が二十の年齡とかに、初めて病氣が發つて、其時は癒るには癒つた

我慢しながら、なつかしい大川端の方へ歸つて行くのであつた。

「オヽ、お前か。」

と、兄は弟を見て言つて、コン〳〵續けざまに咳をした。青年はその前に首を垂れた。——

彼の坊主頭と墨染の法衣とは千百の辨解にも勝つて、過る月日のことを語るかの樣に見えた。

『——民助は、圓滑い調子の人として通つて居たが、弟に對しては、寧ろ嚴格な方であつた。そのコハい人の前で、岸本は旅に出た理由を說明しなければならないやうなことに立到つた。斯ういふ秘密を兄弟の前に暴露するほど、岸本の身に取つて可羞しいことはなかつた。彼は精神から冷い汗を流したり、頰を紅くしたりして話した。』*

兄の憤激は哀憐に變つて來た。「へえ、貴樣のやうなボクネン人にも、そんな洒落氣が有るのかい。」と言つた眼付をした。そして言つた。「何かい許嫁のある人なのかい。緣の無いものは、こりや仕方が無い。」

『其時、長火鉢に彄してゐる岸本の手が妙に民助の眼に着いた。不恰好で、指先が短くて、青筋が太く刻んだやうに顯れたところは、どう見ても亡くなつた父の手にソックリであつた。父は足袋も圖無しを穿い

* 全集 4—203

それにしても、どうしやう—— 若い先生は前途をおもふことに惑つた。そして其の思想(かんがへ)を纏めるために蜜柑畑の方へ出て行つた。……二つ三つ袂に入れて、其を喰ひながら先生は谷の間を歩いた。『枯れた草の上に寝て、眺めて居ると、生きたいと思ふものは彼ばかりではないやうに見えた。樂しい日の光！ 樹の葉といふ樹の葉はみな爭つて其を享けやうとしてゐる。果實は果實で、その爲に色づいて居る。』A ——また、そこに土の臭ひもして來る。……と、彼は親兄弟が戀しくなつて來た。

『旅で死なうとまで考へて家出をした彼はもう一度「世の中」へ歸らうと思ひ直した。兎に角、大體の決心はそこに在つた。そんなら何處へ歸る、といふことになると、道は左程容易く見當らない。恩人の家——順序から言へばそこへ歸るのが至當である。しかし、默つて出たつきり文通もせず、叔母が危篤といふ電報を兄から受取つた時にも返事をせず、しかも其電報が三度もかゝつて來たのに到頭強情を張り通して、今では病人の生死すらも解らずに居るやうなところへ、もう一度歸つて行くといふことは容易でなかつた。』B

しかし、……先生も心を決した。そして、漸く三度目に、恩人の家を指して、ツラい思ひを

A 全集 4—190　B 同 4—191

小諸城跡より見たる千曲川

曙

東京湯島時代及仙臺名影町時代（二十三歳——二十七歳）

「此世の中には自分の知らないことが澤山ある。——今こゝで死んでもツマラない。」

青年は浪打際で踏み止まつて、そこから、もう一度引返して來た。——そこには、既に先生に於ける悲壯なる生の肯定が來てゐたのであつた。

——先生はその心で、……それとも知らずにすぐ近くにまで來てゐた透谷の前川村へたどりついた。——このよき友は、一度は、そこに驚いて見せながらもまた、この若い友達を勵ます樣に言ふのであつた。

「——なんでも一度破つて出たところを復た破つて出るんだね。畢竟（つまり）、破り〳〵して進んで行くんだね。」

斯う思つて起ち上つた頃は、最早海も暮れかゝつて來た。蒼茫として彼の眼前に展けた光景は永遠偉大な自然の繪畫でもなければ、深秘な力の籠つた言葉でも無い。海はたゞ彼の墳墓である――冷い、無意味な墳墓である。不幸な旅人は、今自分で自分の希望、自分の戀、自分の若い生命を葬らうとして、その墳墓の方へ歩いて行くのである。到頭、彼はその墳墓の前に面と向つて立つた。暗い波は可怖しい勢で、彼の方に押寄せて來た。』＊……

「夜の海」は、それほどまでに暗く、重かつたのである。――濃情、それはなつかしくも、またおそろしいものではなかつたか。固い心の壁よ、その呪はしい厚さを、夜の海の重さにくらべて見やうか。……「木曾谿」の黑い蝶々がこゝにも羽ばたいてゐたのではないか。

＊ 全集 4—173

何處へといふあてもなく、足に任せて歩いた。たゞ歩いた。日暮に近い頃まで食はずに歩いた。腹はへつた。そして唯東海道を下つて行つてゐるといふことより外に知る處もなかつた。それにしても、偶然に左の袂から發見された十錢の銀貨は、その夜を丈は木賃宿の一室に眠らせてくれた。然し、もう、その翌日の當はなかつた。笠もない怪しげな青道心には險しい眼をして見せるものはあつても、一飯を惠んでくれる人もなかつた。苦み、餓え、疲れた、左樣した旅の夕ぐれには、實に思ひがけない思想の起つてくるものであつた。

『幾度か岸本は橋の上を往つたり來たりした。最後に村の方へ半町ばかり歩いて行つて、急にそこで踵を返した。彼の足は浪の音のする方へ向いた。橋の畔から竹藪のやうなところを通り拔けて、小高い砂山のあるところへ出ると、一筋の細道が枯草の中に在つた。所謂濱道だ。それを辿つて海の方へ行く前に、彼は先づ四邊を眺め廻した。右に墓地がある、花なぞを供へた新らしい墳がある。死人に手向けた水もある。彼はその茶碗を取つて、渇いた咽喉を潤した。それから古い石塔の倒れたのを見つけて、その上に腰を掛けて、考へた。

「萬事休」——

一夜の行爲――それは不思議な決心を、この青年に決しさせてゐた。彼は、きたならしい場末の理髪店へ這入つた。……

『可愛らしい、とは言へ甚だ生臭な青道心が、到頭そこへ出來上つた。青々と剃立てた頭を大きな鏡に映して見て、岸本は自分で自分の影にニヤリと笑つた。

「頭が出來た。これから服裝だ」

と呟き乍ら、岸本はその床屋を出た。彼の懷中には、時計を賣つた金の殘りの外に、未だ幾何の持合がある。鎌倉まで汽車に乘つても、一圓ばかり殘る勘定になる。そこで、例の寺へ向けて品川を發つた。この日天氣快晴、雲なし。』*

その風體は、鎌倉の寺の住職を驚かした。彼は懷中から紙入を取出し、それを住職の前に置いた。彼は身に附いたものゝ全部を捨てる決心を示して、法衣の分與を願つた。その決心は住職の心を動かした。……正式ではないが一種の僧服をそこに纏つて、十一時といふにこの寺を出た。眞の放浪、眞の漂泊はこれからだといふ心で。――そしてもう、彼は一文の金も持つてはゐないのであつた。

* 全集 4―160

める道も無かつた。先生はもう夜に鳴く鴈の荒いその叫びを友達の下宿の屋根の上にきいても靜止して居られない樣な人であつた。——そして、遂に、そこにあるかなしい爆發を持つて來たのであつた。

青年は、長い間持續けて來た鐵皮の時計を賣拂つた三圓の金を懷にして、……不思議な戰慄に抵抗することも出來ずに酒を飲ます家に上つた。

「酒でものんで見たら……、」

しかし、その日に限つて、飲んでも飲んでも醉ふことが出來ずに却つて、癇をでも煩ふほどの戰慄が襲つて來た。……そこには『夕方の空は蒼黑く變つて來た。彼は自分の生涯も同じやうに幽暗(うすぐら)く變りつゝあることを感じた。そして、怖ろしい勢で、荒れ廢れて了ふやうな氣がした。ふと、途中で袂を探ると、勝子の手紙と寫眞がある。何と思つたのか、岸本はそれを裂いて捨てた。』*

青年の足は、夜の街をふるへながら歩いてゐた。彼はその風が品川の海の方から吹いて來るのを知つた。

* 全集 4—156

草は思に沈むめり、
秋の無情に身を責むる
花は愁に色褪めぬ。
…………』A

それは透谷の創作であつた。彼は先生を心配して、訪ねて來ながら、この詩を唄つた。聲は哀しかつた。先生はこの友達と一緒に、氣違ひにでもなつて仕舞ふのではないかと思ふ樣な可畏さを感じた。そして言つた。「北村君、僕なぞは、左樣長く生きる人間ぢやないやうな氣がする。二十五といふ年が來たら、死ぬネ。」

『到頭、岸本は行き止るところまで行つた。第一食ふに困る。斯う悶え始めた頃は、やがて十一月の初めであつた。』B——最早寺にもグズ〱しては居られなかつた。前途は非常に暗かつた。しかも、たゞ怖ろしい勢で押出されて行く人の樣に、再び、東京に向けて鎌倉を立つた。愛人は死ぬかもしれない。——斯樣いふ焦燥と悲哀とに熱くなつてゐる先生を、友人達も慰

A 透谷全集「蝶の歌」 B 全集 4—148

そこへ、八戸へ行つても一週間とは居附かなつたといふ先生が歸つて來た。顏を見合せるより仕方ない樣な顏を二人はそこに見合せたのであつた。先生は頭をかいた。

また鎌倉の禪寺に先生は歸つて行つた。——古い、閑かな寺の中にゐて、青年は次第に前後を顧みない樣な心となつて行つた。終には愛人の住む家の方へ直接に手紙を送るといふ程にも無謀になつて來た。彼女もまたそこに純直な可憐の胸を開けて見せた。それには、淸い交際も續け難いものとか聞いてゐるが、君の心を力にして、自分も女らしい道を歩いたい、とも、あゝ、わが身はすでに死せるなり、殘るはたゞ君を慕ふ心のみ、とも書いてあつた。

——本堂の側にある明るい部屋の、日の射す壁の上に横になつて、よく青年は假寢をした。そして、そこに、この愛人にもまた彼と同じ樣な堪へがたい童貞の惱みのあるらしいのを思つて見たのだつた。

『ひとつの枝に雙つの蝶、
　羽を收めてやすらへり。
　露の重荷に下垂るゝ

八戸へ立つといふ日の前には、遂にその人と逢はれるといふ樣な日も來てゐた。

『勝子は人力車でやつて來た。前後の場合を考へると、許されて逢ひに來た人ではないらしい。目立たないものを著て、其頃の若い人が結つた樣に髮を束ねて、花も挿さずに居る。岸本は洗ひ洒しの白い單衣に角帶を捲付け、可恥しいほど見窄しい風をしながら勝子を迎へた。つく〴〵彼は身の落魄を感じた。』*

——その日から、彼の胸は餘計に苦しくなつて來た。親の定めた許婚の人があるといふことを、そこにはいよ〳〵はつきりとしたその日となつて、青年は、今は却つてその人が欲しくなつて來たのであつた。

早く遠いところへ行け——そして先生は八戸行を決行した。……その頃には透谷は國府津在の前川村の方へ移つてゐた。そして彼はそこに靜かに居ながらも怖ろしい身内の異狀を漸くにして感じ出したといふ頃であつた。若い夫婦は慘として相對するやうな日を送つてゐたのであつた。

* 全集 4—85

『紅く泣腫れた岸本の頬は先づ三人の心を動かした。彼の粗く剛い髮、大きな鼻、體軀の割合に幅の廣い肩なぞは、寒い山國の生れといふことを示して居る。傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病な、感じ易いと同時に愚鬮々々した。——斯らいふ憐む可き性質は、彼の容貌を沈鬱にして見せた。』*

親しい友達同志は七月の夜の明けるのも知らない位に話した。

「オヤ」と友達の一人が言ひ出した。「君は煙草を喫み出したね。」

たばこ——吉野の旅から吸ひだしたそれも、先生にとつて、この苦しい旅の記念のものであつた。

八月の上旬まで、芦の湖の方に、滯つて居た先生も、兎に角、山を下らなければならないと思つた。しかし、先生には、今更に歸るべき家も無かつた。尙、暗い旅をつゞける心で、兎に角、鎌倉のある寺院の一室に引籠つて行つた。困つた。——そこで、透谷にすゝめられて八戸に行くことにした。その途上を京橋の家に戸川氏を訪ねたそして、友の溫情に力を得て始めて勝子へ宛てた手紙を書いた。

* 全集 4—14

〳〵刀を打つて來た彼の老人の顏を見たり聲を聞いたりするばかりでも、何となく安心させるやうな人でした。身には美々しい着物も着けず、胸には勳章も飾らず、一寸見たところではお百姓か何かのやうな粗末な服裝をして働いて居ましたが、しかし逢つて話をして見ると一生忘れることの出來ないやうな力のある人でした。』＊

茶丈に夏が近づいて來た。その家のおかみさんや娘の張る螢籠の數が漸く增えて來た頃東京の方の友達から手紙が來た。それには『岸本君、七月二十二日に東海道――吉原まで來給へ。其日を期して東西から富士のもとに會することゝしやう。君の都合もあると思ふから爲替で旅費を送る』Bといふ意味が認められてあつた。

――そこには、もう東京の空も近かゝつた。自分ながらに不思議な心持を汽車に乘せて、再び東へ歸つて行く先生がそこにあつた。

北村、平田、戸川の三人は吉原の宿に待つてゐた。そこへ先生は久留米飛白の單衣に角帶を捲附け、夏帽子、脚絆、尻端折といふ風體で、他に檜笠を攜へて、……到着した。

A「めがね」175　B 全集 4—5(春)

むべき發心者のやうに見られたいと願つたのであつた。

先生は毎日旅をつゞけた。興津の清見寺に詣り、富士の裾を行き、またところ〲汽車にも乘つて熱田に出、船で四日市に渡り、龜山で一泊して、これから深い寂しい山路を歩いて芭蕉の生れた伊賀から、近江の國境を越した。そして草津へ出、靑い琵琶湖を見て大津に入つた時は白い綿のやうな雪が、佗しいこの旅の荷物に降りかゝり、またその若いさかりの足を燃えさせた。

樂しい、かなしい旅はつゞいた。神戸の方に星野兄妹から紹介された友達を訪ねた先生は、更に高知の方に馬場孤蝶氏を訪ねた。黒ずんだ草色のやうな木綿の羽織を着て、大和の檜木笠を携へたといふ先生は、そこにまで船に搖られて行つて旅の草鞋を解いた。

しかも、その旅は尙續いた。再び草津の友達の家に歸り、更に西行の舊跡をたづねて吉野に行き、そしてこゝには花から若葉の頃までを止つた。東京から訪ねて來た星野氏に出會つたのもこゝで、更に蛙の鳴き出す頃には、三度琵琶湖畔に歸つて石山の茶丈に漸く旅にこやけた身體を横へた。こゝでは、堀江來助といふ刀鍛冶の名人に逢つた。この素朴にして正しい老人の心は、先生のその旅の心にも深い影響を持つて來た樣であつた。

「——丁度、來助爺さんはあのケサンのやうな安心を與へる人でした。六十いくつになるまでチントン

雨具、畳、筆のたぐひ、あるはさりがたきはなむけなどしたるは、さすがに打捨てがたく、路次の煩ひとなるこそわりなけれ。』A

海に近いことを思はせるやうな古い街道の松並木が行く先にあつた。先生は路傍にある石の一つに腰掛けて休んだ。そして周圍を見廻した。眼前には、唯一筋の道路と、正月らしく映つて來て居る日の光とがあるばかりであつた。彼は恩人からも、身内のものからも、友達からも、自分の職業からも離れて來た自分獨りの旅のすがたを見つけた。日頃親しい人達は誰一人傍に居なかつた。彼は石に腰かけながら、肩から下した風呂敷包をその石の側に置いて、熱い涙を流した。B

遠く行くに從つて、先生の心を苦しくして來たことは、大川端の方に殘して來た忘恩の行爲であつた。それは遂には一種の恐怖にさへもなつて、逃れ行く自分を捉へに來る樣であつた。青年はその苦痛にいよ〳〵旅の足を早めながら、一切を捨てゝこゝまで來た自分の家出が、單なる忘恩の行爲でなしに、父母から背き去り墨染の衣に身をやつしても一向に道を急ぐあの憐

A「奥の細道」より　B 全集 9—641參照

——この最後の餞別の言葉は、こゝまで來た青年に取つて、どんなものを贈られるよりも禧しかつた。實に、一切を捨てゝ來て、初めて青年はそんな禧しい言葉を聞くことが出來たのであつた。それをきけば、もう澤山だとさへ思はれた。

みんなは、朝日のあたつた道の、枯々とした田圃側に立つて見送つてくれた。先生は振返り〳〵、裏道づたいに平坦な街道の方へ出て行つた。そこはもう東海道であつた。……心に這入つて來るのは、あの旅の詩人の「道の記」の節々であつた。野末に死ぬることを常に期してゐた樣なその人のかなしい旅の言葉であつた。

「……むつまじきかぎりは宵よりつどいて、船に乘りて送る。千住といふ處にて船をあがれは前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の泪をそゝぐ。

行春や　鳥は啼き魚の　目は泪

是を矢立の初めとして行道なほすゝまず、人々は途中に立ちならびて、後かげの見ゆるまではと見送るなるべし。………

痩骨の肩にかゝれるもの先づ苦しむ。只、身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴かた、

彼はそれを拒むことの出來ないやうな氣がして居た。その心から、岡君にたづねて見た。」
「僕の足を浮ついて居るやうに見えませうか。」
「どうして、そんな風には少しも見えない。如何なる場合でも君は靜かだ。極く靜かに君はこの世の中を歩いて行くやうな人だ。」
この岡君の言葉に、捨吉はいくらか心を安んじた。』*

朝が來た。先生は、そこに起立つて、禮を述べ、別れを告げて旅の脚絆をつけた。麹町の生徒に贈られた羽織を着、大川端から着て來た羽織、僅かの着更へ、本二冊、紙筆なぞは凉子から贈られた袋と共に一纒にして、肩にかけると、自分ながら、旅人らしい心持が浮んで來た。
……草鞋で砂まじりの土を踏んで友達の別莊を離れ樣とした頃、そこまで一緒に出て來た友達は言つた。
「ぢや、まあ御機嫌よう。お勝さんの方へは、妹から君のことを通じさせることにして置きました。」

* 全集 9—639

——と書いた。切ない戀のためには彼は敎會をさへ捨てゝ出て行く氣になつた。』A

學校を辭した先生は、冬休らしい顔付で恩人の家の方へ歸つて行つた。そして大きくなつたその家の息子や、お婆さんや濱の方から歸つてくる姉さんの傍に、折からの樂しいらしい正月を迎へながらも、そこには冷たい〳〵汗を密かに流してゐなければならなかつた。

本二冊、それに僅かな着更への衣類を風呂敷包にして、先生は、遂にある夕方の燈火の點く頃、默つてこの大川端の家を出た。——先生二十二歳の一月であつた。

『眼に見ることの出來ない大きな力にでも押出されるやうにして、……』B先生は東京から離れて行つた。鎌倉に星野氏を訪れる頃には、もはや身は漂泊のさかひにあつた。星野氏は前途を思ひやつて、さしあたりの路用を作つてくれ、妹の凉子は餞別だと言つて茶色の切地で作つた旅行用の袋を取出した。そして、先生はそこにまた思ひがけぬ麹町の學校の生徒からの贈りもの——仕立卸しの綿入羽織を受取つた。

『前途の不安は年の若い捨吉の胸に迫つて來た。「お前は氣でも狂つたのか」と他に言はれても

A 全集 9—628　B 同 9—634

る彼に殘して行かうとした爲であつた。透谷はこの志を快く受けた。そして彼にも妻子が無いならばといふ樣なことまで行つてその行を慰めて呉れた。先生は、そこに、行く〳〵はこの友の教へ子としての勝子を思ふことに、せめて心やりを感じながら、この友の家を辭した。

『麹町の學校へも捨吉は最終の授業の日を送りに行つた。彼は平素とすこしも變つた容子の無い勝子を同じ組の他の生徒の內に見た。十二月の末らしい日の光は、二階の教場の窓硝子を通して黑板の上まで射して來て居た。彼は新しい白墨の一つを取り、その黑板に心覺えの詩の句を書きつけ、それに寄せて生徒に別離を告げた。若くて貧しい捨吉は何一つ自分の思慕のしるしとして勝子に殘して行くやうなものをも有たなかつた。わづかに、その年齡まで護りつゞけて來た幼い「童貞」を除いては。

……淚一滴流れなかつた。それほど捨吉は張りつめた心で勝子から離れて來た。牛込の下宿に歸ると、彼は麹町の教會――もう一度その空氣の方へ近づかうとして高輪の方から籍を移して來てゐた――教會の執事に宛てヽ退會の屆を認めた。

御　屆

私儀感ずるところ有之、今回教會員としての籍を退きたく、何卒御除名下されたく候

『それほどまで彼が沈默を守りつゞけたのも、愛することを粗末にしたくないと考へたからで、のみならず、默つて行き默つて歸る敎師としての勤めを一層苦しく不安にしたものは、どうやら彼が學問の資本の盡きさうに成つて來たことであつた。不慣れな彼は、あまりに熱心に生徒を敎へ過ぎて、一年足らずの間に僅かな學問を皆出しきつてしまつた。それ以上、敎へる資本も無いかのやうに自分ながら危ぶまれて來た。有附いた職業も、それを投出すより外に仕方がないほど、敎師としても行塞つた。』＊

先生の二十一といふ歳も二週間ばかりのうちに盡きやうとする頃であつた。麹町の學校も第二學期を終りかけてゐた。——その日の中に、先生は、あの芭蕉の「奥の細道」を開けて見、聲に立てゝ讀んでゐる中に、……遂にある悲しい決心を摑んだのであつた。

「古人も多く旅に死せるあり。」——

先生は、そこに一切を捨てて旅に赴く心を、その昔の人に導かれ出されたのであつた。先生はその決心をもつて芝公園の家の方に透谷を訪ねて行つた。——學校の方の仕事を、妻子のあ

＊ 全集 9—626

學雜誌の分身として出して來て居た「文學界」を新らしく大きくして創刊しやうといふ計畫を立てゝ居た。透谷も、先生もそれには加はらうとしてゐた。年若ながら兄達の仕事と同情のある星野兄弟のその妹をはじめ、麴町の學校の方にある人達を背景に有つことが一層この勢ひを促してゐた。それは、何となく若いもの丈の世界がそこへ出來かけて、そこにも、こゝにも點いた燈火が見えて來た樣であつた。

『何一つ樂しいと思つたこともなく、寂しい〳〵月日を獨りでこつ〳〵辿つて來た樣な彼も、今こそ若い日の幸福を――長い間、自分の心に求めて居たものを見つけたやうに思つて來た。その寂しい月日が長かつただけ、心を苦しめることが多かつただけ、それだけ胸に滿ちる歡喜も大きなものゝ樣に思つて來て居た。』*

しかし、先生が、漸くにしてその歡喜を感じ得る樣に成つて來た頃は、やがて何等の目的もない、かなしい旅に上らうとして居る時であつた。

――彼は波のやうに踊り騷ぐ自分の胸を押へて、勝子を見るにも堪へられなくなつて來た。

* 全集 9—630

生徒だ、といふことを思ふと苦しかつた。青年は人を教へるといふ勤めの辛さを味つた。どうかして自分の熱い切ない情を傳へたいとは思つても、それを思へば思ふほど、餘計に自分を制へてしまつた。彼女のことを知りたい、とは思つても、その機會の前に、最早自分の顔を紅めてしまつた。

『——眠りがたい夜が續いた。どうかすると二晩も三晩も全く眠らなかつた。例の小座敷に置いた机の上には、生徒から預つた作文が載せてあつた。その中には、最近に勝子の書いた文章も入つて居た。讀んで見ると面白くもをかしくもない文章が、何事も知らない鳩の樣な胸から唯やすらかに流れて來てゐる。捨吉はその作文が眞赤になるほど直して見て、獨りで默つて居る心を耐えた。』*

そこにはまた、——俄かに友達同志の交遊が擴がつて來た。透谷は星野氏等に逢ひ、また先生は新らしく平田禿木氏等と近づいた。そこには青年らしい悲しみを持つてゐないものは無かつた。それがまた彼等を更に親しく相寄らせたのであつた。星野兄弟と平田氏等はこれまで女

* 全集 9—618

分の内部に眼をさましたやうな怪しい情熱が何處へ自分を連れて行くのかと思つた。言ひあらはし難い恐怖をさへ感じて來た。浮いた心からとも自分ながら思はれなかつた。』A

勝子B——

勝子は、先生の敎へてゐた二つある組の下級の生徒で、先生と同年ぐらゐの年頃に見えた。『處女のさかりを思はせるやうなその束ねた髮と、柔かでしかも豐かな肩のあたりの後姿とは言ひあらはしがたい女らしさを彼女に與へた。一學期の間の成績から押して見ると、いかなる學課も人に劣るまいとする樣な氣象の勝つた生徒ではないらしかつた。どちらかと言へば學問は出來ない方だ。女としての末頼母しさと、無器用とが、彼女には殆んど同時にあつた。』Cとされてゐるのが、それであつた。人の面影——頑に、獨り秘かに耐えやうとすればする丈、その戀の意識は深くなつて行くのだつた。勝子はもう、青年の內にも外にも居る樣になつた。……どうかすると、彼女の大きく見開いたやうな女らしい眼が、時には姉さんらしい溫みのある表情で、時にはあまえる妹のやうな娘らしさで、彼の身に近く來るのであつた。

怖れてゐたことは遂に來たのであつた。——そして、それも、青年は敎師だ、そして勝子は

A 全集6—607　B「櫻の實の熟する時」及び「春」に因る　C全集9—597

たやうなものでは無かつた。神は知らざるところなく、能はざるところなく、宇宙を創造し攝理を左右して餘りあるほどの大きな力の發現であるとは言へ、左樣した神の本質は先入主となつた極く幼稚な知識から言へるのみで、捨吉の心の底にあつた信仰の對象は必ずしも基督の身に實際に體驗され、基督の人格に合致した樣なものではなかつた。有體に言へば、エホバの神とはあの三十代で十字架にかゝつたといふ基督よりももつと老年(としより)で、年の頃およそ五十ぐらゐで、親しい先生のやうでもあれば可畏い親父のやうでもある肉體を具へた神であつた。半分は人で半分は神である樣な斯の心像に、捨吉は舊教的な人物に想像せらるゝやうな風貌を賦與(あたへ)て居た。例へば、アブラハムの素朴、モオゼの嚴肅。斯のエホバの神が長いこと捨吉の心の底に住んでゐたと聞いたら、笑ふ人もあるだらうが。實際他界のことにかけては、捨吉は少年時代からの先入主となつた單純な物の考へ方に支配されて居て、まるで子供のやうにその日まで暮して來たのであつた。

――隱れたところをも見るといふ斯の神の前に捨吉は跪いた。おごそかなエホバの神のかはりに、自分の生徒の姿が瞑つた眼前にあらはれて來た。若々しい血潮のさして來て居るその頰、かゞやいたその眸、白い頸、女らしいその手。……

涙ぐましい夕方が來た。青年は獨りで自分の部屋を步いて、勝子の名を呼んで見た。彼は自

By his cockle hat and staff,
　And his sandal shoon.
He is dead and gone, lady,
　He is dead and gone;………

堪へがたい寂しさに、獨り耐えやうとして、四月以來起きたり臥たりした自分の下宿の小座敷の中を歩きながら、不圖として唄ひ出されて來るものは、口吟みなれた聖い讃美歌ではなくて、この可憐なオフエリヤの歌に變つてゐた。――鎌倉の方で聞いて來たさかんな蛙の聲はまだ耳の底にあつた。あの終宵伴侶を呼ぶやうな、耳についた聲は、怪しく胸騒ぎのするまでに先生の當時の心を憂鬱にした。

『ある日、捨吉は麹町の學校から下宿へ戻つて來た。彼は自分の部屋の疊へ額を押宛てるやうにして、獨りで神の前に跪いた。……

捨吉が幼い心の底にある神とは、多くの牧師や傳道者によつて說かるる父と子と精靈の三位を一體とし

としてゐることが想像された。』＊

不思議の變化が先生の内部に起つて來たのであつた。――それはその一學期が濟んで暑中休暇が來るといふ頃であつた。先生は、その言ひ表しがたい心を制へやうとして一夏の間を星野氏の隱栖のある鎌倉の方のある農家の一間を借りて暮した。そこで、この友人が編輯する文學界（以前の）秋期附錄のために一つの文章をも書いた。が、そこには未だ曾て經驗したことも無いほどの寂しい思ひをした。

――自分に妹の一人もあつたなら、……星野氏とそのよい妹とに別れて牛込の方に歸りながら、先生はこの樣な想念を抱いたことに驚いた。それは、五人もある姉弟の一番末の弟に生れた先生には今までにつひ、思つても見たこともない樣な想念であつた。

"How shou'd I your true love know
From another one?

＊ 全集 9—593

るやうな氣がした。』＊——そこには北村透谷がある。こゝに戸川秋骨がある、馬場孤蝶があると數へることが出來、また、同じ學校を敎へてゐる星野天知といふやうな人まで、先生の眼界にあらはれて來た。一日は一日より狹い彼の心が押しひろげられて行く樣にも感じられるのであつた。

——『その土手の上の小徑で、捨吉に自分の通つて行く麴町の學校を胸に描いて見ることもあつた。彼は吉本さんの雜誌を通して、略あの學校を自分の胸に浮べることが出來るやうに思つた。雜誌の中に出て來ることも、いろ〳〵だ。一方にはプロテスタントの精神の鼓吹があり、一方には暗い中世紀の武道といふやうなものゝ紹介がある。一方には矯風と慈善の事業が說きすゝめられ、孤兒と白痴の敎育や救濟が叫ばれて居るかと思へば一方にはまた眼前の事象に相關しない樣な高踏的な文字が並べられて居る。丁度あの雜誌の中に現はれて居たものは、そのまゝ學校の方にも宛はめて見ることが出來た。斯うした意氣込の強い雜駁な學問の中が、捨吉の胸に浮んで來る麴町の學校だつた。すべてが試みだ。そして、それがまた當時に於ける最も進んだ女の學問をする場所の一つであつた。およそ女性の改善と發達とに益があると思はれるやうなことなら、假令いかなる時代といかなる國との產物とを問はず、それを實際の敎育に試みやう

＊ 全集 9—589

た學問を資本にして、多くの他の青年がまだ親がゝりで專心勉强して居るやうな年頃から、」＊こんな職業にも従はなければならないのだ、と思ひ決めたのであつた。

しかし、この沈んだ心の底に燃える、學藝への思慕は、先生をして一切のことを忘れさせた。——自分の力に出來るだけのことをして、その傍、獨りで學ばうと志した。『そのためには年長の生徒でも何でも畏れず臆せず敎へやうとした。敎へる相手の生徒がいづれも若い女であることは言へ、それが何だ。』＊と先生は思つた。そして先生は、始めて恩人の家を離れて、牛込の方の下宿の離れ座敷の一つに、小さいながらも自分の巣を見つけたのであつた。

「牛込の下宿から麹町の學校までは、歩いて通ふと丁度いゝ程の距離にあつた。崩壊された見附の跡らしい古い石垣に添ふて、濠の土手の上に登ると、芝草の間に長く續いた小徑が見出される。その小徑は捨吉の好きな通路であつた。そこには樂しい松の樹蔭が多かつた。小高い位置にある城郭の名殘から濠を越して向ふに見える樹木の多い市街の地勢の眺望は一層その通路を樂しくした。あわたゞしい春のあゆみは早や花より若葉へと急ぎつゝある時だつた。捨吉は眼前に望み見る若葉の世界を、やがて自分の心の景色として眺めながら歩いて行くことも出來

＊ 全集 9—593

先生の身を寄せてゐる恩人の、家のさびしい留守宅の庭も、——『庭の樹木も、一度あの白い綿の様な雪で埋められたかと思ふと、一晩のうちにそれが溶けて行つて、新しい生命の芽が餘計にその後へあらはれて來た。おつつけもうその庭も花と若葉の世界に變らうとしてゐた時だ。時々屋根の下を通り過ぎる溫暖い雨の音を聞きながら、……』＊先生は四月の來るのを待つた。

それは、先生が巖本氏の經營する私立明治女學校に、英語と英文學の初歩を敎へる樣になつたことであつた。——吉村の祖母さんはそのために新らしく袴や羽織を用意してくれた。そして言つた。

「女の子を敎へるといふのが、あたいは少し氣に入らない。」

——それは、先生にも氣になる言葉だつた。……忘れやうとして忘れることの出來ない羞恥と苦痛と疑惑と悲哀とは青年男女の交際から起つたのではなかつたか。しかし『彼が自分を延して行くといふことの爲には、先づ糊口から考へて掛らねばならなかつた。そのためには僅か

＊全集 9—589

た。――二人の深い交りは、この日に始まつた。

先生は、大川端の、吉村氏の留守宅の方に机を置いて、透谷の居る東漸寺に行き、また築地の方にゐる戸川氏・本郷にゐる馬場氏等と互に往來した。しかし、若いものを惠む樣な、暖い光はまだ何處からも射して來なかつた。殊に、早く世帶を持ち子を持つたといふ樣な透谷には艱難な日が迫つてゐた樣であつた。彼は、しかし、側にある刻煙草の袋を引寄せ、それを鉈豆の煙管につめて喫み〳〵、元氣よく話した。

――そんな時に、先生には、齷齪とした自分を嘲り笑ひたいやうな心が起つて來るのであつた。もつと自らを出しきつたなら、といふ心が起つて來るのであつた。そして、何か斯う酒の香氣でも嗅いで見たらといふ心さへ起つて來たのであつた。――戸川氏とある蕎麥屋の部屋の片隅に、五勺の酒を註文して笑はれながら、はじめて酒といふものを飲んだのもこの當時のことであつた。しかし、そこにも先生の沈んだ心は、酒によつて更に深く沈んで行く樣なものであつた。

『延びよう〳〵としてもまだ延びられない、自分の內部から芽ぐんで來るものゝために胸を壓されるやうな心持で、捨吉はよく吉本さんの家の方へ飜譯の仕事を分けて貰ひに通つて行つた。その日まで彼が心に待受け、また待受けつゝあるものと、現に一步踏出して見たこの世の中とは、何程の隔りのものとも測り知ることが出來なかつた。何時來るとも知れない樣な先の方にある春。唯それを翹望する心から、せつせと怠らず支度しつゝあつた彼のやうな靑年に取つては、ほんとうに自分の生命の延びて行かれる日が待遠しかつた。』*

――その心から、先生は自分の關係し始めた雜誌の中に北村透谷を見つけた。その心から先生は、堅い地べたを破つて出て來たこの人の若々しさを尊いものに思つた。――そして、巖本氏の紹介で、此時、高輪東漸寺の境內に住んでゐたその人に逢つたのだつた。當時先生は、近視眼のためも徵兵檢査に乙種國民兵に編入された二十一歲。透谷はもうそこに長女英子を持つといふ樣な二十五歲であつた。

先生は、そこに彼の眼を見た。その深い瞳の底には何か燃えてゐるかと思はせる樣な光のある瞳だ。眉を見た。そこにはいろ〳〵の處を通越して來たらしい、その閱歷の複雜さが思はれ

* 全集 9―569

先生は帳場の臺の上から恩人の顏を見て言つた、そして岩本さんからの手紙の意味を切出した。横濱を去つて、自分の小さな生涯を始めて見たいと言出した。さしあたり飜譯の手傳ひでもして見たいと言出した。それにはあの先輩の經營する雜誌社から月々九圓ほどの報酬を出さうと言つて來て居るとも附たして話した。

吉村氏は、さも失望したらしい表情を見せた。しかし、若いものの、若い心をそこにも見るといふ風で、遂にその願ひを許したのであつた。

『自分で自分の小さな生涯を開拓するために初めての仕事をあてがはれて行く先生の身に取つては、涯も無く廣々とした世の方へ出て行かうとするその最初の日のやうでもあつた。』＊

——麴町の住居に、巖本氏は居た。そして、氏の主宰する「女學雜誌」の爲の、飜譯の仕事を出して呉れた。そして先生は、束髮に紅い薔薇の蕾を挿してゐる樣な巖本夫人や、「小公子」の譯者若松賤子女史やをそこに見た。

＊ 全集 9—562參照

うとする彼の心は、勢ひこんだ芽のやうなものであつたが、一歩踏出すか踏出さない、まるで日に打たれた若葉のやうに萎れた。假令僅かの暇でも、彼はそれを自分のものとして何か蘇生るやうな思をさせる時を欲しかつた。』＊

――彼は、そこに、內證で自分の風呂敷を解いた。そして、東京から持つて來たテインの英文學史を帳場の机の下に潜ませた。

「へえ、十六錢の箸箱が一つ。」

よし來た！　と、それを帳面につけて置いては、またそれに取ついた。

それにしても周圍の空氣は、先生に、不似合な奉公を、益のない骨折を思はせる様なものであつた。――何とかして、自分の氣質の伸びて行くことを考へねばならなかつた。

求める處には、その道も開けて來た。先生は、遂に、先輩、岩本善治氏からの、待佗びた手紙の返事を受取つた。……然しこの手紙をそこに持出すのには骨が折れた。

「小父さん、僕は御願ひがあります。」

＊ 全集 9―552

あつた。實に勝手の違つたその周圍の中に、先生はまづ自分の身の置き處から見つけてかゝらなければ成らないのであつた。

「いらつしやい――」

と力を籠めて呼んで見る捨吉は、店頭に並べてある賣物の鏡の中に自分の姿を見た。皆角帶、前垂で、お店者らしく客を迎へてゐる中で、全く書生の風俗が、卷きつけた兵兒帶が、その玻璃に映つてゐた。實に、成つて居なかつた。』*

……やがて蒸々とする恐ろしい夏の熱がやつて來た。疲れた。先生は、店の腰掛けの上にともすれば死んだ樣になつて腰掛けてゐた。

『心の糧にもしばらく捨吉は有付かなかつた。身體のいそがしい小父さんに帳場を讓られてから、彼は眞勢さんと交代で賣場を記入する役廻りに當つたが、ある品物をいくらで仕入れていくらに賣れば、いくら儲かるといふやうなことに、ほと〳〵興味を有てなかつた。帳場は櫓のやうに造られて、四本の柱の間にある小高い位置から店の入口の方まで見渡すことが出來た。生存の不思議さよ。あの學窓を離れて來る頃に、斯うした帳場の前が彼を待受けようとは奈何して豫期し得られだらう。膚々として斯の世へ出て行か

* 全集 9—545

『――小父さんから姉さんから下女までも動いて居る中で、默つてそれを見てゐる譯には行かなかつた。考へを纏めるために、彼は茶の間の緣先から庭へ下りた。學校を濟して歸つて來て、復た箒を手にしながら書生としての勤めに服するのも愉快であつた。新らしい楓の葉が風に搖れて日にチラ〳〵するのを眺めながら、先づ茶の間の横手あたりから草むしりを始めた。お母さんの上京以後、兎角彼に氣まづい思をさせる樣になつたのは大勝の養子の一件だ。しかし小父さんを第二の親のやうに考へ、長い間の恩人として考へる彼の心に變りはなかつた。自分は自分の力に出來るだけのことをしよう、その考へから、垣根に近い乙女椿の根元へ行つて蹲踞んだ。青々とした草の芽は取つても取つても取り盡せさうも無かつた。茶の間の深い廂の下を通つて、梧桐の幹の前へ立つた時、小父さん達の後を追つて手傳ひに行かうといふ決心がついた。』＊

さうだ、行かう――その考をお婆さんに話すと、先生はテインの英文學史の一冊を風呂敷包の中に潜ませて、……横濱のその家の方へ出かけて行つた。そこには、あたかも彼を待ち受けて居たかの樣に、悦ばしさうに彼を見る恩人の顏があつた。

『なにしろ一錢、二錢から取揚げるんだから。』――それは、さういふ雜貨店といふ樣なもので

＊全集 9—535

『——捨吉に言はせると、自分の前にはおほよそ二つの道がある。その一つはあらかじめ定められた手本があり、踏んで行けば可い先の人の足跡といふものがある。今一つにはそれが無い。なんでも獨力で開拓しなければ成らない。彼が自分勝手に歩き出さうとしてゐるのは、その後の方の道だ。言ひがたい恐怖を感ずるのも、それ故だ。』*

新らしい世界は自分を待つてゐる。——さう思つて見ながらも、經驗のない青年の心はそこに震へた。學窓を離れて大川端の家に歸つて見ると、先生は、この吉村の屋根の下では、未だ遭遇したこともない様な動きの中に立たなければならなかつた。それは話のあつた、横濱のある店を引受けて、主人も細君もがその方へ出掛けやうとしてゐたので。……先生は、その混雜の中で、學校の方から持つて歸つて來た卒業證書を吉村氏に見て貰つたのであつた。

潮でも引いて行つた後の様な靜けさが、この混雜の後に殘つた。——その留守宅の庭にいらだゝしい初夏の草木の色が映つて來た。

* 全集 9—581

夜の海

横濱東京及び・漂泊の旅時代（二十一歲――二十二歲）

『春を待つ心は、嵐を待つ心だ。――』*

これは、「樹木の言葉」の中に見る言葉だが、……あの春に先驅して來るはげしい嵐が、若樹の枝を搖すぶりたてるのはいたましい。塙々と暗い空を走りゆくのは怖ろしい。――先生を、あの夜の海の暗憺たる岸邊に、行詰らせてしまつたのも、その暗鬱な情熱の嵐であつた。

＊ 全集 11―698

二十五歳

思ひとを殆したと言つてゐられる。しかし、そこにこそ、新生の翅望は常に掲げられる處のものではなかつたか。……先生は、このかなしい四年間の記憶の校庭の横手にある草地の一角に、同窓生と共に新らしい記念樹を植へた。それは常に若い、生活力の大きい綠の深い楠の木であつた。そして樹の下には一つの石を建てた。そしてその石に忘るべからざるその年を刻んで置いて來たのであつた。

「明治二十四年　卒業生」

實を嗅いで見て、お伽噺の情調を味はつた。それを若い日の幸福のしるしといふ風に想像して見た。』A

さよなら。——

『私は二十の年に明治學院を卒業した。もうその頃は純然たる文學書生として進まうといふ考を抱いて居た。』Bしかし、その決心に行くまでに、先生の若い日の鬱憂はどんなに濃いものであつたらう。……

「白ばつくれるない！」

——そのにがい嘲笑にも、いよ〳〵トボケた顔をして見せてゐた程の苦しさも、また思ひ屈したあまりには、どうかすると裸體でグラウンドでも走り廻りたい様な狂人じみた悩ましさも、そこにあつたのではなかつたか。

若い日のかなしさ。——先生は、玆に、さま〴〵な空想と幻滅と失敗と、後悔と、羞かしい

A 全集 5—530　B 全集 5—532

二十歳。——十六歳の秋から二十歳の夏までを辿つた明治學院の學窓に離れて行く時が先生にも來た。荷物や書籍は既に大川端の家の方へ送つてあつた。先生は風呂敷包だけを抱へて、岡の上に立つ一群の建築物に別れを告げるのであつた。——もう、若い日本も、この前々年に憲法を發布し、前年には最初の帝國議會も開かれてゐたし。若い文學もこの年には早稻田文學を創刊し、また國木田獨歩の「武藏野」が發表されてゐた。

『捨吉は表門のところへ出た。幾株かの櫻の若木がそこにあつた。その延びた枝、生ひ茂つた新しい葉は門の側に住む小使の家の屋根を掩ふばかりに成つて居た。……

風が來て櫻の枝を搖るやうな日で、見ると門の外の道路には可愛らしい實が、そこ〳〵に落ちて居た。

「ホ、こんなところにも落ちてる。」

と捨吉は獨りで言つて見て、一つ二つを拾ひ上げた。その昔、鄕里の山村の方で榎木の實を拾つたり樫鳥の落した羽を集めたりした日のことが彼の胸に來た。思はず彼は拾ひ上げた櫻の

——そんな日の中へ、郷里の方から母が出て來た。兄の借財についての用件で急に上京して來なのであつた。「國を出る時はもうお前、霜が眞白」……母は、そんな風に言つて見せながら、十年ぶりで漸く見ることが出來た様なわが子の方へ、……「どうかして兄もよくやつて下さる様、捨吉も無事で居りますやうに、毎日左様言つて拜んで居る」と言ひ出す様な人であつた。——哀しい青年の眼ざめ。『誰一人、目上の人達で捨吉の思つてゐる心を知らうとするものも無かつた。……何事も知らないでゐるやうなお母さんに逢つて見て、彼は何時の間にか自分勝手な道を辿り始めたその恐怖を一層深くした。』A

それにしても、學窓と世の中との隔りは——とても、高輪と大河端の隔りどころではなかつた。先生は、その頃になつて漸く、自分がこの學校へ入れられたのは、行く行くは亞米利加へ針製造を研究に行く爲であつて、そして大傳馬町の「勝新」といふ針問屋の娘の養子として、その店に座らせられるためだといふことを知つたのであつた。B——勿論、そのことは弟の獨立を重じてくれた兄の心持によつて破られたが、思ひがけなかつたこのことは、あさましくも先生の頰を深く染めもしたのであつた。

A 全集 9—515　B 全集 5—29（新片町より）

吉村の家は、さま〴〵の事實で、それを先生に教へて見せるといふ風であつた。殊に、小父さんの眼は、そこによく物を言つた。『小父さんの指に光る金と寶石の輝きを見ても何とも思はないか。捨吉、捨吉、どうして貴様は左樣だ——何故、小父さんの後に隨いて來ないか。』A

先生は、また、この家の下に同居してゐた吉村の親族の人を見ることから、斯樣いふ風な心持をも引き出されてゐた。——十八歳で、高輪臺町教會の信徒としてつひ、うか〳〵として受洗したのだとは言つても、そして、その教會の空氣や、禮拜やには今はほと〳〵興味を失つたとは言つても、『何時の間にか彼はいろ〳〵な基督教界の先輩から宗教的な氣分を引出された。その影響はやゝもすれば斯の世を果敢なみ避けやうとするやうな隱遁的な氣分を引出した。その影響は又、小父さんなぞの汗を流して奮闘してゐる世界に對して妙に自分を力のないものとしたばかりではなく、世間に迂いといふことが恥辱ではなくて反つて手柄かなんどのやうにさへ思はせた。斯うした力なさは時とすると負惜みに近いやうな悲しい心持をさへ』B——先生に味はせたのであつた。

A 全集 9—422　B 同 458

來てゐた。その人がなつかしく、その旅の心がかなしく、『段々と考へてゐた幸福の味氣なさがいよ／＼身にしみ／″＼と思ひ知られて來た。一切のものを捨てゝ自分の行くべき道を探せといふ聲が一層はつきりと聞えて來た。』A――しかし、この先生の心持ちは、恩人の濱町の家の中には理解されやう筈もないものであつた。

――此處に、歸つて來ると、まだ書生の身としての勤めもあつた。

『捨吉は庭下駄を脫ぎ捨てゝ勝手口に近い井戸へ水汲みに行つた。まだ水道といふものは無い頃だつた。素足に尻端折で手桶を提げて表門の內にある木戸から茶の間の横を通り、平らな庭石のあるところへ出た。庭の垣根には長春が燃えるやうに紅い色の花を垂れてゐる。捨吉が水を打つ度に、奧座敷に居る人達は皆庭の方へ眼を移した。……』B

書生の仕事に、熱い樂しい汗を流しても、青年の心は樂しまなかつた。「貴樣はそんなところで何を考へてる」と吉村の小父に問はれることがあつても、それを明かに答へることは出來なかつた。

『今の世の中は實業でなければ駄目だぞ。』

A 全集 9—453　B 同 418

思はず捨吉は微笑んで禧しげに友達の顔を見た。ダンテの「神曲」の英譯本だ。捨吉は友達の前でその黑ずんだ綠色の書紙を一緒に眺めて、扉を開けて行くと「神曲」の第一頁がそこに出て來た。長い詩の句の古典らしく並んだのが二人の眼を引いた。

「まだ讀んで見ないんだが、一寸開けたばかりでも何だか違ふやうな氣がするね。」と菅は濃い眉を動かして、「多分君の買つたのと同じだらう。」

「表紙の色が違ふだけだ。」

と捨吉は答へてそれを足立にも見せた。若い額はその本に集つた。』*

また、馬場氏は、その當時の先生の机の傍に、西鶴や、近松を持つて來て見せた。——○○の多い西鶴の文章を、何といふ汚れた書だらうと左樣考へた先生が「一代女」を引割いて捨てたといふ風の話はこの若い友達を笑せたりした。……そして、先生はその窓の處に自分の心を羞ぢて赤くなつた。

「ふるさと」木曾谿に、幼くして別れて來た芭蕉の句碑を、再び振返つて見る樣な日がそこに

* 全集 9—480

生は、その品川の海の見える窓に來てバイロンを聞き、またシエクスピアや、ギヨテやを思つたり。またその窓の下でモォレエの「イングリツシ・メン・オブ・レタアス」から詩人や文學者の評傳を抄譯したりした。

『私が、初めて西洋の詩集を手に入れたのは、ウオルズウォースの詩集であつた。銀座の十字屋に、古本で賣つてあつたので、買つて來て讀んだ。その當時は、近松だの、西鶴だの、それからずつと古い物語類が、飜刻されて世の中へ出るといふ時世であつた。』＊

先生は、湖十の編纂した芭蕉の「一葉集」や古本屋から探し出して來た西行の「選集抄」やそれから兄から貰つた小使で買つた其角の五元集、支考の俳諧十論などの古い和本や、祖母の葬式に一度國へ歸つた折に父の書架から見つけて來た黃山谷の詩集やを、吉村の家の机に行つては讀み、寄宿舍の窓に歸つては戶川氏等と漸くダンテなどをまで讀んだ。

『岸本君、君に見せやうと思つて持つて來たよ。』

と風呂敷包の中から一冊の洋書を取出して見せた。

「買つたね。」

＊ 全集 5—552（新片町より）

ない斯の谷間で彼は堪らなく壓迫けられるやうな切ない心を紛らさうとした。沈默し鬱屈した胸の苦痛をそこへ泄しに來た。張り裂けるやうな大きな聲を出して叫ぶと、それが淋しい谷間の空氣へ響き渡つて行つた。

一羽の鳥が薄明るく日光の射し入つた方から舞ひ出した。彼はそこに小高く持上つた岡の裾のやうな地勢を見つけた。その小山へも駈け登つて、青草を踏み散らしながら復たそこで力一ぱい大きな聲を出して怒鳴つた。』＊

そこには——學校の方に、日課を勵む心は失はれて來た。そして唯自分の好める學科にのみ心を傾け、愛されてゐたすべての人に背を見せ、友達の中にも僅かな人としか口を利かないほどに默し勝にのみ時を送る樣になつた。戸川秋骨、馬場孤蝶の二氏などが、その僅かな中の人であつた。

時は、明治文學の曙といふ樣な時であつた。二葉亭四迷氏によつてツルゲニエフの「浮雲」「あひびき」などが譯されて青年の血を熱くしたのもこの頃であつた。——若い瞳は學院の書架にも新らしい本屋の店頭にも輝いた。そして、當時はもう吉村の家を離れて寄宿舍に來てゐた先

＊ 余集 7—406

は眼が覺めた。曾て彼を仕合せにした事はドン底の方へ彼を突き落した。一時彼が得意として身に着けた服装なぞは自分で考へても堪らない程厭味なものになつて來た。良家の子弟を模倣して居た自分は孔雀の眞似をする鴉だと思はれて來た。彼が言つた事、爲た事、考へた事は、すべて皆後悔の種と變つた。』*

春に先つてやつて來る深い憂鬱――それは少年の日の終りをつげる日の中に破れ、溢れてしまつたのであつた。

『――その足で、捨吉は講堂の前から緩漫な岡に添うて學校の表門の方に出、門番の家の側を曲り、櫻の樹かげから學校の敷地について裏手の谷間の方へ阪道を下りて行つた。一面の藪で、樹木の間からは朽ちかゝつた家の屋根なぞが見える。勝手を知つた捨吉は更に深い竹藪について分れた細道を下りて行つた。竹藪の盡きたところで阪も盡きてゐる。彼はよくその邊を歩き廻り、林の間に囀る小鳥を聞き、奥底の知れない方へ流れ落ちて行く谷川の幽かなさゝやきに耳を澄ましたりして、時には御殿山の裏手の方へ、時にはずつと遠く目黑の方まで獨りで歩きに出掛けたことがある。四邊には人も見へなかつた。誰の遠慮も

* 全集 9—395

ンデミオン」を書かうとさへ思つた。』＊

——それは、快活な心であつた。そしてこの青少年はその周圍に多くの人々の愛情をあつめた。……彼は學校でも最も年少なものゝ一人ではあつたが、入學して二年ばかり間は級の首席を占めてゐた。それも得意だつた。そしてすべての人から好く思はれ、すべての人から愛されたいと思つた彼は、そこに滿足して、その胸の上に制服の金釦を光らせながらそよ〳〵と吹いて來る心持よい朝風の中を、夕風の中を歩き廻つた。そして、そこにはまた長いこと彼の身內に續いて來てゐた少年らしい頑固な、女といふものに對する無關心を、撫で柔げられた樣な異性の深切にも心を誘はれる夕方もあつた。そして、彼の足はよくこの姉らしい人の許に向いて行くのだつた。

しかし、——『儚い夢はある同窓の學友の助言から破れて行つた。彼は自分と繁子との間に立てられて居る浮名といふものを初めて知つた。あられもない浮名。何故といふに、其時分の彼の考へでは少くも基督敎の信徒らしく振舞つたと信じて居たからである。繁子と彼との交際は若い基督教徒の間に行はるゝ青年男女の交際に過ぎないと信じて居たからである。けれど彼

＊ 全集 9—394

學校へ入つた當座、一年半か二年ばかりの間、捨吉は實に浮々と樂しい月日を送つた。血氣壯んな人達の中へ來て見ると、誰も左樣注意深く彼の行動を監督するものは無かつた。まるで籠から飛出した小鳥のやうに好き勝手に振舞ふことが出來た。高い枝からでも眺めたやうに斯の廣々とした世界を眺めた時は、何事も自分の爲たいと思ふことで爲て出來ないことは無いやうに見えた。學窓には、東京ばかりでなく地方からの良家の子弟も多勢集まつて來てゐて、互に學生らしい流行を競ひ合つた。柔い黑羅紗の外套の色澤、聞き惚れるやうな軟かな編上げの靴の音なぞは奈何に彼の好奇心をそゝつたらう。何時の間にか彼も良家の子弟の風俗を學んだ。彼は自分の好みによつて造つた輕い帽子を冠り、半ズボンを穿き、長い毛絲の靴下を見せ、輝いた顏付の青年等と連立つて多勢娘達の集る文學會に招かれて行き、プログラムを開ける音がそこにもこゝにも耳に快く聞える處に腰掛けて、若い女學生達の口唇から英語の暗誦や唱歌を聞いた時には、殆ど何もかも忘れて居た。樂しい幸福は到るところに彼を待つてゐる樣な氣がした。彼は若い男や女の交際する場所、集會、教會の長老の家庭などに出入し、自分の心を仕合せとするやうな可憐な相手を探し求めた。物事は實に無造作に、自由に、すべては意のまゝに造られてあるやうに見えた。一足飛びに天へ飛び揚らうと思へば、それも出來さうに見えた。あの爵位の高い、美しい未亡人に知られて、一羅政治舞臺に上つた貧しいヂスレイリの生涯なぞは捨吉の空想を刺戟した。彼は自分でも行く〳〵は「エ

『まあ捨吉も精々勉强しろよ。——今に叔父さんが貴樣を洋行さしてやる。』『左樣ともサ。洋行でもして馬車に乘るくらゐのエラいものに成らなけりや捨吉さんも駄目だ』A

先生は、早くそんな言葉を吉村の小父さんや、お婆さんの傍に聞きつけてゐたのである。

新らしい學校は、芝白金の丘の上にあつた。——その綠の樹に圍まれて、高い丘の上にあるといふことまでが、先生を樂しませ、得意にした。それは、まだ東京市内には電車といふものも無い頃であつた。學校から濱町の家までは凡そ二里ばかりあるが、それ位の道を歩いて通ふことは一書生の身に取つて何でも無かつた。先生は『人形町の水天宮前から鎧橋を渡り、繁華な町中の道を日影町へと取つて芝公園へ出、赤羽橋へかゝり三田の通りを折れまがゝ』Bそして聖坂へと取つて登つて行き、また歸途は『岡つゞきの地勢に渉つて古い寺や墓地の澤山にある三光町寄の谷間を迂廻することもあり、或は高輪の道を眞直に聖坂へと取つて、それから遠く下町の方にある家を指して降りて』C行くといふ風にして、この學校に通つて來た。

A 全集 9—414　B 同 439　C 同 409

部に造りつけた座敷牢の格子がある。……そこが、精神の美しい、正直な、愛國の學者――先生の父なる人の、生涯の終りを終つた處なのであつた。

『「慨世憂國の士をもつて發狂の人となす、豈に悲しからずや」とはそこであなたの最後に書かれた言葉であつたとも承はりました。平田派の學説に深く心を傾けられたといふあなた、古史傳の上木の費用を補はれたといふあなた、佛教といひ基督教といひそれらの外來の思想を異端とせられたあなた、「蟹の穴ふせぎとめずば」の歌を詠じて洋學の國を傷くることを諷されたあなた、――』*

先生は後年、航海記「海へ」の中に、――當時の父の心を追想して、呼びかけてゐる事實がそれであつた。

しかも、子の心も、明治も若い――時代の心も、「父」に反逆する空氣の中に置かれてゐた。……十六歳、吉村一家と共に銀座より日本橋濱町に移ると間もなく、先生は神田の共立學校に轉じ、四月には更に外國語を深く修める爲に基督教主義の、明治學院に送られる樣に成つた。

* 全集 10―80

妙なものですね。毎朝お堀ばたで行き逢つたといふだけで、口をきいたこともなく、名前も知らないやうな人が、こんな感化を私に殘して行きましたよ。』＊

美望と崇拜と——柔いアンビツシヨンは、どんなにこの少年の頰を熱くしたものであらう。學んでも學んでも、渴いた苔の水を吸ふ樣に飽くことを知らない當時がそこに有つたのであらう。そして夕ぐれに至る過度の勉强は、遂に七個月の餘を患む樣な眼病をも持つて來た。故鄕からは歸國を言つて來たが、死すとも勉學を廢さずといふ樣な手紙をそれに書いた。——まことに若い日であつた。

しかし、此處には子の時代が來始めてゐた樣に、彼處には父の時代が暗い終末を持つて來てゐた。——先生十三歲の終りには、旣に鄕里に於て父の暗い死があつたのである。しかも、少年の先生にとつて、未だこの「父」の精神「父」の時代を考へて見る餘裕はなかつた。少年は、たゞ暗然として父の逝去を知つた。その事實を知るに止つた。そして、その死の方への歸國も許されなかつた。……それ程に少年とされ、また、少年でもあつた日の中の出來事であつた。

——靑い深い竹藪がある。竹藪を背にして古い米倉がある。木小屋がある。この木小屋の一

＊ 讀本 2—179

が少年の心をそゝつて、』A みんなは、それを爭ふ様にして買つて來るといふ風であつた。

『僕が二度目に就いた英語の先生といふ人は字引をこしらへて居たよ。面白い發音の仕方で、まるで日本外史でも讀むのを聞いてるやうだつけ。それでも君、他の生徒があの先生はなか〳〵えらいなんて褒めりや、自分まで急に有難くなつたやうな氣もしたつけ。』B……それも、その當時のことであつたらう。そして、大學入校の希望をもつてまづ、今の錦城中學の前身の三田英學校に通學する様になつた。

『私は英語や歴史や地理の本を小脇にかゝへて道を歩くこともめづらしいほどの年頃でした。まだそんな少年でした。銀座にある小父さんの家から學校通ひをしましたが、毎朝のやうにお堀ばたのところで行き逢ふ一人の學生がありました。私なぞよりずつと年上の學生で、きまりで左の肩をあげ、すこし首を傾げながら、向ふからお堀ばたのところを歩いて來るのでした。

どうして私がそんな知らない人に眼をとめて見るやうになつたかと言ひますに、その年上の學生の様子には何となくありがたい所があつたからです。私なぞの讀めない本が讀めるといふことも美しかつたのです。そこで私は、眞似るつもりもなくその學生を眞似て、自分でも左の肩をあげたり、すこし首を傾げたりして歩いて見ましたが、いつの間にか知らない人の癖が、私に移つてしまひました。

A 全集 9—472 B 全集 9—473

られたものでありましたが、漢學はむしろあなたが自分の子供にまで勸められたものであつたと存じます。小學校を卒へる頃、私は他の少年と同じやうに、英語を修めやうと致しました。私は早や自分の意のまゝに動き始めやうと致しました。その時のあなたの驚き——私のために心配して下すつたあなたの心は、私は子供心にもあなたから頂いたお手紙でそれを感ずることが出來ました。』＊——

私は早や自分の意のまゝに動き始めやうと致しました。——若芽は、遂に褐色の苞を破つたのであつた。

明治十七年、先生十三歲の時であつた。小學校ももう終りに近いといふその日の中の、若い心で、……そこにはその父も遂に、許して來た洋學——英吉利の言葉を學びはじめたのであつた。海軍省の官吏石井其吉氏が最初の教師であつた。この教師は三十錢といふ樣な月謝で、先生にパアレェの萬國史あたりまで教へて呉れた。『初めてナショナルの讀本が輸入されて、十字屋の店頭なぞには大きな看板が出る。その以前から行はれたウイルソンやユニオンの讀本に比べると、あの黃ばんだ色の表紙、飽きない面白い話、澤山な挿畫、光澤のある紙のにほひまで

＊ 全集 10—76(海へ)

新　樹

日本橋區濱町及明治學院時代（十三歳——二十一歳）

「父上。」
私が少年の頃に早く御膝下を離れたのも、あなたの御思召によつたことでした。私はあなたから「三字文」、「勸學篇」、「孝經」、「論語」なぞの素讀を受け、東京に遊學する身と成りましてからも數寄屋橋側の小學校に通ふかたはら、あるひは姉の夫から、あるひは其他の人々から、「孟子」や「詩經」なぞの素讀を受けました。佛教と耶蘇教とはあなたの極力排斥し、敵視せ

御殿山

臆病さと自尊心と、また反抗心と野心と——それは、この青葉を吹き出す前の角ぐんだ芽の中にあるものゝ様に、暗鬱な惱ましい力を罩めてこの黒い家の中に育つたのであつた。鐵格子から、陽の光の射し込む壁の厚い家の書生部屋の中に。……

あつた。しかし、先生のそこには若い日が來てゐた。もう日本にも、銀座の大倉組の角には白い強い光のアーク燈が輝き、尾張町の角の日々新聞社の前には花瓦斯が點き、また中村正直氏譯の「ナポレオン小傳」といふ樣なものが、少年の手に開かれる日が來てゐたのであつた。——先生は、それを三疊の間の、例の日光のさし込む窓の下に持つて行つて讀みつゞけながら、あの人傑の青年時代に心を動かしては感激の涙を流す樣に成つてゐたのである。

その頃の日の中に、この黑い家には可愛らしい赤兒が生れた。そして、土藏の中の部屋からはお婆さんが子供の方へ出て行つて、下婢が寢に來る樣になつた。——其頃の心持を先生は、斯樣な風に語つてゐる。

『私は誘惑され易い年頃になりました。もし私に性來の臆病と、一種の自尊心とが無かつたら早く私は少年らしい好奇心の捕虜と成つたかも知れません。で、私は下婢が傍へ來て樂しさうに歌ふみだらな流行唄などに耳を傾けて、氣は浮々とさせることを感じながら、一方には左樣いふ女と碌々口も利かないほど彼等を憎み蔑視むやうな心を持つてゐました。』*

* 全集 7—460

髪を「散髪」に刈つて來たといふ人であつた。そして吉村の奥の二階の靜かな座敷に、旅の毛布やら荷物やらを解いた。そして、そこに桐の箱に入つた鏡を取出して自分の容姿を正しくするといふ人であつた。

『父は隨分奇行に富んだ人で到る處に逸話を殘しましたが、しかし子としての私の眼には面白いといふよりも氣の毒で、異常なといふよりも突飛に映りました。この上京で私はそれを感じたのです。』*——と先生が、その上京に就て語つてゐる様に、その精神の美しさと正直さは幼い先生を不安にさへ思はせる處があつた様である。ある日は、先生の友達の家を訪ねて、手土産の蜜柑をツカ〳〵とその家の佛壇へ供へに行つたり、ある日は、學校に近い路上の石を危いからと、お堀の中に捨てたり、といふ風であつた。……そして、先生を連れて以前の尾張の殿様といふ人の前に出たり、久しぶりの上京とて、舊い知人を訪ねたり　亡くなつた人の墓參をしたりして間もなく鄕里の方へ戻つて行つたのであつた。

先生は後になつて、父親がこの上京に樂しまなかつたといふことをきゝつけたのであつたそれは、愛兒の先生がどんなに悅ぶかと思つて上京したのに、子供には失望したといふ嘆息で

* 全集 7—456

て、自分で見たまゝを畫にしようと骨折つたものでした。小父さんに勸められて私は左樣いふ小さな製作の一つを國の方へ送りました。父から來た手紙の中には、「貴樣は繪畫を學ぶが好からうと思ふ」といふ意味のことを書いてよこしたことも有りました。』A

奥座敷の緣先には夕、キの池があつた。そしてそこには澤山の金魚が居た。先生は、その水を替へたりする時には裏の井戸から、漸く持てる樣になつた——半分ばかり水を入れた手桶を運んで來たり、また、その狹い裏露路を小鳥の樣に步き廻つたり、その奥にある活版屋の裏に落ち散つてゐる細い活字を、丁度故鄉の山の方で青い斑のあるあの橿鳥の羽を見つけた時の樣な心持で拾つたりしたのであつた。

父の上京。——

『父が私に逢ふのを樂みにして一度上京しましたことは、私に取つて忘れ難いことの一つです。何故かと言ひますに、それぎり私は父には逢ひませんから。』B

父は、その旅で、——途中名古屋で始めて、長くして紫の紐で結んで下げてゐたといふ樣な

A 全集 7—446　B 全集7—455

やん」と言ふ樣な友達も出來て、赤煉瓦の學校の方も、そこに行く途上も樂しかつた。

「お婆さん、霜燒が疼い。」

先生はまだ夜中にそんなことを言つて泣き出す程に幼なかつた。しかし、お婆さんは、この少年にも、行儀といふものを見覺えなければ成らないと言つて、種々な細かい注意を拂ふことを敎へた。そして、先生に、客を送迎したり、下駄を直し茶を運んで行く、少年らしいつとめをさせた。

それにしても、この心の暖い家の空氣は、先生を自由の才能の方へ伸び立して行つた樣である。銀座へ移つて二年目に成る頃には、先生は柔い鉛筆と畫學紙を持つて、築地の居留地の方までも鉛筆畫を描きに出掛けた。——

『お婆さんは私が何をするかと思つて、ある日、私の行く方へ一緒に歩いて來ました。私はお婆さんを橋の畔に立たせて置いて、築地邊の景色を寫しました。私は又、參謀本部の方まで行つて、あの建物を寫した鉛筆畫を一枚作りました。それは粗末な子供らしいものでありましたが、兎も角も、御手本に據らない

と溫い心を見つけたのであつた。

黑い家――鼈甲屋、時計屋などのある銀座の裏通りの町の中に、黑い土藏造りの、鐵格子を窓に篏めたといふ樣なのが、その溫い心の家なのであつた。先生は、この家で主人のことを叔父さん、隱居のことをお婆さん、年の若い細君のことを姉さんと呼び做ふほどの親しさの中に置かれた。

往來に面した鐵の窓のある三疊許りの小部屋――先生はそこへ鎗屋町からの机を運んで來、抽斗の附いた本箱を壁によせて置いた。

「溫良恭謙讓」

「勉强」

「儉約」

――上京の折に父が餞別に書いてくれた座右の銘なぞをその抽斗から取出て、その窓の下に讀んで見たり、また、その机の上で、學校の作文でも書くやうにして國にある父へのたよりを書いたり、また、ふるさとのことを言つて來る父の手紙を開いたりする樣に成つた。……「六ち

先生の心は、自然と屋外の方へ向ふ様になつた。そして學校の往來に逢ふといふ様な友達が急に親しいものになつて來た。そこには同級の女の友達などを眺めながら、『氣の昂つた時計屋の娘より、ショゲた官吏の娘の方を可哀さうだと思つた』といふ様な感情を起し、また、學校から歸つては、そこにある大人の婬蕩の空氣を侮蔑する心持をして居た。

しかも、この色の淺黑い、痛ぎすな、男性的で、それに驚くほど氣の短い性質を持つてゐた人の傍に一年ばかりゐる内に、先生は、この人の「早く、早く、」で終に青くなつてしまつた。早く煮て、早く食つて、早く膳を片附けて仕舞ひたい……そんな人の癖に追ひ立てられて、生煮のものも丁度には喰べられない始末で。

國から出て來てこのさまを見た二番目の兄は、この家の中に先生を殘して置くことを好まなかつた。そこで、先生は、姉や兄達の懇意な同郷の人で、銀座四丁目に住んでゐた吉村忠道氏の家の方へ引取られて、そこで勉强をつゞける様に成つた。それが先生の十一歳の秋頃であつた。

吉村氏は、書生を愛する心の深い人であつた。——そして、先生はこゝに再び、思はぬ深切

こにその意味を悟り、また姉の家の中の氣分を感じたのであつた。後者は小さな姪の惡戲によるものであつた。

『ある日、私が學校から歸つて來て自分の机のところへ行つて見ますと大事に〳〵して置いた新しい洋綴の帳面には目茶苦茶に何か書き散してありました。斯の亂暴な行ひは直に小さな姪のいたづらと知れましたが、そのために自分の忿怒を奈何することも出來ませんでした。私はその帳面を引裂いて了ひました。』*

姉の居た家には力丸元長といふ人の親娘が這入つた。そして十歳の先生はこの禿頭に細いチヨン髷を結つて居た老爺さんとその娘の獨身の姉さんとが、「碁會所」の看板を掛けたその家に身をよせることになつた。——一人東京に殘された少年は、同じ家の中ながらに、そこにはもう以前のやうな注意を拂つて呉れる人を見ることは出來なくなつた。それをはつきりと感じた。そして、この冷淡な周圍の中に、早く、自分の少年らしい感情を隱す樣になつたのである。

* 全集 7—432

たり、またある日には海の見える座敷の方へ連れられて海苔の香氣を憶へたのも……この當時流行の臘虎の帽子を冠つてゐる義兄の愛情によつたものであつた。

また、先生はこの家の中に、素朴な自分の田舍と違つた音曲の世界を見つけた。祖母は綺麗に片附けた下座敷へ琴を取出し、先生より三つ下の甥はもう謠曲を歌ひ出してゐた。二階座敷では賑かな酒宴もあつて、そこには俗謠が唄はれたりした。

しかし、斯樣した寬濶な家庭の中でも、姉は物のキマリの好いことを悅んで、それを先生に話して聞かせた。

——かくて、先生の少年らしい性質は、そこには殆ど忿怒といふものを知らなかつたほどにして障りなく伸びて行つた。しかし、そのめぐまれた年月は長くは續かなかつた。一年餘、……姉の家族は、白い髮の祖母さんから子供まで、みな買切の人力車に乘つて、故鄕の方へ歸つて行つて仕舞つたのであつた。——一つの暗い記憶と、たつた一つの口惜しさをおもつた小さい事件とを殘して。

前者は、姉が先生を、——店頭に暗い暖簾を掛けた家に使に出したことであつた。先生はそ

私が食事の時に茶椀を胸に當てることは止せと言ひましたが、自然についた癖は直さうと思つても容易に直りませんでした。何時の間にか私の茶椀は胸のところに當つて居ました。そこで姉は一計を案出しました。四角に切つた鐵葉の片に紐を著けまして、食事の度に私に掛けさせることにしたのです。

「御飯！」――といふ聲を聞くと、私は客があるか無いかを第一に思ひました。姉の家の人達は兎も角、知らない客の前でブリキを自分の首にかけるほどキマリの惡いことは有りませんでした。全く、ブリキの前垂には私も弱らせられました。でもそのおかげで、カチリと茶椀の音がする度に自分でも氣がついて、着物を汚す癖は直つて行きました。」＊

先生は、やがて、この家から小學校へ通ひはじめた。それは數寄屋河岸にある赤煉瓦の泰明小學校といふのであつた。そしてまた家では、姉の夫といふ人から論語の素讀を受けたりした。――この人は、木曾福島の家の方から東京へ出て來て、一時は大藏省の官吏をしてゐたといふ背の高い、立派な威嚴のある人で、ひどく少年の先生を愛して、閑暇な時には東京の町々だの公園だのを見せに連れて出た。觀兵式を見に行つた日に初めて樽柿といふのものを買つて貰つ

＊ 全集 7—427

めて大きな都會の空氣に觸れ、日頃故郷の方でよく噂の出る姉とも一緒になることが出來たのです。』＊——京橋區鎗屋町、それが姉園子の夫の家、高瀬氏であつた。それは『銀座の裏側にあたる閑靜な町の角にあつて、灰色な圓柱の並んだ、古風な煉瓦造りの一つで』＊あつた。二階には四間ばかりの室があり、その一室の硝子窓から町の家根や物干やが見へる所へ、先生兄弟は一緒に新らしい机を並べ、また夜はその部屋に枕を並べて寢る樣になつた。

『どうだこれがオサシミだ。』

先生が初めてオサシミといふものを口に入れて見たのもその姉の東京の家であつた。しかし先生には、故郷の方で食べ慣れた鹽辛い鮭の方が口に適ふと思つて見た。先生の東京の生活はさうして深い愛情をよせてくれた姉の傍で始まつた。そして故郷の言葉の「わりや」「おれ」を改めて、都會の少年の樣に「君」「僕」と言ふ言葉を言ひ出したりしたのであつた。

『姉が私の爲に種々と注意して呉れたことは、次の一例をお話しただけで解らうと思ひます。子供の時分に私はよく鼻液が出ました。それを兩方の袖口で拭きましたから、何時でも私の着物には鼻液が干乾び著いて光つて居りました。それればかりでなく、着物の胸のあたりを汚したものです。姉はそれを見て取つて、

＊ 全集 7—425

た。三日四日と歩いた頃には全く方角も解らなくなつた様な處に來てゐた。暗い險しい、大きい峠が來た。もうそこには、全く疲れきつて歩けなくなることもあつた。漸く燈火が見へた。そこはもう中仙道の沓掛であつた。

『何處から馬車に乘つたかといふことも、ハツキリ記憶しません。唯、前の方へ突進する馬車と……時々馬丁の吹き鳴らす喇叭と馬を勵ます聲と……激しく動搖れる私達の身體とがあるばかりでした。』＊――狹い車の上で復た日が暮れた。そして暗い夜の道をこの馬車は走りつゞけて行くのだつた。夜が明けた。上州のある田舍町の中では「梯子乘」をする消防夫の姿を馬車の中から見て行つた。……そして、七日がゝりの旅は終つて、――先生は馬車に乘つたまゝ半分夢のやうに東京へ這入つて來た。そこは萬世橋で、その立場の前の並木の蔭で、人々は馬車を下りたのであつた。

東京。――

『落着く先は姉の家でした。長兄に引連れられて山の中から出て來た私達兄弟の少年は、はじ

＊ 全集 7—423

『行ひは必ず篤敬』

——云々といふ樣な、日頃の教訓を凡帳面な書體で認めたものであつた。

九月の朝の日光が、村の石垣に映つてゐた。先生達はその驛路の名殘を見せてゐる樣な古い家々の門に立ち、また石垣の上に立つて見送つてくれる人々に別れをつげては、暗い杉の木立の側を通つたり、澤を越へたりして故鄕の山を下りて行くのだつた。

「送られつ　送りつ　果は　木曾の秋」

この旅の詩人「芭蕉」の句碑の建つてゐる村はづれ十曲峠の方は、そこにはいよ〳〵遠かつた。……先生の「旅」もまことにこゝに、初まつたのであつた。

道端には、紫の龍膽の花が咲いてゐた。初旅の馴れない草履の紐はその石の多い山路のためによく解けた。それはもう木曾街道であつた。先生は小さな鞄の中に入れて來た金米糖をその路の上でも口に入れては歩きつゞけた。水の珍らしい少年には、木曾川の流れは青く大きかつ

先生も、「ふるさと」の山上に伸び立つて、そこにはもう、九歳の初秋を迎へてゐた。

『東京へ修業に行くんだ』A

これは、父のいひつけであつた。——そして先生は次兄と一緒に東京の方へ遊學する様になつた。次兄は十二歳であつた。

『その日も近づいた頃、銀さんは裏の梨の樹の下あたりに腰かけて、兄貴に東京行の頭を刈つて貰ひました。村には理髪店といふものも無い時でしたから、兄貴が襷掛けで、掛る布も風呂敷か何かで間に合せて、銀さんの髮を短く剪みました。私の方はまだ一向な子供でしたから髮も長く垂下げたまゝで可からうと言はれました。』B

その頃には、例の玄關の側にある機に腰かけて、母は、先生達のために着物や帶やを織つてくれた。そこには先生の爲にも黄八丈の羽織が出來、ヨソイキの角帶が織れた。そしていよいよ出發の日が來た。「今朝は言ふ、そのかはり明日の朝は言はない。」Bそんなことを言つて孫達を傍に座らせて別離の涙を流す祖母もあつた。その晩には、父の書院の方へ呼びつけられて五六枚ほどの短冊に書いたものを餞別として贈られたりした。

A 全集 10—523（ふるさと）參照　B 全集 7—419

九　歳

黑い家

東京市京橋區鎗屋町及び銀座四丁目(九歳——十二歳)

『彼奴は一番學問の好きな奴だで、彼奴だけには、俺の事業を繼がせにやならん。』*

——これが、いつも書籍を一杯振込んで懐を大きくし、白足袋をはいて歩いて居た沈鬱な嚴肅な「學問の人」の父親が、先生に對して懐いてゐた心持だつたといふ。

* 全集 6—15

さうだ、先生のよき恩人「木曾谿」よ。あなたは、本當に、先生の幼き日の道を、早く、今日の輝きの日のために開いたものでこそはあつたのである。

先生は、後年に到つて、尙、この「木曾谿」の中に、また殊にはあの「父」の中に、「父の時代」の中に、さびしくまたかなしく、或は苦しく、その必然の道が早く開かれてゐたのを知らなければならなかつた。また、その父の手に、その父の足にあまりにも似てゐたといふ自身をも知らなければならなかつた。しかも、「木曾谿」よ。それもまた、窮極、先生にあつては、まことの輝きへの出立の道ではあつたのである。

年寄を飼ひましたが、ある時、私は婆さんの大切にして居る寄に煙草の脂をなめさせました。』＊といふ樣にこの話は書き出されてゐる。そしてこの惡戲は非常に婆さんを怒らせた。そして先生もまたその時から、婆さんの家の前は除けて通る程の片意地を見せた。それからはもう、婆さんの方から近づいて來ても、全く口を利かなかつた。それを六十日の餘もつゞけてしまつた。到頭お霜婆さんは弱つて先生の好きな羊羹を持つて仲直りに來たが、それでも以前の樣に口を利くまでには大分骨が折れたといふエピソートであつた。

それにしても、この「木曾谿」は先生にとつてまことに黃金の樣に美しく、水晶の樣に純粹な背景でこそはあつたらう。

『この世では私たちの生涯の經驗といふものは大部分憧れること、失望する事で出來上つている。私たちのこの生活の中でなほ常になつかしく思はせるものは私たちの眞實を失望させなかつた人ばかりである。私たちの黃金のやうに美しい記憶の背景に純白に映つている人達は眞の恩人である。』＊＊

＊ 全集 7—406　＊＊ エレンケイ「フルチン夫人傳」より

を、またその雪の中に、新らしい正月が近づいて、杵の音が「ぺつたらこ、ぺつたらこ」と山の中に響くことの樂しさを、その頃には袖のない猿の着る様な「猿羽織」で雪の中へ出てゆく日の樂しさを、更に夏の夕ぐれに山の下から鳴らして來る御嶽詣りの、「チリン〳〵チリン〳〵」といふなつかしい鈴の音を、また玩具を賣る店もない山の中の子供等には、竹切れも、麥藁も茄子や南爪の蔕も、といふ風に種々の玩具が野にも畠にもあつたといふことをその「ふるさと」の鄙びた言葉も戀しいといふ様に「どうねき」「わやく」などの言葉をもあげて見せられる様な愛情をも、ある日には、あれまでのなつかしさで、私の前に薦めて下さつたあの「木曾の焼米」の青い稻の香ばしい味のことをも、――私は、まだこゝに語ることが出來なかつた。

先生の片意地――その幼年の時に現れたその一つの性質についても、まだ私は書いてゐなかつた。

――それは、お霜婆さんと書きつけられてゐる老婆に關するものであつたが、先生は、この婆さんについては、「隨分可愛がつては呉れたが、その可愛がり樣は、どこか煩いやうなところがあつた」と、そこに不純なものを早く見つけてゐられた樣であつた。『お霜婆の家でも毎

未だに父さんはあの時のことを忘れません。母屋の石垣の下にある古い池の横手から、ひつそりとした木小屋の前を通り、井戸側の石段を馳け登る樣にしまして、祖母さん達の居る方へ急いて歸つて行つた時のことを忘れません。

それにつけても、父さんはある亞米利加人の話を思ひ出します。その亞米利加人がまだ子供の時分に鋸の子を打つた話を思ひ出します。生れて初めて「惡い」といふことをほんとうに知つた、自分で惡いと思ひながら復た棒を振上げ〳〵して鋸の子を打つのに夢中になつてしまつた。あんな心持は初めてだ。さう亞米利加人の話の中に書いてあつたことを思ひ出します。その亞米利加人が母親から言はれた言葉を引いてあれが自分の「良心の眼ざめ」だ、自分の一生の中の、どんな出來事でもあんなに深く長續きのして殘つたものはない、とその話にはありましたつけ。」＊

さあ、私は、此處まで書いて來たが、まだなか〳〵に、先生の「ふるさと」には遠い。私は、まだ、何け擱け、あの山の上に來る冬を、また、風や雪をふせぐために大きな石を載せてゐる屋根の上に踊つて來る雪を、畠も白く、竹藪も寢たやうになるまでに降り埋めて行く雪のこと

＊ 全集 10—481

それにはその子供の泣くのには、強く唇が嚙まれるといふ風で『恐らく斯の兒の强情なところは私の血から傳はつたものでせう』とも書きつけてある。

『ある日のことでした。父さんはお家の裏木戸の外をさん〳〵遊び廻りまして、木戸の處まで歸つて來ますと、高い枳殼の木の上の方に卵でも產みつけようとしてゐるやうな大きな黑い蝶々を見つけました。いろ〳〵な可愛らしい蝶々も澤山ある中で、あの大きな黑い蝶々ばかりは氣味の惡いものです。あれは毛蟲の蝶々だと言ひます。何の氣なしに父さんはその蝶々を打ち落すつもりで、木戸の內の方から長い竹竿を探して來ました。ほら、枳殼といふやつはあの通りトゲの出た、枝の込んだ木でせう。父さんが蝶をめがけて竹竿を振る度に、それが枳殼の枝を打つて、青い葉がバラ〳〵落ちました。

そのうちに蝶々は父さんの竹竿になやまされて、手傷を負つたやうでしたが、まだそれでも逃げて行かうとはしませんでした。そこいらにはもう誰も人の居ない頃で、木戸に近いお稻荷さまの小さな祠から、お家の裏手にある深い竹藪の方へかけて、何もかも、ひつそりとして居ました。それを見ると、父さんはその蝶々を殺してしまはないうちは安心の出來ないやうな氣がして、手にした竹竿で、滅茶々々に枳殼の枝の方を打つて置いて、それから木戸の內へ逃げ込みました。

『ある晩、私は遊友達の問屋の子息と喧嘩して、遲くなつて家の方へ歸つて行きました。叱られるなといふことを豫期しながら、果して家の門を入つて田舍風な小障子のはまつてゐる出入口の處まで行くと、私が問屋の子息を泣かせたことは早や家の方へ知れて居りました。やかましい問屋のお婆こんがそれを言附けに振込んで來たといふことでした。で、私は懲しめの爲に、そのまゝ庭に立たせられました。薄暗い庭から見ると、玄關の方も裏口の方も皆な戸が閉つて、唯小障子の明いたところだけ燈火が射して居る。私は夏梨の樹の下に獨りで震へながら、家のものが皆爐邊に集つて食事するのを眺めました。日頃默つて居る兄の顏などは、私の仕たことについて非常に腹でも立てたやうに、餘計に畏しく見えました。其晩に限つて、誰も救ひに來て呉れるものが有りません。斯の刑罰は子供心にも甘んじて受けなければ成らないやうなものでした。私は皆の夕飯の終る頃まで、心細く立ち續けました。

斯ういふ時に、私の側へ來て言ひ宥めたり、皆に御詫びして呉れたのは、私に附けられてゐた下婢です。目上の兄達が奧の方へ行つた後で、その下婢は私の膳を爐邊へ持つて來て呉れました、……が、到頭其晩は食ひませんでした。』*

これは、先生の二番目の子供が七歲になるといふ頃に筆をとられた作物の中にあるものだが

* 全集 7—368

さう言へば——先生は尙、山上の村落が、いかに水に不自由な處であつて、それ丈に細い流れの谷川の畔も、深い井戸の傍も樂しい處であつたかを、水に關するさまざまな記憶の中に言つて、遂にその生涯の中に常に水を見ることを欲した影響を語つてゐられるし、廣い玄關の側に機を織つてゐた母の姿に、また山上の生活に要する殆どすべてのことを手作りすることを知つてゐた母の姿に、土藏の前に大きな鍵を手にして立つてゐた働くことのすきな母の姿に、——簡素を愛することをいろいろの事で敎へられたといふ影響を語つてゐられる。そして、それらは既に早く先生の思想にまでも這入つて來た處のものでもあるのであつた。

さう言へば、——隣の娘に感じた情熱のかなしさも、辱かしさも、後年『女の子——それは捨吉に取つても良いことと觸れることを好まなかつた問題だ。無關心を續けて來た問題だ——無關心はおろか、一種の輕蔑をもつて對つて來た問題だ。』＊とある處の心持を遠く發した出立ではなかつたか。

また、そこには、にがい記憶の三四も語られてあるのであつた。

＊ 全集 9—588

これもまた、敬畏の裏に深い愛情をこめてゐる「父」に對する思ひ出に從つてゐるものではないか。それにしても、この「ふるさと」に、父を、母を、祖母を、下男の老爺を、下婢のお雛を、石垣の上の家を、家のまわりに見る木々を、鳥獸を、虫を、喰べものを、狐火を、遊戯を……記憶して來た先生の記憶は美しく樂しい。本當に、先生はあの默し勝な唇をも、この「ふるさと」を語ることには、常に開くことを辭じてゐないやうでもある。

『背景といふものがいつでもかなり力強く光景の氣分を捉へてゐるやうに人の環境もその性格のある部分を形造つてしまふやうである。人となりとか其處から生れる働きとかいふものを背景から切り離したものとして考へ得ない。偶然の力は常に人の思想にまで入り込んでゐる。』

これは Nystrom-Hamilton の「エレンケエ」の中にある言葉だが、私は、この「偶然」の力を、「自然」の力として見て、いよいよ、そこに先生のよき今日への歸着を、その出發の中に於ける「必然」の影響として見たいのである。

少年の、かなしい眼はさまされたのだつた。それからの先生は、悪戯好きの學校の友達などから女とのことを言はれたりすると、激しい憤りをまで感ずるほどの心で、漸く、山家の子供らしい荒くれた遊びを好み、次第に家を遠く深い澤の方へ、また寂しい山林の方へ歩きに行きまた竹と半紙で、「するめ紙鳶」といふのを手造りにして村はづれの丘の上に持つて行つて揚げたり、また、强さうな木の尖端を鋭く削つた「ショクノ」(ネツキ)を田甫の土の中に打込んだりして激しく遊びまわる様になつて居た。

先生は、もうその頃には小學校へ通つてゐた。それは永昌寺といふ先生の先祖の建立したお寺の近くにあつたといふ。——しかし、先生が、その著作の中にも談話にも、この「木曾駱」に於ての學校生活についてこの外には、殆ど何事をも語つてゐられないのは注意すべき事實である。

『村の學校へ通ふ様になつてからは、大學や論語の素讀を父から受けました。あの後藤點の栗色の表紙の本を抱いて、おづ〳〵と父の前に出たものです。』*

* 全集 7—407

細長い廂風の小座敷を通り抜けて、上段の間の横手の坪庭の梨の見える處へ行きました。すると極りで、若い嫂が私達を探しに來ました。』A

八歳の頃のことであらう。——先生はこの子供らしい、しかも激しい情熱に三日ばかりも苦められたことを覺えてゐるとも言ひ、また、女といふものに初めて子供らしい情熱を感じた樣な、このお文さんを堅く抱締めたこともあると言つてゐる。

『ある日、私はお文さんに誘はれて隣の家へ遊びに行きました。酒屋の香氣のする庭を通り抜けて、藏造りになつた二階の部屋へ上つて見ました。隣とはよく往來をしましたがそんなに奥の方まで連れられて行つたのは私には初めてゞす。丁度そこへお文さんの兄さんの道さんがやつて來ました。道さんはお文さんや私より二つ三つ年長の少年で、村の學校でも評判な好く出來る生徒でした。

その日まで私は夢中でお文さんと遊んで居て、第三者といふもの丶有ることを知りませんでした。お文さんの部屋で、道さんと一緒になつて見て、それが解つて來ました。私は唯道さんに見られたといふだけで、何となく少年らしい羞恥を感じました。それきり私はお文さんを離れて、今度は道さんだの、それから他の男の兒と遊ぶやうに成りました。』B

A 全集 7—413　B 全集 7—414

られないと言つて、紙を展げて、遲くまで獨りで物を書きました。その蠟燭を持たせられるのが私でしたが私は唯眠くてたまりませんでした。

斯うした嚴格な父の書院を離れて、仲の間の方へ行きますと、そこには母や嫂が針仕事をひろげて居ります。私は武者繪の敷寫しなどして、勝手に時を送りました。母達の側には別に小机が置いてあつて、隣の家の娘がそこで手習ひをしました。お文さんと言つて、私と同年で、父から讀書を受ける爲に毎日通つて來たのです。』＊

——そこには、漸く少年の日が來てゐた。野や、田甫の方へも友達と出て行つて地蜂の巣を見つけたり、小鳥のひどく多い「ふるさと」の空に、また高い樹木の上の方に小鳥の囀るのを聽いたり、馬の尻尾で雀をとる罠をこしらへたり、細い谷川の方へ鰍をとりに行つたりするのだつた。そんな中へ、隣の娘のお文さんも、子供らしい淡紅色の腰巻を出して加つてゐたりした。

しかし、もうそこには、何時の間にか、このお文さんと二人ぎりで隱れるやうな場所を探す樣な先生の、その日も來てゐた。『私達は桑畠の間にある林檎の樹の下を歩き、又は立關から

＊ 全集 7—407

で手製でした。手習のお手本まで、祖父さんの手製でした。』

——先生は、この小さい子供達に呼びかける様な著作＊の中に、「御幣餅」によせて、祖父さん卽ち先生の敬愛の父に就て斯樣いふ風に語つてゐる。

『父の書院は表庭の隅に面して、古い枝ぶりの好い松の樹が直ぐ障子の外に見られるやうな部屋でした。赤い毛氈を掛けた机の上には何時でも父の好きな書籍が載せてありましたが、時には和算の道具などの置いてあるのを見かけたことも有ります。父はよく肩が凝ると言ふ方でして、銀さんと私とが叩かせられたものですが、肩一つ叩くにも只は叩かせませんでした。歷代の年號などを暗誦させました。終には銀さんも私も逃げてばかり居たものですから、金米糖を褒美に呉れるから叩けとか、按摩賃を五厘づゝ遣るから賴むとか言ひました。

「享保、元祿・・・」

私達は父の肩につかまつて、御經でもあげるやうに暗誦しました。

何ぞといふと父が私達に話して聞かせることは、人倫五常の道でした。私は子供心にも父を敬ひ、畏れました。しかし父の側に居ることは窮屈で堪りませんでした。それに父が持病の疳でも起る時には、夜眠

＊ 全集 10—498（ふるさと）

しかし夜の爐邊は先生には樂しかつたらしい。賑やかな晩飯の後にもその爐の中には樂しい焚火が燃えて、夜遲くまで爺やは大きな百姓らしい手で薪を縛る繩をゴシ／＼と綯つたり、軟い藁で先生の穿く草履などを手造りにしてくれながら、狢の化けて來た話、狐火の話、畠の野菜を材料にした謎や、さま／″＼のお伽噺なぞをして呉れるのであつた。――爐邊と言へば、晩秋の朝のそこには芋燒餅といふ蕎麥粉と白い芋の子とで作つた食物があつた。また爐の火で作られるものに御幣餅といふのがあつた。

「木曾の御幣餅とは、平たく握つたおむすびの小さいのを二つ三つぐらゐづゝ串にさし、胡桃醬油をかけ爐の火で燒いたのを言ひます。その形が似て居るから御幣餅でせう。人々は爐邊に集りまして、燒きたてのおいしいところを食べるのです。

お前達の祖父さんは、この御幣餅が好きでした。日頃村の人達から「お師匠さま、お師匠さま」と親しさうに呼ばれて居たのも、この御幣餅の好きな祖父さんでした。

祖父さんは學問の人でしたから「三字文」だの「勸學篇」だのといふものを自分で書いて、それを少年の讀本のやうにして、幼少な時分の父さんに敎へて呉れました。山の中にあつた父さんのお家では何から何ま

この爺やはまた、幼い先生の日の中に榎木の實を拾ひに行くことを教へた。それは屋敷の裏の竹藪の後の方にあつた。風のあつた日の翌朝といふ様な時には拾つても拾ひきれない紅い小さな珠の様な實が落ちこぼれてゐた。また、その木の下に橿鳥の青い斑の入つた美しい羽の落ちてゐるのを拾つたりした。柿や梨のある屋敷を出ても、そこの石垣の處には黄色い木苺の實があつた。村のはづれには「けんぽ梨」といふ木もあつて、高い枝の上に珊瑚珠のやうな實を成らせてゐたが、この實も甘い味がした。山上の空氣は澄んでゐて、木の實はその色を輝した。

それから、——この峠の村の邊には、どつちを向いても深い山と林があつた。そして、山上に遲い夕日がかげつて仕舞ふと、たちまちにさびしい夕闇が迫つて來た。リン、リン、リンといふ鈴の音を立てゝ荷を運ぶ馬が歸つて來る。そしてその行水が始まる頃には、蝙蝠があの黒い翼で飛び出し、村の方からは夜鷹といふ鳥が出て來て暗い空に羽音をたてる。そして少年には怖ろしい夜がやつて來た。……不思議な、チラ〳〵と燃える青い狐火を遠い山の向ふに望むのもこんな夜のことであつた。

で、廣い屋敷の内を歩きはじめた。まづ椿の木の傍にある梨の青い實の下に行つた。また柿、林檎などの植へてある畠の間を通り、味噌倉の前を通り、お雛がよく水汲みに行く大きな井戸について石段を降るとその下には暗い米藏があり、それに續いて薪小屋のある方へも行つて見た。そこには庄吉爺が一日薪を割る言をさせてゐることもあつた、

『小屋に面して古い池が有りました。棚の上の葡萄の葉は青く淀んだ水に映つて居りました。石垣のところには雪の下などが目ばたきするやうな白い小さな花を見せて居りました。そこは一方の裏木戸へ續いて、その外に稻荷が祭つてあります。栗の樹が立つて居ます。栗の花が枝から垂下る時分には、銀さんが他の大きな子供と一緒にあの枝から栗蟲を捕へて來たものですが、それを踏み潰すと、綠色の血が流れ出す。栗蟲の身から、銀さん達は強い絲の材料を取つて、魚を釣る道具に造りました。その原料を酢に浸して、小屋の前で細長い絲に引延して乾すところを私はよく立つて見て居りました。栗の殼が又、大きく口を開く頃に成りますと、毎朝私達は裏の方へ馳附けて行つたものです。そして風に落された栗を拾はうとして樹の下を探し廻つたものです。それを人の知らない中に集めて置いて、小屋の前で私に燒いて呉れたり、母屋の爐邊の方まで見せに持つて來て呉れたりしたのも爺やでした。』＊

＊全集 7—391

間を隔てゝ、寛ぎの間といふのも有つて、そこが兄の居間に成つて居りました。村の旦那衆はよくそこへ話しに集りました。仲の間は明るい光線の射し込む部屋で、母や嫂が針仕事をひろげたところでした。』＊

この嚴格な家長に統べられてゐる舊い家の下にも、若い生命は伸びて行くのだつた。大きい石垣の下に若草の芽が伸び、暖い日の映つた田圃には蓬が青くなつた。（先生の家の慣はしで子供に一人づゝ下婢をつける爲に雇はれた女はお雛といふ髪結ひの娘で、）先生はその娘に連れられて蓬を摘みに出る樣になつた。野は青かつた。道にある草の酸つぱい「いたどり」や「すいこぎ」を持つて歸つて鹽漬にして喰べることをもそこには覺へた。

また、下男の庄吉爺さんの働く小屋のある裏の竹藪にも竹の子が伸びてゐた。お雛は、その竹の子の皮を三角に疊んで、中に紫蘇の葉を漬けたのを入れて先生にそれを吸はせた。チュー〳〵吸ふうちにだんだんその酸つぱい汁は筍の皮を赤く染めたりした。お雛はまた庭にあつた廣い、朴の木の靑い葉に鹽握飯を包んで呉れた。——その頃には先生は、もう、その小さい足

＊ 全集 7—401

んまで賴まれて來て、若葉をホイロに掛けて揉む時には男も一緒に手傳ひました。玄關前の庭の横手には古い椿の樹がありましたが、その實から油をも絞りました。私は母や嫂の織つた着物を着、下男の造つた草履を穿いて、少年の時を送つたのです。』＊——これもまた、そこに語り次がれてゐる思ひ出である。

『母がよく腰掛けた機の置いてある板の間は、一方は爐邊へ續き一方は父の書院の方へ續く樣に成つて居ました。斯の板の間に續いて、細長い廂風の座敷がありまして、それで三間ばかりの廣い部屋をぐるりと取圍くやうに出來て居りました。斯の部屋々々は以前本陣と言つた頃に役に立つたので、私の覺えてからは、奥の部屋などは特別の客でもある時より外に使はない位でした。別に上段の間といふのが有りました。そこは一段高く設けた奥深い部屋で、白い縁の疊などが敷いてあり、昔大名が寢泊りしたところとかで、私が子供の時分には唯床の間に、古い鏡や掛物が掛けてあるばかりでした。父はそこを神殿のやうにして、毎朝神樣を拜みましたから、私も眼が覺めると母に連れられて御辭儀に行つたものです。それほど父は嚴格な、神信心な人でした。髪なども長くして、それを紫の紐で束ねて、後の方へ垂れて居ました。上段の

＊ 全集 7—395

よく働いた人の樣である。先生はこの人を母とし、また、白い髮を切下げにして、腰はいさゝかは曲りながらも、未だシッカリとして居た樣な名門の出の祖母の傍に、大きな家族の末子として育ちはじめたのである。

『一體私は七人の姉弟のうちで一番末の弟で、私の直ぐ上が銀さん、それから上に二人の姉があつたさうですが、斯の人達は幼少にて亡くなりましたさうです。その上に兄が二人あつて、一人は母の生家の方へ養子に參りました。一番年長が姉です。姉は私がまだ極幼少い時に嫁に行きましたから、殆ど吾家に居たことを覺えません。長兄の結婚は漸く私が物心づく頃でした。嫂を迎へてから、爐邊は一層賑かで、食事の度に集つて見ると可成大きな家族でした。』——とは、「生立ちの記」＊に語られてある處だ。

この大家族の山上生活では、殆どすべての生活に要るものを手造りにしてゐた。『野菜を貯へ果實を貯へることなどは、殆ど年中行事のやうに成つて居ました。母は若い嫂を相手として、木梨の汁などで絲をよく染めました。茶も家で造りました。茶滴といへば日頃出入の家の婆さ

＊ 全集 7—395

――それが元日の、村の衆への挨拶であつた』＊といふ。

しかし、この山上の大きい舊い家の方にも、明治當初の暗鬱な焦燥と不安の氣は漸く襲ひ來つて居たのではあらう。明治四年――先生の出生に先だつ一年に廢藩置縣は斷行され、小學校は設置され、日本最初の日刊新聞は創刊され、出生の五年には最初の京濱鐵道が開通し、基督教會堂が横濱に建立され、一年後の六年には岩倉具視一行が歐米の風物に眩惑されて歸朝し、先生三歳の七年には一般兵役義務の施行となり、已に佐賀の亂は勃發したのであつた。そしてこの島國の環海に、船によつて到る處に迫つて來てゐた海外の正體は、怖ろしくもまた不可知の姿でもあつたらう。

――その中に、先生は平田派の學說に深く心を傾け、當時の國情を憂ふることの爲に、後年遂に身を狂したといふ風な父、島崎正樹の四男として出生したのであつた。

母は縫子と言つた。頰の紅い、左の眼の上に墨子のある。健康な婦人であつた。それは質實勇健な氣象の衷に、複雜で濃かな感情をもつてゐる信州の婦人で、純粹で、簡素な生活を愛し、

＊ 全集 6―79

あり、明るい中の間があり、一方は爐邊に行き、一方は父の書院につゞくまでの幾つかの室と廊下とがあり、『障子を明けると、細長い坪庭を隔てゝ石垣の下の方に叔母の家の板屋根が見え、そこからずつと向ふには遠い山々、展けた谷、見霞むやうな廣々とした平野。』A——美濃の平野が遠く繪のやうに眺められるのであつた。書院の前には青い、大きい老松、美しい白い花の牡丹などがあつた。

この舊い家敷はまた、舊い歷史を持つてゐた。幾百年前、その山村を拓いたものが實にこの家の先祖であつた。『谷を耕地に宛てたこと、山の傾斜を村落に擇んだこと、村民の爲に藥師堂を建立したこと、すべて先祖の設計に成つたものであつた。土地の大半は殆どこの家の所有と言つて可い位で、それを住む人に割き與へて、次第に山村の形を成した』Bもので、先生の生れてゐた頃ですら、『村の者が來て、「旦那、小屋を作るで、林の木をすこしお呉んなんしよや」と言へば「オヽ、持つて行けや」といふ調子で、毎年の元旦には村民一同は、この門前に集つて先づ年始を言入れたものであつた。其時は、祝の餅、酒を振舞つた。斯の餅を搗くだけにもこの家には二晩も三晩もかゝつて、出入り者が其度に集つて來た。「アイ、目出度いのい。」

A 全集 7—402 B 全集 6—79

は中央線の落合川ステエションから一里ばかりの奥に當る）に生れた。B

それは、「木曾谿日記」に――

『木曾は御嶽の大山脈と駒ケ嶽山脈との間に挾まれてゐる谷で、御嶽山脈の麓を流れてゐるのが木曾川である。木曾の村々はみなこの木曾川の流れに沿うて連續してゐるのだ。丁度自分の古里の馬籠はこの山脈のはづれに當つてゐて、その起伏した山々が十曲峠を終として美濃の沃野に落ちてゐる』＊としるされたその地形の中の、山上の舊い驛路に當る一小驛なのであつた。

山上には、到る處に大きい岩石があつた。そして先生の村は、その岩や石を集めて、城の様に石垣を築き上げ、そしてその一段づゝに家を建てゝゐるといふ風な村落で、先生の「家」はその中央にあつた。そして、その家は美濃と信濃との國境に近く、街道筋に當つて昔は往來の大名などを泊めた舊本陣といふ樣な舊家であつた。門の內には古い椿の樹があり、大きい玄關があり、廣い板の間があり、一段高く設けた暗い上段の間といふのがあり、寛ぎの間といふのが

A 年譜(全集12)參照　B 全集 1—338

液の力と、次いで乳汁の力と、またそこに始まつて來る第一の環境の力との問題に考へたい。そしてその出發が、多くその歸着に似てゐる處のものであることを思つて見たい。

成長と成熟と、革新と練磨と、反抗と享樂と、願求と恍惚と——それはさま〴〵な相異した時と人との姿を成すものではあるが。しかし、私はこゝに前者後者をその性格に歸する前に、もつと時と人との影響をきゝつけて見たい。卽ち、明治當初の暗黑の中に、その人の中に血液を引出した先生が、常に前者の心に近かつたらしい素因を、また、その艱難な半生をあの悲壯な肯定の中に耐えて來たほどの影響を、そして今は、その後者にして、先生の所謂「香氣の高い生の充實」＊——まことの老年に近づかれた程の長い努力の熱情を、その出發を、その歸着を、……卽ち、先生今日の生命の光景を、その氣分を、いまこの第一の環境、ふるさと「木曾谿」の中に起して、その背景の前に、新めて先生をこゝに見始めやう、……そして次いで「東京」に「佛蘭西」にその背景を置いて見やう……と、私は茲に思つて居るのである。

先生は、明治五年二月十七日、長野縣西筑摩郡神阪村（木曾路が街道であつた時代の馬籠驛、今

＊ 春をまちつゝ(71)

木　曾　谿

長野縣西筑摩郡神阪村馬籠（出生――八歳）

『あの山の中も變つた。しかし、子供の時分に飲んだふるさとのお乳の味は、自分の中に變らずにある』＊

これは、先生が少年の讀物として「ふるさと」の思ひ出をしるされた物語の中にある言葉だ。

「三歳見（みつご）の魂、百歳（ひゃく）までも。」

これは、わが國のあまりにも有名な俚言であるが、私はこれを人の生命に於ける、最初の血

＊ 全集 10—543

父

明けさうで明けない薄闇の下に、……その下に、その中にこそ、先生はよく生きて、よき晩年に近づき得たものだ。それにしても此處に來るまで、——その肯定の苦は、かの否定の惱みにも勝つてそこにいかばかりの悲壯を置いたものであらうか。しかも、今日の先生のその微笑の中に、私は、明かに次の如き言葉を見得るのだ。

『美は在るのです。存在するものゝ一切の中にあるのです。』＊

＊ 自然〔春を待ちつゝ〕

い日の出を夢みながら、故國をさして歸つて來た日を第二の「曙」とも「新生」ともなすならば、『生(ライフ)をして趨くまゝに趨かしめよ』A——そして、「新生」の眞相にも徹して、いまは漸くその面を揚げたその人の生活をこそは第三の「曙」とも「美」ともなすべきであらう。そしてそこには、いまは、その『眼前の暗さも、幻滅の悲しみも、冬の寒さも、何一つ無駄になるものゝなかつたと思ふ様な春』Bが來やうとしてゐるのではないか。

『單に動物的なものから限りなく深い精神に充ちたものに至るまで、愛はあらゆる形相に於いて私には崇い。そはすべては自然の手の中にあるから。』B

これはロダンの言葉として、先生がその著作の中に舉げてゐる言葉だ。そして先生は、これを餘程の謙虛の心持で自然を見た人でなければ、斯うは言へまいと言つてゐる。私はまた、これをもつて餘程の苦惱の中に生ききつた人でなければ、本當の意味に於て、この言葉をば舉げまいと言つて見たい。

A 生(讀本6)　B 自然(春を待ちつゝ)

『——毎年、五ヶ月の長い冬の續く信濃の山の上からも、新開地らしい頃の東京の郊外の畠の間からも、日の出を町の空に望むに好い隅田川の岸からも——』また『紫色の泥かとも見まがふ遠い海の上からも、見るからに夢のやうな青い燐の光の流れる熱帶地方の波の間からも、それから又、石造りの建築物も冷く並木も黒く萬物は皆凍り果てたやうな寒い異鄕の町の中からも、……』先生が待つ心をしてゐたものは何であつたらうか。それこそは、明けさうで明けないその薄闇の中に、待ちつゞけかねる思ひをした生の夜明けではなかつたか。

『わたしは三十年の餘も待つた。』

先生はつぶやく。そして、今日は『しかし、誰でも太陽であり得る。わたしたちの急務はたゞ眼の前の太陽を追ひかけることではなくて、自分等の內部に高く太陽を揭げることだ。この考へは年と共に深く、わたしの小さな胸の中に根を張つて來た』＊とも、——今日は言ひ出されてゐる。

あの仙臺の方へ、さびしい旅を行きながらも、その宮城野の北風の中に、色もなき野の石の中にはじめての薄明を見たのを第一の「曙」とするならば、あの並木も黑い異國の旅から、遠

＊ 太陽の言葉（春を待ちつゝ）

かなかつたと思ふ。』A

私はまた、先生の瞳が、いまは靜かに斯樣も語つてゐられるかの樣なのをそこに見つけた。『眞の慰藉なるものは寧ろ暗黑にして且つ慘憺たる分子を多く含まねばならぬ。新生（ニューライフ）の眞相と云ふ樣なものは、其光景の多くは、努力の苦痛と浪費の悲哀とに滿されたものかと思ふ。』B

私はまた、そこに長く長く坐りつゞけて來られた樣な先生の膝を見る。常に、その上に置かれて來た樣な先生の手を見る。その手——その半生の中に、よくその手と手とを握り合された樣な、靜脈の太いその手を見る。

そこには、その『——長い年月の間のことを思へば、默して居たいやうな氣がする。それを自分の感慨にかへたい樣な氣がする』C

と書きつけられてゐるやうな時代の難さと、「その人」とが思はれなければならない。

A モーパツサン論（全集12） B 牧師の言葉（全集5） C 現代小說選集序（全集12）

美を積むもの〻心もこれに劣るまい。』*

この先生の言葉を知つたのも、同じ時のその午前だ。そして、私は、こゝにもまた微笑しながら、その悲壯な言葉の意味を受止めた。

先生はもう、面を揚げて物を言はれる人であつた。そして先生の本當の微笑はまた、私の樣なもの〻危つかしい微笑をも引出してゐた。然し、私はそこに斯樣も語つてゐる樣な先生の唇の言葉をきゝつけた。

『私は、舊い道德に反抗することばかりを知つて、新らしい道德の曙光をさへも認めることの出來なかつたやうな、不幸な時代に成長した。私の周圍は、眞に隣人を愛して見たこともなくて、たゞ抽象的に道德を說く樣な恐ろしい聲で滿されて居た。斯うした聲ほど私に反感を起させるものはなかつた。私は他の學友と同じやうに、反抗に繼ぐに反抗を以てした。心も柔く感じ易かつた自分の青年時代を斯の反抗のうちに過したことは、長く私の生涯に影響せずには置

* 美を積むもの（春を待ちつゝ）

美

「私はいよいよ多く事物に於ける必然性を美として見ることを學ばうと思ふ。」
これが多くの懷疑と苦悶とから一切のものゝ肯定に移つた時の人の心であつたとか。好い言葉だと思つた。』*

この好い言葉はニイチェの言葉だ、と言つて先生は十四年のある日の朝の、私の訪問に話題とされた。私は微笑した。そしてこの言葉の思想する處は已に、今日の先生の生活になりつゝあるものなのを感じてゐた。

『心貧しきが故に善を積む。愚かなるが故に善を積む。悲しみ深きが故に善を積む。さう言つて善を積まうとした人達もあつた。

* 必然性（春を待ちつゝ）

ある意味での自傳でもある。又小說以外の選集とも言ふべきものであらう。

病弱三年。この年の四月に入りてやゝ健康の回復を覺ゆ。五月、末女柳子を伴ひて鄕里神坂村に旅し長男楠雄の新しき農家を見る。

「早稻田文學」七月號に武藤直治氏の「現代作家論」の一あり、多年の述作漸く未知の批評家の認むるところとなることを知る。

次男鷄二は川端研究所の研究生であつたが畫作のかたはら兄の農業を助けるために神坂村へ赴いたのも、この五月であつた。

前へも年若き讀者を連れて行きたい。私は、そんな心持から、隨筆、感想諸消息などの年若い人々に適しさうなものを選んでこの六卷を編んだ。』

（讀本のはしがき）

病後の健康未だ全く回復せず、この年の後を殆ど「藤村讀本」の編纂に費した。

大正十五年（一九二六）

五十五歳

二月二十日。「藤村讀本」六卷を研究社から出版した。

これは、「少年期より靑年期にうつりかはるころの年若き人々のために」これまで書いて來た童話、詩、感想の中から自選し、整理し、第一卷から第六卷までに、心をこめて編み變へたもので、これこそ

『私達の讀本もこれで六つの卷を重ねる。學ばうとさへ思へば、私達は誰からでも學べる。生きて居る人ばかりでなく、死んだ人からも學べる。萬人はみな私達の師だ。

私はこの讀本を通じて、曾て自分の心を新鮮にしてくれた自然の前へも、曾て自分の懇意にしたいろ〱の人達の

生涯、貧しい理學士、三人、伸び支度、熱海土産、第二篇、生ひ立ちの記、出發、沈默、犬岩石の間、孤獨、母、病院、分の愛妾、第三篇、芽生、弟子、奉公人、河岸の家、黄昏、伊豆の旅、朝飯、苦しき人々、一夜、家畜。

この著書の印税で、故郷にある若き農夫の長男楠雄の爲に一軒の農家を買ひ與へた。

六月、パンフレット第三輯「伸び支度」出づ、收められたるもの「伸び支度」「明日」「熱海土産」「飯倉だより」

舊小諸義塾同窓會及び信濃會の發起で小諸懷古園に藤村の「千曲川旅情の歌」を彫つた詩碑を建てるの議が起り、有島生馬、高村豐周等これの制作意匠に係る。

辭す。

大正十四年（一九二五）

五十四歲

短篇「伸び支度」を新潮に、「明日」婦人の國に「熱海土產」女性誌上に發表す。

三月、感想集「春を待ちつゝ」アルスより出づ。

五月、新潮社出版、「現代小說全集」第九卷として自選「藤村集」出づ。

收錄したるものは、第一篇、或る女の

詩話會編「明治大正詩選」出づ。

日露藝術家協會設立さる。

築地小劇場に、チエホフの「櫻の園」「三人姉妹」ハープトマンの「寂しき人々」等上演さる。

十一月、ロマンロラン生誕六十年記念として築地小劇場に「ロランの日」催され、片山敏彦譯「愛と死との戯れ」上演さる。

「三人」出づ。收むるもの「三人」
「太陽の言葉」「子に送る手紙」

病後の月日を靜かに筆を執つて、
「伸び支度」その他を書き、夏、娘柳
子を連れて伊豆熱海に旅行した。

中村星湖編、「藤村感想集」人文會より
出版さる。

「淺草だより（新片町より、後の新片
町より合本）改版「水彩畫家」は「處女
作集」として、春陽堂より上梓さる。

病氣の爲に文部省國語調査委員を

話集」秦豐吉譯ファニンイ・アルク
ネルの「靑い塔の中のストリンド
ベルク」別名「ストリンドベルク
の最後の戀」等出版さる。
雜誌「大街道」出づ。この年同人
雜誌熾んに創刊さる。タゴール第
二次、ヂンバリスト來朝す。
出版界、漸く非常の不況なり。

大正十三年
（一九二四）

危く災を免る。

五十三歳

一月藤村パンフレット第一輯「ある女の生涯」新潮社より出づ。
簡素な小冊子の著作を刊行することはかねてからの著者の望みであつたのである。収むるもの「或る女の生涯」「樹木の言葉」「貧しい理學士」
同月、童話集「をさなものがたり」研究社より出づ。
六月、藤村パンフレット第二輯

創刊。

透谷三十回忌。
日本フエビヤン協會組織され、機關雜誌「社會主義研究」出づ。
小山内薫、土方與志等に依つて築地小劇場創設され、ゴルキーの「夜の宿」等公演さる。
勝峯晋風編著「芭蕉俳句定本」「一茶旅日記」戸川秋骨隨筆集「文鳥」
舟木重信譯「ストリンドベルク童

す。

病を、小田原海岸にも、信州山邊の湯にも養ひ、靜養中「をさなものがたり」を書く。

四月、短篇集「食後」と「藤村集」を「藤村創作選集」上下二卷として春陽堂より改版上梓す。

大震災には、病身、飯倉片町の寓居にて遭ふ。十月、震災記「子に送る手紙」を朝日新聞に連載す。震火災では多くの著作の紙型を失つた。「をさなものがたり」の原稿、

ーベル博士小品集續」出づ。

ケーベル博士横濱で逝去す。

有島武郎、輕井澤に自殺す。

九月一日、關東大震災。

大杉榮、伊藤野枝等横死す。

□

『實際、私等は噂の敵の來襲よりも、そんな流言に刺激されて、敵でもないものが眞實の敵となつて顯れて來るのを恐れた。』（子に送る手紙より）

雜誌「文藝春秋」菊地寛編輯にて

長兒楠雄は既に十八歳の中學生であるがこの年、中學を辭して農業見習ひのために故郷神阪村へ赴かうとした。この都會から田園に歸つて行く子を送るため、相携へて木曾へ旅した。この行は亡き妻子等の遺骨を父母が永眠の地なる永昌寺の墓地に改葬するためでもあつた。

大正十二年（一九二三）

五十二歳

一月、中風を患ひ、暫く病床に臥

齋藤綠雨君、國木田獨歩君、中澤臨川君——私の周圍にあつて私を勵まして呉れたそれらの舊友や知已は、既にこの世に居ない人達だ。惜しいと思ふ人達の多くが早逝して仕舞つて、今日まで私なぞのどうやら生きながらへて來たことすら不思議なやうな氣がする。」

（全集の序文より）

花袋の「近代の小説」久保勉譯「ケ

卷刊行會より出版さる。
著作の年代順と篇別とで全體をまとめたもので、通卷十二、十二月二十日完了した。

四月、全集の印税を投じて、雜誌「處女地」の發行に盡力す。

「來るべき時代の、婦人のためにと思ふものが集まりまして、未熟ながらその支度をはじめました。」
それが、その發行の意味であつた。

九月、感想集「飯倉だより」をアルスより、「佛蘭西紀行」を春陽堂より上梓す。

論熾んに論議さる。有島武郎個人雜誌「泉」創刊
「近代劇大系」豫約出版として出づ。大杉榮譯、アンリー・ファーブルの「昆蟲記」鷹野つぎの「悲しき配分」出づ。
鷗外、マルセン・プルウスト等逝く。

□

『過ぐる二十五年を私がこの十二卷の著作に費して居るうちに、その月日は私自身の生涯を變へたばかりではなく、私の周圍をも變へた。北村透谷君、

「透谷全集」の編直しをも果して、それを友の遺族に贈つた。
この四五年の間、母なき子供等のために多くの時と精力とを費した
二月、詩話會發起にて生誕五十年記念祝賀會催され、同會編「現代詩人選集」を贈られた。
文部省國語調査委員に推さる。

大正十一年（一九二二）

五十一歳

一月二十五日「藤村全集」第一

ケヤグラハ運動印度に起る。
エロシエンコ日本を追放さる。
小説家協會成る。有島武郎譯「ホイツトマン詩集」高村光太郎譯ヱルハーランの詩集「明るい時」内山賢次譯「ゴルキーの見たるトルストイ」等出づ。
野村隈畔情人と心中す。
水平社運動起る。文壇に階級藝術

は、やがて時代の難さを記念するこゝろである」
と書きつけた。
十二月、童話集「ふるさと」實業の日本社より出づ。
この年、姉高瀬園子死去す。

ンヌ」武郎の「惜しみなく愛は奪ふ」臨川の「正義と自由」高村光太郎譯「續ロダンの言葉」出づ。
中澤臨川、岩野泡鳴、黒岩周六等逝く。

大正十年（一九二一）

五十歳

「佛蘭西紀行」の稿を繼ぎ、「ある女の生涯」、「貧しき理學士」を草した。長いこと思ひ立つて居た、

原敬横死す。
マハトマ・カンヂー等によつてサ

大正九年（一九二〇）

四十九歳

佛蘭西紀行別名「エトランゼエ」の稿を起す。

田山花袋、徳田秋聲兩氏誕生五十年記念に贈るべく、有島武郎、片上伸氏と共に「現代小説選集」を編む。その序に、

「――君等と共に歩いて來た長い年月の間のことを思へば、私は默して居たいやうな氣がする。夢は長く、行く路は難い。君等の誕辰を記念するこゝろ

花袋、秋聲生誕五十年記念祝賀會開催さる。

トルストイ十周年記念祭行はる。

日本社會主義同盟成る。

劇作家協會成る。

森戸、帆足筆禍事件あり。

大杉榮によつてクロポトキンの「或る革命家の思ひ出」新小説に譯載さる。有島生馬「回想のセザ

暮、「櫻の實の熟する時」上梓

大正八年（一九一九）　四十八歳

一月、長篇小說「新生」上卷、春陽堂より出づ。

九月、同下卷を脫稿し、十二月下卷出版さる。

少年時代のおもひでを子等に語る童話集「ふるさと」を書き、故國のふところに歸つて來た歸朝者の心を寄す。

嶋村抱月逝く。

ヹルサイユ平和條約成る。

著作家組合成る。國民文藝協會設立さる。

長谷川如是閑により雜誌「我等」創刊さる。

室生犀星の「抒情詩時代」久保勉譯、「ケーベル博士小品集」出づ。

アンドレーフ、ロスタン、ルノアール等逝く。

外からの土産話である。

大正七年
（一九一八）

四十七歳

四月、「新生」上巻に着手、朝日新聞紙上に連載しはじむ。

七月、航海記「海へ」實業の日本社より出づ。

芝櫻川町の宿より、麻布飯倉片町三十三に移る。

ロダン、ドガ、ザメンホフ、オクターブミルボウ逝く。ベルハーラン鐵道奇禍にて逝く。

歐州戰亂休戰す、六月以來、各地米騷動蜂起す。

武者小路實篤等に依つて人道主義唱導され、同志、日向に「新らしき村」建設の途に就く。

二葉亭全集、武郎の「生れ出づる惱み」出づ。

大正六年（一九一七）

四十六歳

芝高輪二本榎より芝西久保櫻川町二風柳館に移り、母亡き兒等に心を勞しながら、航海記「海へ」を書く。「櫻の實の熟する時」の稿を繼いで漸く完成したのもこの年であつた。

四月、「幼きものへ」を實業の日本社より出版す。子等にあてた海の

露西亞「三月革命」起る。次いで「十月革命」あり。

文壇一部の人々に依つて民衆藝術論唱へらる。

田中純譯クロポトキンの「ロシヤ文學に於ける理想と現實」抄譯出づ。

土岐善麿歌集「綠の地平」出づ。

末には出發して、歸朝の途につく。途中ロンドンに渡り、そこから五月九日の日本郵船、熱田丸で出帆、喜望峰を迂廻して、海上五十餘日七月四日神戸着、なつかしい日本を見廻しながら、芝二本榎の假寓の二兒のもとに歸る。感想「故國に歸りて」を朝日新聞に寄す。

童話集「幼きものへ」を書く。

春陽堂より名家傑作集第四篇として「水彩畫家」出版。收むるもの、「水彩畫家」「藁草履」「津輕海峽」「椰子の葉蔭」「家畜」

菊池寛「屋上の狂人」里見弴の「善心惡心」出づ、高村光太郎譯「ロダンの言葉」出版。

タゴール、バリモント來朝す。

夏目漱石、上田敏ジャツク・ロンドン等逝く。

『西洋の方は都市に於て勝り、吾儕の國は田舍に於て勝つて居る、とは私の持論である。もし私がこの說を押し進めて行つたら吾儕日本人は、二千年の歷史を有する田舍者で、吾儕の都市は大きな村落であるといふ樣な結論に達するかも知れない。』 「海へ」より

それは、何人も解決を急ぐことが出來ないと言つた痛々しさであつた。その中で、再び巴里に歸つて來た、山本鼎、正宗得三郎氏等とさびしく暮した。

第二の佛蘭西だより「戰爭と巴里」を新潮社より上梓した。

戰前戰時の旅の間に、石原純、河上肇、河田嗣郎、小泉信三、澤木梢、水上瀧太郎氏等を知つた。

大正五年（一九一六）

四十五歳

友人も尠くなつた巴里を、四月

さる。

長塚節、ウインデルバンド等逝く。

□

『開戰以來、佛蘭西の文士で、戰死したものの數は五十八名に上りました。筆とる自分等に取つて、この損失は他事とも思はれません。その中には詩人シャアル・ペギイの名をも數へました。』「戰爭と巴里」より

日本著作家協會成る。

この旅にあつて、歐州戰亂に際會し、しばらく巴里の動亂をフランス中部オートヸエンヌ州リモモオジエの田舍町に避けた。正宗得三郎氏同行。

滯留二月半にて巴里に歸る。歸途佛國西部地方を旅行す。

十二月、代表名作選集第五第六卷として「春」新潮社より出づ。

漱石の「心」出づ。

□

『ボルドオといふ港町の旅館で、西班牙の石榴を買つた。西の歐羅巴の空に生立つ樹木の生命の結晶かとも言ひたい驚くばかりの大きい柘榴。あまりの見事さにその一つをば寢臺の枕もとに置いて寢た』「佛蘭西紀行」より

大正四年（一九一五）

四十四歲

戰爭が持久的になつた樣な巴里、

武郎「宣言」實篤「その妹」發表

移り、そこに幼きものを殘して、佛蘭西船エルネスト・シモン號に便乘して神戸よりフランスへの旅に上る。巴里ポールロワイヤルの下宿にありて「佛蘭西だより」を朝日新聞に寄す。佛語を學び始む。

ケッチ（日光、柳並木等）、及び幼き日（後に生立ちの記と改題せしもの）

大正三年（一九一四）

四十三歳

巴里の客舍で、長篇「櫻の實の熟する時」起稿。

この年第一の佛蘭西だより「平和の巴里」新潮社より出版

六月、歐洲大戰勃發す。日獨、支那青島に交戰す。

カール・ハーゲマン來朝す。

ジヤン・ジヨレス横死す。

父正樹の遺稿「松が枝」を編む。

大正二年（一九一三）

四十二歳

一月現代文藝叢書第二十篇として「朝飯」春陽堂より出づ、收むるもの「朝飯」「家畜」「藁草履」「爺」二月愛子叢書第一篇「眼鏡」實業の日本社より、四月感想集「後の新片町より」及び綠蔭叢書第四篇として短篇集「微風」を新潮社より出版。

この年の春、新片町より芝高輪に

文藝協會解散し、新に「藝術座」生れ、「モンナバンナ」公演さる。

臨川の「トルストイ」出づ。

岡倉覺三、伊藤左千夫逝く。

□

短篇集「微風」に收められたるもの
出發、岩石の間、沈默、突貫、燈火、
足袋、犬、死の床、無言の人、柳橋ス

出す。三兒の死、妻の死の後をうけて長篇の制作等に心勞る。「食後」はその「退屈」から生れて來たものばかりだつた。

收むるもの、母、船、孤獨、紅い窓、下仁田の宿屋、鷄、トラピスト、秋の一夜、少年、刺繍、汽船の客、女、命の愛妻、人形、後悔、平和の日、追憶、病院。

十二月、左久良書房より「千曲川のスケッチ」上梓、吉村樹氏に贈る。

大正と改元さる。

中澤臨川譯ブランデスの「露西亞印象記」本間久雄譯ワイルドの「獄中記」秋聲の「黴」節の「土」靑果の「南小泉村」白秋の「思ひ出」啄木の「悲しき玩具」廚川白村の「近代文學十講」石川三四郎の「哲人カーペンター」等出版さる。

一葉の日記公表さる。

啄木、ストリンドベルク逝く。

文藝協會にてズウデルマンの「故郷」公演さる。

明治四十四年（一九一一）	**四十歳** 四女柳子生る。 妻冬子産後の出血のため逝く。三十三歳。 「家」脱稿す。上下二巻に亘る二十年からの長い「家」の歴史を彼様した筆法で押し通すといふことは容易でなかつた。 十一月、緑蔭叢書第三編として「家」上梓す。	文藝協會によつて第一回、イプセンの「人形の家」公演さる。この頃より婦人問題論議さる。 「青鞜」創刊さる。 ネオ・ロマンテイシズムの運動起り始む。 雨雀「幻影と夜曲」出版。 シドニーウエッブ來朝。
明治四十五年 大正元年（一九一二）	**四十一歳** 四月、博文館より短篇集「食後」を	七月明治天皇崩御。

明治四十三年（一九一〇）

三十九歳

長篇小說「家」上卷に着手した。

『これは文章で建築をする心掛けであつた。それには屋外で起つたことを一切ヌキにして、すべてを屋內の光景にのみ限らうとした。臺所から書き、玄關から書き、夜から書きして見た。川の音の聞える部屋まで行つて、はじめてその川のことを書いて見た。』

「寢ごと」より

その上卷を「讀賣」に連載す。

二葉亭四迷露部にて病を得、歸朝の途上印度洋上に逝く。

幸德秋水等處刑さる。

ハレー慧星出現。

日韓併合成立す。

長塚節の「土」朝日紙上に連載さる。獨步の「書簡集」啄木の歌集「一握の砂」牧水の「別離」出づ。

雜誌「白樺」「三田文學」創刊。

文藝委員會成立。

レオ・トルストイ、ビョルンソン

山田美妙齋逝く。

明治四十二年（一九〇九）

三十八歳

短篇集「藤村集」博文館より上梓。田山花袋、柳田國男兩氏に贈る。收めたるもの、並木、黄昏、壁、收獲、一夜、伯爵夫人、苦しい人々、旅、青年、死、弟子、土產、雜貨店、奉公人、河岸の家、芽生。

並木モデル問題起る。感想集「新片町より」佐久良書房より文藝入門叢書第一編として出版。

三男翁助生る。

花袋の「田舍敎師」「妻」草平の「煤煙」出づ。

鷗外等によつて雜誌「スバル」創刊さる。

文藝革新會成り、鏡花等に依つて反自然主義運動起る。

十一月、小山內薰等によつて自由劇場設立され、有樂座に於てイプゼン作鷗外譯「ボルクマン」上演さる。

明治四十一年（一九〇八）

三十七歲

一月、長篇小說「春」を朝日新聞紙上に掲載しはじむ。これは新聞のために日々創作の筆を執つて見た最初のものである。

二男鷄二生る。

十月、綠蔭叢書第二篇として「春」上梓。

十一月、田山花袋、蒲原有明、武林無想庵氏等と共に伊豆地に旅行し、「伊豆の旅」を書いた。

中澤臨川氏等を知る。

文壇に於て自然主義運動熾烈となる花袋の「一兵卒」漱石の「三四郎」武者小路實篤の「荒野」瀨沼夏葉女史譯「チエホフ傑作集」出づ。

「アララギ」創刊

二葉亭、朝日新聞社露都通信員としてモスクヷに赴く。

國木田獨步茅ケ崎南湖院に逝く、川上眉山自殺す。

明治四十年（一九〇七）

三十六歳

新片町の住居は隅田川に近く、家の前を右に取れば淺草橋の畔に、左に取れば柳橋の畔にて水に添ふ位置にあつた。

靜かな郊外に住慣れた耳には、種々の物賣の聲が聞えて來た。家の入口には綠葉の濃い大きい八つ手があつたり、水邊に近い町中の空の見える住心持のいゝ二階があつた。

長篇「春」にかゝる用意をしてゐた。

獨步の「濤聲」花袋の「蒲團」秋聲の「凋落」出で、自然主義の潮流文壇に於いて中心問題となる。

中村星湖の「少年行」二葉亭の「平凡」小田頼造譯トルストイの「我等何をなすべき乎」出づ。

有島武郎外遊の途上、ロンドンにてピーター・クロポトキンを訪ふ。

綱島梁川、エマースン逝く。

しかし、その家の中は暗澹としてゐた。その頃には、始めての男の子楠雄が生れてゐたけれど、山の上から連れて來た三人の少女の最後の一人、長女綠をも東大附屬病院で喪つてゐた。つくぐ〳〵努力の爲すなく、事業の空しいのを感ずるやうなその日夜だつた。夏、妻は楠雄を連れて北海道に歸省。
九月、なつかしい隅田川の水邊を求めて淺草新片町に移る。

二葉亭の「其面影」伊藤左千夫の「野菊の墓」獨步の「運命」泣菫の「白羊宮」出版。
長谷川天溪の「幻滅時代」太陽に出づ。
五月、イプセンはクリスチヤナに
十月セザンヌはエクスに於て逝去す。

月一日三人の子をつれて一家上京した。

木犀の木のあるその家に三女縫子まづ逝き、次女孝子その後を追つた。妻冬子その中に病む。

「破戒」脱稿。

トルストイの「復活」胡射の沙翁全集出づ。

野口寧齋逝く。

明治三十九年（一九〇六）

三十五歳

三月、緑蔭叢書第一篇として「破戒」上梓、秦氏及び神津氏に捧ぐ、意外とするまでの反響を世間に傳へた。

二葉亭の「世界語」出で、エスペラント語漸く盛んとなる。

「文章世界」創刊。「早稲田文學」再興。文藝協會成る。

明治三十八年（一九〇五）

三十四歳

淺間の麓へも春が近づいた。いよいよ七年の山の生活から、苦勞な仕事を持つて東京へ出やうとした。そしてその前に、行く人も稀れな雪の道に惱んで友人神津猛氏を志賀村に訪ねた。その上に四月單身上京、西大久四〇五に普請中の家を借りた。そして仕事場としてのその家の壁の乾くのを待つて、五

ポーツマス條約成り、日露平和克復す。

綱島梁川の「病間錄」「見神の實驗」出で反響高し。

上田敏の譯詩「海潮音」有明の「春鳥集」泣菫の「二十五絃」醉茗の「塔影」出で、詩壇大いに振ふ。

尙江の「良人の自白」內田魯庵譯

明治三十七年（一九〇四）

三十三歳

小諸馬場裏にて二兒を傍に、長篇「破戒」の稿を起す。時に大戰爭に際會した。

當時の出版界と著作者との關係に安んじられないものがあつて、自費出版を思ひ立つたのもこの年であつた。その資を得るに苦しんで函館の秦慶治氏を訪ふために不安な戰時の空氣の中の津輕海峽を越した。

三女縫子が生れた。この縫子は亡きまの名に因んだ。

二月、日露國交斷絕す。

「紅葉全集」木下尙江「火の柱」長塚節「炭燒の娘」子規の「竹の里人歌集」出ず。

田山花袋「露骨なる描寫」を新聲に發表し排技巧說を高唱す。

花袋從軍記者として滿州の地に渡る。

ロマン・ローラン「ジヤン・クリストフ」出はじむ。

「新潮」創刊さる。

小泉八雲、齋藤綠雨死す。

チエホフ逝く、

明治三十六年（一九〇三）

三十二歳

近郊の農夫の中に行き、また部落民の間に話をきゝに行つた。「破戒」のヒントをもこの間に得た。

「若菜集」「一葉舟」「夏草」「落梅集」を合本した「藤村詩集」を春陽堂から九月一日上梓した。

「思へば、言ふぞよき、ためらはずして言ふぞよきいささかなる活動に勵まされてわれも身と心とを救ひしなり」とその「自序」に書きつけた。

次女孝子が生れた。

小學校令改正され國定教科書制定さる。

幸德秋水、堺利彦等に依つて「平民社」成り、日刊「平民新聞」創刊さる。

幸德秋水の「社會主義神髓」有明の詩集「獨弦哀歌」出づ。

短歌雜誌「馬醉木」根岸短歌會より創刊。

尾崎紅葉、市川團十郎、フーゴーウオルフ、ゴーガン等逝く。

小說としての試作「舊主人」を雜誌「新小說に寄せたが、發賣を禁止された。短篇「藁草履」もそれと前後して出來た試作の一つである。

　この頃は、詩から散文へ移らうとして沈默勝に暮してゐた當時のことで、その田舍樓の佗しさは漸く家族を飽かせてゐた。

トルストイ、イプセン、バルザツク等を讀み、また谷を下つて川岸の楊を見に行つた。

有島生馬小山內薰氏等を知る。

「透谷全集」舊文學界の諸友に依りて上梓さる。

永井荷風の「地獄の花」獨步の「酒中日記」鷗外譯アンデルゼンの「卽興詩人」出づ。

蒲原有明の詩集「草わかば」出版

夏目漱石外遊の途に上る。

正岡子規逝く。ゾラ死す。

セザンヌ「浴人」「浴女」の佳作を成す。

明治三十五年（一九〇二）

三十一歳

彼が探してゐた質實な生活は彼の周圍に在つた。彼はそこで眼を開いて、斯の荒寥とした山の上を眺めた。そしてこの高原と、その草木と、流れ下る千曲川の流域の間に住む人々から種々の物を學んだ。それが「千曲川のスケッチ」に成りはじめてゐた。

この年はじめて父となつた。長女「緑」が馬場裏の家で生れた。

國木田獨歩の「牛肉と馬鈴薯」與謝野晶子の歌集「みだれ髪」晩翠の「曉鐘」醉茗の「無弦弓」泣菫の「行春」中村春雨の「無花果」出づ。

高山樗牛の「フリードリヒ・ニイチエ論」帝國文學に出づ。

片山潜、西川光次郎共著「日本勞働運動」出版さる。

福澤諭吉、中江兆民等逝く。

日英同盟成立す。

年	年齢	事蹟	社会
明治三十四年（一九〇一）	三十歳	義塾での授業受持は一週二十八時間に亘ることも多かつた。その以外は廣い家の庭の土を耕し、また創作に從つた。「千曲川旅情の歌」以下數篇が成つた。この年、此等を集めた詩集「落梅集」を出版した。都會と田園と問題、そこにある生存との問題等が胸に來た。ダルキンを讀み初めた。 三宅氏歸京し、丸山晩霞氏佛蘭西より歸朝、來任す。	北清事變起る。 清澤滿之の宗教雜誌「精神會」起り、又社會民主黨設立さる。 蘆花の「自然と人生」鏡花の「高野聖」出づ。 大西操山、外山正一、ニイチエ、ワイルド等逝く。

明治三十三年（一九〇〇）　二十九歳

活も過ぐる仙臺の一年でいくらか落つくことが出來、小諸へ行つてから更に大いに心を安んずることが出來た。
これも明治學院にゐた三宅克己氏を小諸に迎へ、この新歸朝者と共に、ミレエ、コロオを語り、「雲」の研究を語ることを樂しんだ。
この年函館の秦冬子と結婚、士族家敷の跡、馬場裏に一家を持つ。

てニイチェの思想紹介さる。
トルストイの「復活」イプセンの最後の戯曲「蘇生の日」成る
土井晩翠の「天地有情」薄田泣菫の「暮笛集」德富蘆花の「不如歸」鏡花の「湯島詣」菊地幽芳の「己が罪」鷗外の「審美綱領」樗牛の「時代精神論」出づ。

明治三十二年（一八九九）

七月、保福寺峠鳥居峠を越へて木曾福島の姉の家高瀬氏を訪ね、一夏を谿谷の深聲の中に送り「新湖」「晩春の別離」「婚姻の歌」「農夫」その他詩集「夏草」の諸篇を書いた。

蒲原有明氏等を知る。

二十八歳

四月舊師木村熊次氏の招きにより信濃の高原淺間山麓の小諸町の私立小諸義塾に國語の教師として赴任した。動揺して常のなかつた生

創刊。福井準造の「近世社會主義」村井知至の「社會主義」魯庵の「暮の二十八日」出版さる。

ロダンの彫刻「バルザック」成る。

マラルメ・シヤバンヌ等逝く。

義和團の變起る。

中央公論創刊さる。

吉田靜致氏の「哲學史上第三期の懷疑論」哲學雜誌に發表され初め

一緒になる。

「文學界」廢刊。仙臺で書いた詩、「生のあけぼの」「六人の處女」「林の歌」その他を集めた處女詩集「若菜集」を春陽堂より出版す。

明治三十一年（一八九八）

二十七歳

湯島の家にて書いた詩「春やいづこに」「白磁花瓶の賦」その他及び散文「木曾谿日記」「利根川だより」等を集めた詩文集「一葉舟」を春陽堂より上梓。

葉の「金色夜叉」一葉の「一葉全集」出版さる。

森田思軒、アルホンドーデ逝く。

正岡子規を中心として雑誌「ホトヽギス」創刊され、俳句の革新運動起る。

安部磯雄等によつて社會主義研究會起る。

「國民の友」廢刊、雑誌「心の花」

情詩を書いては「文學界」へ送つた。

十月母コレラにて急死す。晩秋、十七年ぶりの故郷に母の遺骨を携へて歸る。「木曾谿日記」成る。

と感念」出づ。

ヹルレーヌ、エドモンド・ゴンクール、樋口一葉逝く。

明治三十年（一八九七）

二十六歳

僅かに夜が明けたかと思ふ頃は、辛酸を共にした母が亡くなつた。彼には考へなければ成らないことが多かつた。一年の東北學院を辭して再び歸京、長兄の湯島の家に

足尾鑛山鑛毒事件起る。

獨歩、玉茗、花袋、國男等の詩集「抒情詩」出版。鐵幹等に依つて詩歌雜誌「明星」創刊さる。

二葉亭譯ツルゲニエフの「浮雲」紅

身清澄山に登つた。
惑つた。ますます沈默した。——
された。
田山花袋、柳田國男氏等を知る。

明治二十九年（一八九六）

二十五歳

本郷湯島の家を、更に同森川町に移し、單身東北學院の教師として仙臺に赴く。居を名影町三浦屋に、また廣瀬川に近く友人の家に置き漸く夜の明けた樣な心で多くの抒

ロダンの彫刻「カレーの市民」成る。
一葉の家に、青年作家等集る。

三陸大海嘯あり。
雜誌「新聲」創刊「新潮」の前身なり。
二葉亭譯ツルゲニエフの「片戀」與謝野鐵幹の詩集「東西南北」紅葉の「多情多恨」鷗外漁史の「論文集」出版。樗牛の「作家の道念

上田敏氏等を知る。

明治二十八年（一八九五）

二十四歳

透谷の一周忌を迎へ亡友の爲に透谷集を編む。

母乳癌、姉脚氣を病みて患ふ。

八月、愛人死去。

母と共に三輪町から本郷湯島新花町（大根畑の家）に移る。專心製作に從はんとし敎師を辭す。

義姉の房州靜養を伴つて、途上單

日清戰爭の和議成る。續いて三國干渉起る。

「帝國文學」「太陽」「文藝俱樂部」「文庫」等創刊さる。

一葉の「たけくらべ」「十三夜」逍遙の「桐一葉」眉山の「うらおもて」小金井喜美子譯ビンデルマンの「名譽夫人」出づ。

めて文學生涯に入つて行くやうに成つた。「文學界」は友人星野天知兄弟の手によつて作られたもので、最初は「女學雜誌」の分身として發行されたが、創刊後間もなく獨立した。

五月、透谷芝の家にて自殺す。

夏、始めて英譯ルツソォの「懺悔」を讀み、深き感銘を受く。

兄の家に災難あり。家計を助けるために再び明治女學校に教師となる。

愛人遂に歸國す。

まる。露佛同盟成る。

透谷の「エマルソン傳」民友社より出づ。

ケーベル博士帝大哲學科の講壇に立ち、ショウペンハワー、ハルトマンの哲學思想を紹介す。

小金井喜美子譯レルモントフの「浴泉記」出づ。

獨逸人デットリッヒによつて初めてベートオヴェンの曲、紹介さる。

ペーター歿す。

それより、鎌倉の或る禪坊にものを思ひ、又落魄の身を國府津在前川村にある透谷の家に寄す。

この頃、旅に死なんとして、夜の海岸に身を投ぜんとす。漂泊一年。

晩秋恩人吉村氏の大川端に歸る。

十二月、母、家を擧げて上京。下谷三輪町の兄の新居に移る。

明治二十七年（一八九四）

二十三歳

雜誌「文學界」の同人として、初

笑ふに似たり。恰も我が力なく能なく氣なきを罵るに似たり。渠は斯くの如く我に透徹す。而して我は地上の一微物、渠に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。

…聖にして熱ある悲慨我が心頭に入れり。罵者の聲、耳邊に在る如し。我が爲すなきと、我が言ふなきと我が行くなきとを責む。（「一夕觀」より）

東學黨の亂起り、遂に日清戰爭始

り船で高知に馬場孤蝶氏を訪ふ。
旅先より文學界のために寄稿す。
土佐より再び近江に引返し、石山の茶丈に假寓す。刀工堀井來助翁と知る。

吉野の旅で初めて煙草をのむことを覺えた。それからの煙草好きはこの旅の間に覺え初めた習慣からであつた。

夏、北村君の心配によつて旅から招かれ、戸川、平田の三友と箱根に集まる。友の前に、熱い涙流る。

文學界創刊。悲曲琵琶法師（古藤庵）吉田兼好（禿木）阿佛尼（天知子）文章の道（巖本善治）富嶽の詩神を想ふ（透谷）漫詩（無聲）を載す。
モーパッサン自殺す。河竹默阿彌逝く。

□

透谷の文章
『ある宵、われ窓にあたりて横はる。ところは海の郷、秋高く天朗らかにしてよろづの象、よろづの物、凛乎として我に迫る。恰も我が眞卒なりざるを

星野兄弟、それから新しく知つた平田禿木等と雜誌「文學界」を起さうと計畫す。

明治二十六年（一八九三）

二十二歳

人を愛する事の苦しさに教會の籍を退き、恩人吉村氏の家をも出で、一月のはじめ漂泊の旅に出づ。東海道を徒歩で熱田に出、それより伊勢に渡り、芭蕉の生地伊賀を經て近江に入り、更に吉野に西行の跡を訪ね。神戸に立寄り、こゝよ

涙やどせる花の環は、
ぬれたるまゝに葬りぬ。
（「面影」の譯より）

内田魯庵譯にてドストイエフスキイの「罪と罰」出ず。讀賣新聞歴史小說懸賞募集に、高山樗牛の「瀧口入道」入選す。

透谷の「蓬萊曲」出版さる。

子規日本新聞に「芭蕉雜談」を連載しはじむ。

英語の教師として赴く。同校に勤めてゐた星野天知氏と知る。牛込の或る塾の離座敷に假寓す。栗本鋤雲、田邊蓮舟の二先生を知つたのもこの年だ。芭蕉を追求するかたはら、李白、杜子美に心を寄す。またラスキンの「モダアン・ペインター」を巖本氏の書棚に見つけた。

年の暮、明治女學校を辭す。不思議の變化が青年の內部に起つて來た。その苦しさと惱ましさに行詰つた爲であつた。

藤森成吉等生る。

オフエリアの歌。

いづれを君が戀人と
わきて知るべきすべやある
貝の冠と、つく杖と、
はける靴とぞしるしなる。
かれは死にけり、我ひめよ、
かれはよみぢへ立ちにけり、
かしらの方の苔を見よ
あしの方には石立てり。
柩をおほふきぬの色は
高ねの花と見まがひぬ。

北村透谷の文章を愛しはじめたのもその頃からだ。

明治二十五年（一八九二）

二十一歳

徴兵検査、乙種國民兵に編入さる

木村熊次氏の紹介で巖本善治氏を知り、氏が主宰する「女學雑誌」の爲に飜譯の仕事を助けた。この頃筆名を古藤庵、また無聲とした。巖本氏の紹介で、北村透谷と交る（當時透谷は二十五歳であつた。）

四月、巖本氏の私立明治女學校へ

エの「ツアラトウストラ」成る。セザンヌの「ガルタ取る人」成る。廣津和郎等生る。ゴンチヤロフ逝く。

井上哲次郎等に依つて大に國粹保存主義唱へられ、宗教と教育との問題論議さる。

萬朝報創刊。

日本勞働協會成る。

鷗外の「水沫集」内田魯庵の「文學一斑」出づ。

ワルト・ホイツトマン、テニスン等逝く。

秋、郷里より母一寸上京す。

成る。
新島襄、ラスキン、ゴッホ等逝く。

明治二十四年（一八九一）

二十歳

明治學院卒業。卒業生一同にて校庭の一隅に記念樹「楠」を植ふ。
學友馬場孤蝶氏土佐高知のある私塾に英語教師として赴く。その時吉村氏は横濱に雜貨店を開いた。その手傳として、しばらく横濱の方に行つた、テインの「英文學史」一册を風呂敷に包んで。

濃尾大地震。
露國皇太子大津にて遭難さる。
國木田獨步の「武藏野」民友社より出版。
坪内逍遙等によつて「早稻田文學」創刊さる。
齋藤綠雨の「油地獄」巖谷小波のお伽噺「こがね丸」出づ。正岡子規「俳句分類」編纂を企畫。ニーチ

方へ、またずつと遠く目黒の方まで獨りで歩きに出掛た。そして鬱屈した胸の苦痛をそこに泄した。

新聲社同人に依りて泰西名詩抄譯「於母影」出づ。

菊池寛生る。

明治二十三年（一八九〇）

十九歳

湖中編「芭蕉一葉集」西行「撰集抄」黄山谷詩集を大川端の家に、ダンテ「神曲」バイロン詩集、ゲーテの作物等を寄宿舍に耽讀、また西鶴、近松の作物にも親しんだ。夏期學校にて大西祝氏の講演に感す、御殿山にて、美しい落日を見た。

教育勅語を賜る。

帝國議會第一回開催さる。

民友社より「國民新聞」創刊。

國文學の復興起り國學院創立され又日本文學全書博文館より出版さる。國民の友夏期附録に鷗外の「舞姬」出づ。

アナトール・フランスの「タイス」

ら基督教の洗禮を受けた。氏は共立學校時代に英語の教師であつた人だ。

大川端から一里の道を通學したが、遂に、暫く木村氏に寄寓し、後、寄宿舍に入り、土曜日に濱町に歸る事にした。ウォーズオス、バーンズ等に心を寄せ、その傳記の抄譯を試む。青少年期の惱みに遇ひ、漸く學業を怠りはじめた。そして同級の中でも僅かの人にしか口を利かない程默し勝にのみ時を送つた。時には御殿山の裏手の

佛蘭西民主百年祭行はる。

文部大臣土方久元を會長として、「日本演劇協會」設立さる。

ゴットフリート、ケルレル、ローデンバッハ、ブラウニング等逝く。

ニーチェ發狂す。

森田思軒の「探偵ユウベル」出ず、ユーゴーの反譯なり。紅葉の「色懺悔」露伴の「露團々」出づ。

森鷗外を主宰として評論雜誌「しがらみ草紙」政教社より「日本新聞」春陽堂より「新小說」共に創刊さる。

赤煉瓦の煙突が、青い芝生から生えた様に立つてゐた。學生は霜降の制服の少し緑色がかつたのを着て、胸のあたりに金釦を光らせた。戸川秋骨、馬場孤蝶の兩氏もそこに机を並べてゐた。

ジスレイリの政治的生涯を空想し政治家たらんと思つたのもこの當時のある日のことであつた。

主義唱道さる。

雜誌「女學雜誌」「都の花」相次いで創刊。

二葉亭譯ツルゲニエフの「あひゞき」「めぐりあひ」美妙齋の「夏木立」等「國民之友」誌上に出づ。

ブランデス「露西亞印象記」イプセン「海の夫人」成る。

ガルシン自殺す。

明治二十二年（一八八九）

十八歳

高輪臺町教會で牧師木村熊次氏か

憲法發布さる。

森有禮刺客に遇ひて横死す。

吉村一家と共に銀座より、日本橋濱町不動新道に移る。そこはすぐ大川端であつた。山から來た少年はそこで水を樂しみ、また兩國に灯を見に行つた。こゝの庭には古い楓や、靑桐や、乙女椿があつた。

三田英學校より、神田共立學校に轉じた。

この年、明治學院に入學す。

ブランデスの「十九世紀文學の思潮」成る。

德富蘇峯氏等によつて民友社組織され、雜誌「國民之友」創刊さる。

ツルゲニエフの「ルージン」二葉亭四迷譯「浮雲」として公刊さる。

柴東海散史の「佳人の奇遇」出づ

明治二十一年（一八八八）　十七歲

明治學院は丘の上にあつた。高い

三宅雪嶺等に依つて政教社生れ、雜誌「日本人」を創刊、大に國粹

で、きまりで左の肩をあげ、すこし首を傾けながら向ふからお堀端を歩いて來るのでした。——そこで父さんは眞似

明治十九年（一八八六）

十五歳

るつもりもなくその學生を眞似て、自分でも左の肩をあげたり、すこし首を傾げたりして歩いて見ましたが、いつの間にか知らない人の癖が父さんに移つてしまひました。』

「藤村讀本」第二卷より。

三田英學校に勉學す。

明治二十年（一八八七）

十六歳

ユーゴー逝く。

若山牧水、北原白秋、武者小路實篤、大杉榮等生る。

末松謙澄等主唱演劇改良會起る。

トルストイ「闇の力」成る。

美妙齋の「風琴調一節」出づ。

石川啄木、谷崎潤一郎等生る。

オストロフスキー、ローウエル等逝く。古泉千樫生る。

ーの「萬國史」などを讀んだ。父は洋學が國を傷けるものだと思つてゐる樣な人だつたから、それを聞いてしきりに心配したが、遂にはこれを許した。

この年、父鄕里にて逝去。

明治十八年（一八八五）

十四歳

『父さんは銀座にある吉村さんの家から學校通ひをしましたが、毎朝の樣にお堀端で行逢ふ一人の學生がありました。父さんなどよりずつと年上の學生

片上伸生る

□

銀座大倉組の角に白い光のマーク燈が、尾張町角の日々新聞社の前に花瓦斯がついて珍らしがられた。

內閣制度組織さる。

尾崎紅葉、山田美妙齋、石橋思案等に依つて硯友社成り、次いで「我樂多文庫」創刊さる、逍遙の「小說神髓」「當生書生氣質」出版。

ローマ字會起る。

けて鉛筆畫の寫生を始めた。この頃から郷里の兩親へたよりを書いたが、父からの手紙に「貴様は繪畫を學ぶが好からうと思ふ」といふ意味の言葉もあつた。
中村正直譯の「ナポレオン小傳」を讀んで感激し、熱い涙を流した。
漸く心の變化が起つて來た。

明治十七年（一八八四）

十三歳
海軍省の官吏石井其吉氏といふ人に就て英語を學びはじめ、パーレ

「該撒奇談」兆民の「維氏美學」出版さる。
カール・マルクス、ツルゲニエフ、ワグナー、マネー等逝く。
秋田雨雀、高村光太郎、阿部次郎志賀直哉、ゲオルグ・カイゼル等生る。

藤田鳴鶴の「文明東漸史」出づ。
新派劇の運動起こる。
「英國フェビンヤン協會」成立す。

少年はまたそこに溫い心を見つけた。それは黑い土藏造りの家であつた。

父一寸上京す、父が「散髪」にしたのもこの旅からであつた。

この時、父と共に舊尾州藩主を訪ひ、また赤煉瓦の學校に案内す

體詩抄」出版、テニスン、キングスレー、ロングフェロー、グレー等を紹介す。

エマースン、ロングフェロー、ダーヰン等逝く。

有島生馬、山本鼎、小川未明等生る。

明治十六年（一八八三）

十二歳

繪畫に興味を持ち、自分で見たまゝを畫にしやうとして、築地の居留地やまた參謀本部の方へも出か

官報發刊始まる。

ブランデス「イブセン論」モウパツサン「女の一生」成る。

矢野龍溪の「經國美談」坪內逍遙

年	年齢・事項	一般事項
明治十四年（一八八一）	**十歳** 高瀬氏は一家をあげて郷里の木曾福島町に歸つたので、その愛の手を離れて高瀬の知人力丸元長氏といふ人の許にしばらく寄寓す。周圍の空氣に對して自分の少年らしい感情を隱す樣になつた。	露帝アレキサンドル二世虚無黨員に弑せらる。ドストエフスキー、カーラエル逝く。ザイツエフ、パピニ、小山内薫等生る。中江兆民「政理叢談」出版
明治十五年（一八八二）	**十一歳** 秋、銀座四丁目の吉村忠道氏方に移つた。吉村氏は高瀬と同郷で、書生を愛する心の深い人だつた。	兆民に依つてルッソォの民約論の反譯「民約譯解」出づ。外山正一、井上哲二郎、矢田部良吉共譯の「新

孝經、論語などの素讀を受けた。

明治十三年（一八八〇）

九歳

父兄に勸められて次兄と共に東京に遊學す。途次、木曾川の靑いのを見、中仙道を經て乘合馬車にて萬世橋に入る。旅七日。姉園子の夫の家京橋鈴屋町に身を寄せ、泰明小學校に通學す。

創始なり。

永井荷風、正宗白鳥等生る。

ドーミヱ逝く。

六合雜誌創刊さる。

フローベル、ヱリオット等逝く。

吉江喬松生る。

□

その頃の銀座の家は、灰色の圓柱の並んだ煉瓦造りで、泰明小學校も古風な赤煉瓦だつた。

明治十二年（一八七九）

八歳

神坂村小學校へ通ひはじめた。

『祖父さんは學問の人でしたから、「千字文」だの「勸學篇」だのといふものを自分で書いて、それを少年の讀本のやうにして幼少な時分の父さんに教へて呉れました。山の中にあつた父さんのお家では何から何まで手製でした。手習のお手本まで、祖父さんの手製でした。』

「ふるさと」より。

尙、父から幼年期の終りの頃には

めて紹介さる。

帝國學士院設立。中澤臨川、有島武郎、與謝野晶子、橫瀨夜雨、アルツエバーセフ等生る。ルツソオ逝く。

トルストイ「我が懺悔」イブセン「人形の家」ストリンドベルク「赤い部屋」成る。

クロポトキンの「青年に訴ふ」瑞西ゼノアの「革命」誌上に出す。

織田純一郎に依つてリットンの「アーネストアルトラバス」の反譯「花柳春話」出す、反譯小說の

年	年齢・事蹟	事項
明治九年（一八七六）	五歳 『父さんの生れた田舍は木曾でも、美濃の方へ降りようとする峠の上にありましたから、お家のお座敷からでもお隣りの國が山の向ふの方に見えました。そこには遠く繪の様な平野も眺め	海老名彈正等に依つて熊本バンド成る、基督教弘布の結社なり。ツルゲニエフの「處女地」成る。バクーニン逝く。蒲原有明、近松秋江、等生る。
明治十年（一八七七）	六歳 られました。極くお天氣のいゝ日には、遠い近江の國の伊吹山まで、かすかに見えることがあると、祖父さんは話して吳れたこともありました。』（「ふるさと」より。）	西南の役起る。海外に露土戰爭。イプセン「社會の柱」成る。クルーベー逝く、薄田泣菫窪田空穗等生る。成島柳北の「花月新誌」出づ。
明治十一年（一八七八）	七歳	服部德に依つてルツソオの思想始

のはじめに生れて來たものは、文學でも美術でも德川時代の末にすら比較しがたいほど見劣りのする粗末なものばかりだ。明治維新の齎らしたものは、

トルストイの「アンナ・カレンナ」成る。

渡邊溫澤「通俗伊蘇普物語」出づ。

明治七年（一八七四）

三歲　その一面に於て、こんな深刻な影響のあることを想ひ見ねばならない。封建時代の遺物といふ名の下に、あらゆる文化が蹂みにじられはしなかつたらうか。

佐賀の亂、臺灣征伐起る。一般兵役義務施行。讀賣新聞社創刊。

サイモンズ「伊太利及びギリシヤ紀行」成る。

明治八年（一八七五）

四歲　詩も隱れ、繪畫も潜み、あらゆる藝術は一時姿を晦したかに見える。……

「春を待ちつゝ」より

平田禿木河井醉茗等生る。

新島襄等によつて同志社創立。

小栗風葉野口米次郞等生る。

ワグナーの「ニーベルンゲン・リード」出づ。

明治五年（一八七二）

誕生

二月十七日信濃木曾神阪村字馬籠に父正樹四男として生る。父は故平田篤胤の門人であつた樣な人で、昔風に髪を束ね、それを紫の紐で結んで後に垂れてゐた。靜かなその書院の前には松、牡丹などがあつた。

東京朝日新聞創刊。
東京横濱間初めて鐵道開通す。横濱に初めて基督教會堂建つ。
樋口一葉、佐々木信綱等生る。
テオフイール・ゴーチェ逝く。
エーツェの「悲劇の誕生」成る。

明治六年（一八七三）

二歳

『私達が唯、結果に於て知り得る樣な、父の時代をもつとよく知りたい。明治

岩倉具視一行、歐米の視察より歸朝す
綱島梁川、泉鏡花等生る。

藤村年譜

明治四年
（西暦一八七一）

『私は少年時代を振返つて見て、自分の物心づく頃から、明治二十年頃までの間は、かなりに暗かつた時代の様に思ふ。

おそらく西南戰爭以前の十年前はもつと暗かつたらう。』

「春を待ちつゝ」より

△ロシアでは十年前の六十一年の頃より農奴解放運動が熾んになつてゐた。

廢藩置縣施行。
各縣に小學校設置さる。
橫濱新聞創刊、日本最初の日刊新聞なり。
田山花袋、德田秋聲、高山樗牛、島村抱月、レオニード・アンドレーフ等生る（前年ニコライ・レーニン生る）
魯文著「胡蝶圖解」出版さる。

大川端

藤村の歩める道

山崎斌著

寫眞

目次

の一巻を抱いて再び東京に還る日のことを思ひつゝ、そこには先發の船の「船の筋」に導かれる感慨もあつて「この人」のことがまたなくなつかしまれる。兎に角、私は何ものへの拜跪とは知れないながらも、その拜跪の後にこの執筆を始めたものではある。

大正十五年・伊豆土肥温泉竹青莊にて

著　者

ところであらう。それにしても、私は適當でない、これには他に適任者があるであらうと話した。私にはたゞ先生に對する深い敬愛と熱意とが自らに信じられる丈だ。これ丈では仕方ないとも話した。然し、私共は結極、では二人の熱意に手賴つて、この至難な事業を始めて見やうではないかといふ相談をまとめた。そして溜息をついた。――あの漆黑に美しかつたといふ先生の髮の毛か、銀白の今日の輝きとなるまでに、本當にどんな朝と夕とがあつたのだらう――私は、まづこれを自らの衷に言つて見て當惑は漸く一つの煩悶にさへなつて來たことを知つた。

私の樣にわかいものにも、尙十年の餘も年少な長尾宏也君といふ友人がある。この若い友もまた、ひどく私を勵ましてくれて、助力を言つて吳れた。また書肆の米林君も版を重ねる樣であつたら改訂を行つてもいゝからと、それまでに熱意を見せて吳れた。遂に力を得た私は玆に、先生に對する――「先生の步める道」を思ふ私の愚かしいスタディを發表することにした。

それにしても、これは三年に及ぶ私の靜かな伊豆西海岸の生活の記念である。私はこ

これも先生の心持を見つけられる「佛蘭西だより」の中の言葉だ。さうだ、生じつかのことをするよりも、たゞ著書の題目だ。さうではないか。そして、そこにはいゝ年譜とでも言ふものがあればいゝ。——私はそれを米林君に話した。君はそこに正しい出版者の様であつた。そして、私のこの言葉にも深い共鳴を見せてくれた。そこで、私は二人の間に、その意味に於ての先生の五十五歳までの年譜を作らうではないかと話した。

然も、それがまた困難である。全集第十二卷の卷末に先生自ら執筆されたらしい「年譜」のはじめに私共は、左のやうな言葉を見つける。

『交つて見た人、愛讀した書籍、親しみの深かつた自然、さういふものから形造られて行く心の歴史に人の生涯の眼に見えない重要な部分がある。それを簡單な年譜には作りがたい。こゝには僅かな學歷のやうなものや著作の順序なぞの極大體の輪廓をしるすにとゞめる』

眼に見えない重要な部分——これは、その人、それ自らの手によつても書き現し難い

『この十二卷のつたない著作のどの部分を開いて見て貰つても、私が居る。幾度か挫折したり落膽したりした私が居る。熱い汗と、冷い汗とを同時に流しつゞけて來たやうな私が居る。僅か一歩か二歩踏み出したのはまだ昨日のことのやうに思はれながら最早髮の白い私が居る。これが私だ。――』

これが、全集の序の言葉だ。――私はそれを思つた。さうだ、先生には「全集」といふ樣なこんないゝ自らの肖像もある。

『巴里のサン・ミツセルの通りに接してルユクサンブウル公園內の草地の一角に、昨年の夏あたりある臺石の据付が仕掛けてあつた。その邊はジョオジュ・サンの石像のあるところに近い、誰かの像でもあの臺石の上に置かれるのか、と思つたら、出來上つたのを見ると白い大理石の碑だ。

スタンダアルに獻ず。

として、その下にあの文學者の生死の年號が彫つてある。碑の裏面には「ド・ラムウル」を始めとして、著書の題目のみが表してあつた。床しい石碑と思つた。』

た。これは勿論正しい意味での壽像の意味だ。殊に今年は、先生の思ひ出の小諸に、藝術的の意味での「詩碑」が建つといふではないか。機縁だと思はないか、正しい機會ではないかと君はすゝめた。

私は當惑した。そして言つた。それはいゝ、勿論島崎先生の様な人は、本當の晩年に達せられるこれからが、いよ〳〵尊い像（すがた）をなすのであるけれど、またあれほどの人の今の像（すがた）も、たしかに一つや二つの胸像を造らせてもいゝだらう。然しそれが難かしいのだ。さうではないか。遺傳を異にし、還境を異にした人の上を思ふことほど方途のつかないものがあらうか、殊に、先生の様に「よき白髪」に近いやうな人に於て——と私は言つた。鼻に癖あり。まづ、その一つ丈でも大變ではないか。勿論、それほどに言ひ放つて置けるならばそれでいゝ。また或は、これを最も正しい描出とも言はれやう。然し、本當にそんな調子でいゝのか。どんな癖だといふことにはならないか。それだ、殊に、癖も癖、なか〳〵先生の様な人の癖は難かしい。そしてそれは鼻ばかりではない、あの眼だ、口だと言つて私は苦笑した。

はじめに

H. Shimazaki 日本人。身の丈低し。髪黒。鼻に癖あり。——
これが、あの「戰爭の巴里」に於て、佛國官憲が作つて呉れた「島崎藤村先生の人相書だといふ。千九百十年八月二日、巴里にはあの戰亂に因る戒嚴令が布かれた。そして、巴里在留のエトランゼェは皆警察署へ出頭してその國籍を屆出さなければならなかつた。その時のことである。「書記は事務所風の机の上に私共の旅行券を展げながら、じろ〱と私の方を眺めて、簡單な人相書を書いてくれました。——」と先生はその佛蘭西だよりの中に書いてある。

——それにしても、私は何故に、こんなことをまづこゝに書きはじめたのだらうか。

私は、この間、友人武藤直治君を介して未知の人弘文社米林保吉君の依囑を受けた。島崎藤村先生の思想とその生活とに就いて、一册の書物を書いて呉れといふ事であつ

大正十五年七月十日

吉江喬松

さらに一層の嚴肅さ、峻嚴さ、神秘さに全身のおのゝきを感ぜずにはゐられなかつた。

情熱のロマンテイク、神秘に直面したレアリスト、島崎さんの歩まれた途には、一點のなげやりもない。ユング・フラウの頂上に立つた者は、理想と現實、理智と美との混融共存を痛感するやうに、「新生」に於て人は情熱と理智と、藝術と現實との一點ゆるぎなき溶合の權威に打たるゝのである。レアリズムの究極結晶である。日本に於ける現實自然主義の文藝は、この「新生」を得て初めて睛を點じ得たのである。

山崎斌氏のこの書物は藤村研究者にとつて、最も大切な最も正確なクロノロジイであり、詩人小說家としての島崎さんの心理經路、藝術發展の忠實なる歷史である。恐らく何人が書かうともこれ以上忠實には書き得られないであらう。私はこの書に序を付することを依賴せられて光榮にも感じ、同時にその資格なきものであることを考へもした。併し、永年の島崎さんの愛讀者の一人として、また文學研究者の一人として、心から悅んでこの感想を書き記したのである。この書にとつて、この序などは何の意味もなすものではない。この書の價値は嚴然として藝術的に、心理的に、さらに歷史的にその意義を十分に發揮してゐるのである。

歩氏の新計畫に對する否定的の批評であつた。それを獨歩氏に報告すると、獨歩氏は「島崎君見たやうに、すつかりレエルを敷いてからでなければ汽車を走らせない人と、僕のやうに藪であらうが野原であらうが、思ひたつたら飛びだして行く者とは全く異つてゐるからね。君」といつて、爽かないつもの笑ひをたてた面影は今でも鮮かに浮んで來る。獨歩は氏主情的でも、熱情的でもない。むしろ最初から主智的な、思想的な閃きを見せたロマンテイクであり、それに北歐の影響を受けて瞑想分子の加はつたレアリストに開轉したけれど、日本の南國人に獨特な實行感が常に伴つてゐた。けれど詩人の實行感である。その實際上の企畫は、島崎さんの重厚な抑制力から見れば、いつも危ぶまれたにちがひない。

大正五年以後四五年佛蘭西にゐた間、私は巴里に於ける島崎さんの寓居せられたポオル・ロワイヤルの街路は幾度となく往復した。「民衆劇場」の創設者、モオリス・ポトシエ氏の家では島崎さんの贈られた中澤君の「トルストイ傳」をも見た。さらに場末街の薄暗い下宿屋で、本國から送つて來る東京朝日新聞に連載せられた島崎さんの「新生」を喰ひ入るやうに、一字一句までも含味して讀みながら、二十幾年以前に初めて「若菜集」に接した驚奇を思ひ出して、

押えられたる情熱のほのめきである。厚きゴブランをゆつたりとしぼりあげたる重厚さである。その襞の中に織りこめられたる人生の委曲は、何人をも深く魅せずにはゐない。ロマンテイクがレアリストに開轉する時、その人が熱情の人であるならば、そこに必ず深い一種の不思議さ、一種の神秘性がしぼりいださるゝものである。島崎さんの藝術の魅力はまさにそれである。同じロマンテイクであつたにしても島崎さんは決してセンテイメンタルではない。飽までパッシオンネである。主情的なロマンテイクがレアリストに轉開すれば、その人の藝術は平面的に廣がり、繪畫的に伸展する。熱情的のロマンテイクがレアリストに轉ずれば、その人の藝術は必ず鏤彫せられ、立體的になり、その體面の陰影に人生を刻みいだす。島崎さんは必然的に後者の途をとられた。

島崎さんが小諸を引き上げて東京へ來られた頃、明治三十八九年頃から四十年頃、私は學校を出たばかりで、國木田獨歩の下で毎日はたらいてゐた。その頃、獨歩氏の用事をもたらして時々島崎さんを御訪ねした。すると島崎さんは、その一つ一つの用件についてよく考へて下すつて、「島崎がさういつてゐたと克く國木田君にお仰つて下さい」と言はれた。それは大抵、獨

つたばかりの日本人が、初めて自由に、思ふまゝに太い呼吸をして、幾世紀胸臆にひそめてゐた湧き返る若い情熱を大空へ向つてはきいだした強い律動、それが結晶して藤村詩集となつたのである。この歡喜はまさしく若き日本の文藝的新生の歡喜である。この悅びを少年時代に味ひ得たことを私は心から感謝せずにはゐられない。

日本文明の步度は迅速である。明治二十年代から三十年代へかけてのロマンテイクの時代の末期頃、島崎さんは詩から散文へ轉ぜられた。「水彩畫家」その他を私たちはどんなに熱心に讀み耽つたことであらう。「破戒」と共に島崎さんはまつたくロマンテイクの域を脫せられた。日露戰爭と共に、日本文藝には現實自然主義の時代が來た。この時期がまた凡そ十餘年は繼續した。「春」、「家」なぞの長篇、その他の數多き短篇に於て、情熱の詩人であつた島崎さんはいかに手固きレアリストとして、深酷な觀照を人生に加へられた事であらう。濃き陰影がくつきりと島崎さんの藝術には彫みいだされてゐる。日本でも何處でも自然主義の作家の藝術には、取材に重きを置きすぎて表現に粗弃でありがちな傾向を時とすると見ることがある。けれど、島崎さんの藝術には全くその痕跡すらない。藝術のにほひは飽までも豐かである。理智に

りに自在に用ひ得たのは、まつたくこの若い情熱の然らしめたるところである。「若菜集」はこの意味で、一層直接に、一層端的に、日本人の情熱の結晶を、初めて豐富に我々の前へ展開して見せたのであつた。「若菜集」より「一葉舟」、「夏草」、「落梅集」にいたつて、戀愛の熱情は、さらに強くなり深くなつて、當時の青年の廣き地平線を憧れる「海にまで入らではやまじ」の熱意にまで昂まつて行つたのであつた。これは決して島崎藤村といふ一個人に限られたる情熱の披歴ではない。また一詩人の作詩技巧の問題ではない。或は技巧の點からのみいつたならば同じ日本のロマンティクの他の詩人に求むべきかも知れぬ。併し島崎さんの詩は、當代の總の若さを代表してゐた。總の熱情を包括してゐた。むしろ當代の若い情熱の波が湧き上り、盛り上つて、その全波の頂點が具體化して生れ出でたるのが詩人島崎藤村であるといふべきであらう。それだけ當代の若人等は新生の詩人の重厚な、底深き情熱のリズムを直接胸にひゞかせて、眠るにも醒るにも、そのリズムをもつて呼吸をしたのであつた。

これだけ際やかに、これだけ潑剌たる新生歡喜の經驗を味はうことは文學史上にもさう度々あり得るものではない。鎖國を解き放ち、文字の表現を持つことをゆるされて以來二三十年た

品もこの政治の波をくゞらずにはゐられなかつたのである。

二十三年に國會は開設せられ、二十七八年には日清戰役があり、初めて若い日本は國民としての自覺と自信とを持ち得たのであつた。その自覺と自信とを持つた當時の若い人々は、慌しい歐米文化の飜譯だけに屈從してはゐられなくなり、振返つて日本の王朝文學を推賞し、近松、西鶴、芭蕉を發見し、自國文藝の粹をあつめて國外文學を觀照しようとするにいたつたのであつた。國の内外の文藝要素はこの時その第一次として融合する姿をとつたのであつた。森鷗外氏、上田敏氏の飜譯美はこの空氣の凝化し具體化した記念像である。

島崎さんにはもちろんこの兩樣の要素が本來の詩人的素質によつて一層渾然として盛り上げられたのであつた。西鶴、近松の彩華と、芭蕉の幽寂と、それに西歐の諸詩人の清新な芳香とは一つにとけて、若き日本のロマンテイクの情熱を匂ひこぼるゝばかりに盛り上げたのであつた。あの頃、中澤君が全部寫して持つてゐた夭折した詩人中野逍遙の漢詩集「逍遙遺稿」なども、同じ若々しい熱情の所産である。漢詩といふ日本人にとつてやゝ不自然な舊詩形をあれほど自在に使用し得たのは、日本詩史に於て空前であり、もちろん絕後であらうと思はるゝばか

それまで私達が手にすることの出來たものには山田美妙齋氏の「青年唱歌集」とか、外山氏その他の外國の詩の飜譯とか、勝海舟の琵琶歌だとかいふものがないではなかつたが、初めて眞な情熱の新らしい定形詩に接した當時の少青年等は、新時代の日本の若々しい盛上る自由な情熱に心から酣醉もし、驚嘆もしたのであつた。

私はその後もたびたび、そして現に今でもさう思つてゐるのであるが、私達が明治二十年代の末頃に「若菜集」に接して抱いたやうな純眞な驚喜の感情をもつて、現在の中學生なぞが讀み耽ることの出來るやうな新詩集が果してあるであらうかと。それを確かめて見ることは全く困難なことではある。けれど、私には、どうもそれがありさうには思はれない。現在の私の心持からそれを推定するのではないが、文學の歴史の上からいつて、あの當時の少青年が感じたやうな驚喜はさう屢々與えられるものではないからである。

日本は明治維新以後、凡そ二十餘年を新文化建設の準備に費してゐた。西南の役以後、國會の開設までは、當時の青年の夢想は盡く政治の方面に向けられてゐた。實際二十年までの間に現はれた文藝作品とては、多少の程合ひの相異こそあれ、盡く所謂政治小説であつた。文藝作

序に代へて

明治二十七年頃であつたと思ふ、當時松本中學の二年生であつた私は、一つ二つ年上の故中澤臨川君がゐた學校の寄宿舍——舊い五層の天主閣の下の、蓮の葉の一面茂つてゐる濠に臨んだ窓で、「文學界」といふ雜誌を開き讀みしてゐた。そのなかに島崎さんが書かれた文章で、題は忘れたが、「四鳥のわかれ、憂きわかれ……」と書き出してあつたのを、中澤君と二人して幾度も繰り返して讀んで、幼ない心にわかつたやうなわからないやうな不思議な心持をしたのを今でも覺えてゐる。

やがて明治三十年頃、「若菜集」が出た。たしか中村不折氏の挿繪ではなかつたらうか。中學の上級生になつてゐた私達は、まつたく夢中になつて、あれに讀み耽つたものであつた。その他に「水沫集」だの、「國民小說」だのといふものを同じく愛讀しておかなかつたものであるが、「若菜集」によつて、初めて若々しい詩といふものに接した悅びは、私達ばかりでなく、おそらく當時の日本の中學の上級生ぐらゐの年輩の少年を盡く魅し去つたのではなかつたらうか。

のか好いものだ。障子も紙の色の変つて行くところ少し趣がある。それを張替へとばほど室内に光景を一変させるものをない。忙がしい手習を見つけて障子の切張をしてゐる時など妙に心が落ちつく。そこへ客が訪ねて来てくれたりなどすると思ひの外話が出来てうれしい。

島崎藤村

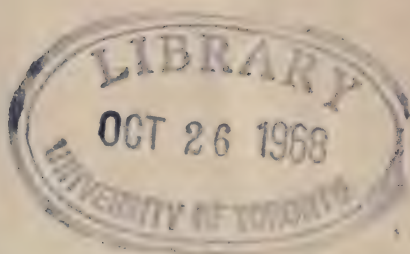
ると。

障子

障子といふものを面白味の多い、好ましいものだ。夏はつけ雨はつけ、明るくなつたり暗くなつたりして私の心をなぐさめる。障子を内から見て面白いばかりでなく、外から見ると感じも好い。町は見つけと窓に白い小障子なども趣がある。燈火の映つた

柚湯

冬至の日の午後まで、柚湯に入りに行くと、湯屋の番頭も一緒に入つてゐて、香油でも流したやうな浴槽の中に浮いてゐる黄色い柚、お匂ひをかぎながら、どうも菖蒲の方だと浮いてゐて賑やかだが、柚といふ奴は直ぐ沈んでしまつて張合がない、と私に話して

故郷にある芭蕉の句碑

藤村の歩める道

山崎　斌著

弘文社版

□

最も強い喜びの一つは正確な言葉を感得し、それが思想に従ふ事である。新しい木の葉の自らを示す美しい葉脈、私達の先人が遺して呉れたのはこれだ。

——フランス・ジャンムの言葉——

五十一歳

藤村の歩める道

山崎斌著

弘文社版